

緋の黎明

銀河系大戦史

猫屋 ねこや

真 まこと



主要な登場人物

シエルメス連邦側



**リーフラム・トゥ
リユー・ネレイド**

銀白の髪、漆黒の瞳の、若い羚羊を思わせるほっそりとした肢体と美貌を持ち合わせた青年。天才的な参謀としての才能に恵まれる。連邦空軍艦隊の総参謀長で

少将。連邦暦五四七年六月二日生まれ。

メイリア・トヒユナ・リアー



水晶色の髪と群青色の瞳を持つ、メルティア王国の王女。“銀河系大戦”開戦直後に希望して連邦空軍艦隊旗艦『シグナ・フォース』号に乗り込む。通称メイ。のちに

王女中尉とよばれるようになる。

レイフラム・ナイザル・ネレイド



リーフラムの父。上院議員で、シエルメス連邦最大の政治的実力者。ギリシア彫像のような男性的な容貌と強壯な肉体の所有者。政治的な野心も強く、“霸王”、ビッグ・ナイ

ザルなどと通称される。



**レイラー・ド・ナ
カースル**

リーフラムの親友。士官学校卒業後は敬腕の航法士官として累進し、作戦先任参謀大佐としてリーフラムを補佐する。酒豪。連邦暦五四四年九月九日

生まれ。

フアーリア・トヒユナ

メルティア・スルフエイク侯爵の長女。マーシャネス・オブ・スルフエイク。水晶色の髪とスカイ・ブルーの瞳の少女。メイリアの姪。

サイモン・ユーゼルフ・ノウラン

ナイザル・ネレイドの妻ステイシー・フランセスの兄。連邦最大の巨大資本シュレフ・コングロマリット最高経営会議のメンバー。レーフル・ファウルの伯父にあたる。

エルウィン・レーフクイ・カーツ

連邦空軍大将。艦隊最高司令長官。

エイムズ・レイモンド・ナウシユヒル

連邦空軍中将。第二艦隊司令官。実質的に連邦空軍艦隊の副司令長官を勤める。

ドウルニトウ・ラアム

連邦空軍唯一の元帥。空軍長官。

シャウド・レムトゥファアン

中将。連邦空軍第一艦隊司令官。

リー・タウンナー

シエルメス連邦の現大統領。連邦史上最も剛毅な大統領といわれる。

カーリッツ・レークシー

シエルメス連邦副大統領。

エミル・ノーラ

『シグナ・フォース』号軍医長を努める一七歳の軍医中尉。通称エイミー。

ラルク・トヒユナ

メルティア・スルフエイク侯爵。スルフエイク州行政参事官を兼ねる。連邦暦五三七年生まれ。水晶色の髪とブルーの瞳の瀟洒な紳士。

ル・ラント共和国側

クローネス・マールク



ル・ラント宇宙軍に二人しかいない元帥の一人。ル・ラントでの内戦“ドレド戦役”の英雄で天才的な用兵家。やや痩身、おさまりの悪い黒褐色の髪。太い眉と濃い灰色の汗毛とした目の青年。

ネイス・ミュツケル



共和国第一艦隊司令官。淡い色の瞳の癖のない金髪、翠色の瞳の端正な青年。柔和な印象にもかかわらず、戦術能力ではマールクを上回るとされる“智将”。アリシア・ミュツケルの双子の弟。

アリシア・ミュツケル



ネイス・ミュツケルの二卵性双生児の姉。華麗な黄金色の巻き毛と碧みの強いグリーン色の瞳の所有者。上院議員。対連邦開戦反対派のリーダー。“ドレド戦役”で兵役を強制されるまでは教育学専攻の大学生で、チア・リーダーも務めていた。“お転婆アーシャ”という通称も持つ。

ヒースクリフ・ローナク

共和国第一艦隊司令官。金髪碧眼の華麗な若者。



“猛将”と称される、“マールク艦隊の三将”の一人。

ファートウリック・ラング

第四艦隊司令官。瀟洒に整えたブラウンの髪と瞳の紳士。元惑星物理学専攻の学生。航宙母艦艦載機戦闘の専門家。

セルティ・マックス

第五艦隊司令官。人並みはずれた長身。少し薄くなりかけた髪とひよる長い手足、猛烈な早口が特徴。マールク艦隊首脳での最年長。

レイトゥラント・シャブリ

第六艦隊司令官。年齢の割に白いもの目立つ濃い灰色の髪。薄い茶色の目のハンサムな青年。通称レイティ。補給路整備・後方支援作戦のエキスパート。

メル・ヤンデキフィティ

第七艦隊司令官。鉄色の髪と瞳。攻勢の剛悍さで知られる近接格闘戦闘のエキスパート。志願兵出身。

クリース・ローク

マールクの副官。ショートカットの紅茶色の髪と琥珀色の瞳の所有者で極端に無口な女性士官。元本国艦隊司令官ローク中将の長女。

デスタリヴァ・ドロク

共和国宇宙軍参謀本部総長。マールクと並んで、宇宙軍ただ二人の元帥の一人。堂々たる偉丈夫。フォルター・ワシエック

共和国宇宙軍参謀本部次長。大将。極端な肥満体と極度の近眼を身体的特徴とする、ドロクの腹心。外見に反して宇宙軍士官学校始まって以来の秀才と言われ、ドロクの意を受けて様々な謀略を巡らせる。

クラージェル・ブラウエン

共和国政府軍需相。狂信的な主戦主義者で、“宇宙の大義”が口癖。ジェリコウ・シュジユケイ

共和国政府外相。“ドレド戦役”での最後通牒を“書式が違う”と“却下”したことで知られる官僚政治家。

ゾンマーフェルト・ロヴェル

共和国上院議長。政府与党の領袖

ファウネス・ワイアトゥルプ

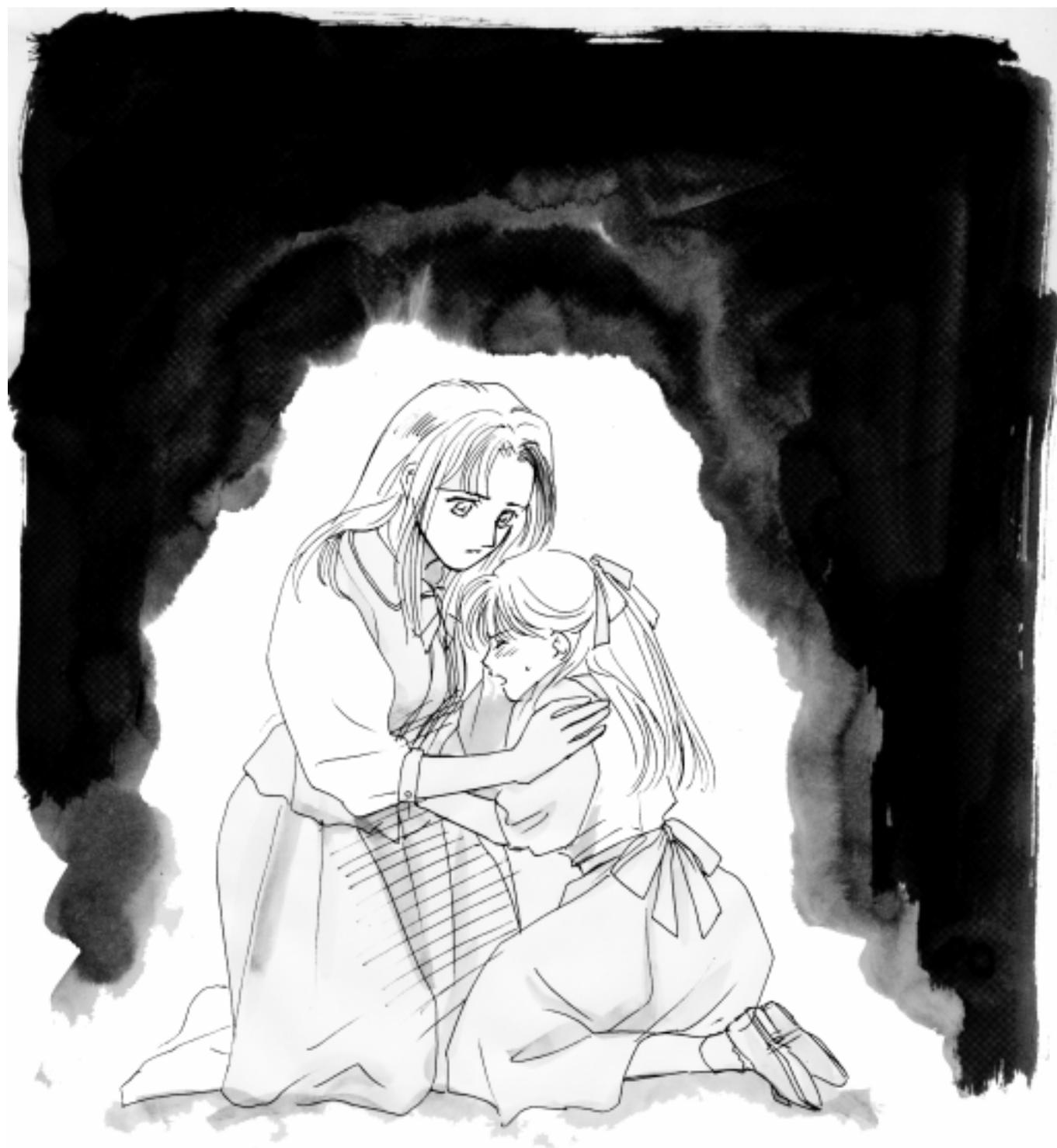
共和国政府蔵相。

ウォロンステッド・オレーク

准将。ドライバオム宇宙要塞兵站監。









プロローグ 銀河系大戦史

西暦二一〇〇年代後半に、念願の恒星系間航行技術の開発に成功した地球人類は、地球と太陽系を離れ、外宇宙への進出を開始した。既に太陽系に属する惑星と衛星群は開発し尽くされていた。数百億に達する巨大人口の圧力の前に、人類の生存圏は飽和状態に達していた。太陽を含む銀河系第三肢。人類は太陽を起点とする銀河系の周辺宙域を“東銀河半円”と称し、他の宙域を“辺境宙域”と呼んだ。

しかし、銀河は直径十萬光年余りに達する。属する恒星系二千億の巨大な銀河の座標の原点を、地球という辺境の一惑星に置く。そのこと自体が既に人類の思い上がりを示してはいなかったらうか。人類に比類ない到達能力を与えた恒星間航行技術のゆえに、人類は宇宙の真の広大さを知る機会を永久に失った。一口に数千光年と言っ。しかし、その真の大きさを具体的なものとして認識することは人間の能力を超えている。まして、ワープ航法により数百、数千光年をすら数十日でカバーしてしまった場合には、宇宙の広大さのどれほどを認識できるといふのか……？

“必要がない”、人類は傲然とそう言い放ってはばからなかった。宇宙の広大さなど認識するには及ばない。ワープ技術の開発とともに種としての発祥以来、人類にとって絶えることなくその手かせとなり、足かせと化してきた最大の障壁“資源の枯渇”。その最大の障壁から史上初めて人類は解放されたのだ。人類の前途には無限の沃野が展開し、その余りの広大さは、伐り拓くべきフロンティアの限りなさ

それを手にした人類の無限の発展をこそ保証するものだった。それが脅威であるはずなどなかった。事実、“より遠く、更に遠く”の言葉通り、人類は日を追うに従い、加速度的にその主権の及ぶ範囲を拡大していきつつあった。居住可能と判断されたあらゆる惑星にはその領土的主権を主張する色とりどりの国旗が翻り、宇宙コロニーが建設され、また居住不可能と思われるようなガス状巨星には、水素、ヘリウム、メタンなどの採集ステーションが構築され、惑星の夜空を彩った。人類の飽くことなき好奇心と、膨張への圧力はとどまることを知らなかつた。地球を起点として半径約七〇〇〇光年、僅か三世紀を経ずして、人類は“東銀河半円”のほぼ四分の一に、その支配権を及ぼすに至った。総人口は三〇〇億を遙かに上回り、有人惑星は千有余、その足跡を記した恒星系は一〇〇万を超えたのである。

だが……僅かに一〇〇万。“東銀河半円”に属する恒星系のみにてもその総数は優に一〇〇〇億余りに至る。人類が傲慢にも“居住圏”を唱える半径一萬光年足らずの空間の中に僅かに一萬にも満たない有人惑星が散在する。

余りにも広大に、しかも急速に人類が拡散してしまったことを憂える声があつたわけでは、実はない。

西暦二三〇〇年代前半、超大国と称されたアルデバラン恒星間連邦大統領を務めたコールドン・W・ミルズは、地球圏が政治的には全く相互に孤立しているにも等しい状態であることを指摘し、早期に全人類的な再統一、即ち“統一された唯一の政府”が形成されなければ、いずれ人類は、かつて地球上で数千年にわたって繰り返された愚行の宇宙的な再現に巻き込まれるであろうと主張したのである。

長期的、或いは超長期的に見るならば、ミルズの卓見は賞賛に値する。が、彼の発言の真意が、彼の統轄するアルデバランを“統一され

た唯一の政府”の盟主に据えよつとしたものであつただけに、本来なれば歓呼をもつて迎えられるべきこの主張も、当時においては無数の洪面と、反対の怒号、益するところのない外交的な緊張をもつて報われたに過ぎなかつた。しかし、“東銀河半円”はまだ充分に広く、フロンティア開発に注ぎ込まれる人類の情熱と、もたらされるおびただしい富とは、あらゆる矛盾を華やかな色彩の中に取り込み、薄め、無毒なものに化せしめることに成功した。困難と、停滞と、不可能とが忘れ去られたミレニアム“人類の最良の時”はほぼ三〇〇年にも及び、人類は今や銀河系の唯一にして絶対の主となりおせたかに見えた。

無形の怪物……無限の宇宙空間……が、傲れる人類に向かつて牙を剥くようになり始めたのは、当時の恒星間航行技術の限界、太陽系から半径約一万年以内から、いわゆる“東銀河系のフロンティア”が一応の消滅を見た時期に一致する。

人類をして“東銀河”の主たらしめたワープ機関は、開発されてから約四世紀、基本的な機能の改良はなされてはいなかつた。その到達距離の延伸は動力装置の改良に依存するしかなかつたのだが、太陽系から一万年光年以遠、“銀河系辺境宙域”の開発には最早、力不足だつた。

アルデバラン恒星間連邦が“辺境宙域”開拓の前進基地を置いた恒星系エルメティアは太陽系から一七〇〇光年。主星アルデバランからでも往復二万年弱。最新鋭の恒星間宇宙船を用いてすら約二年の余を要し、しかも航行に要する費用は距離の約二乗に比例する。人類は漸く、自分達が余りにも空漠な宇宙の只中にあることをおぼるげながらにも理解し始めていた。

事態を悪化させたもう一つの要因は造物主の悪意である。

一四三三年、恒星ゲッセマネが突然超新星化し、ゲッセマネ系の住民惑星が壊滅しただけでなく周辺恒星系にも大きな被害を与えた。この時に国家間の対立が住民の退避を著しく阻害したことが災厄を一層甚だしいものにかえたことが、人類の未来に大きな影を投げかけた。“辺境”開拓を目指す宇宙船も、造物主が次々に投げつけて来る悪意の前に立ち往生しつゝあつた。

膨大な距離をカバーする為に、宇宙船は近道を探し求め、その航路は恒星密度のより高い銀河中心部をかすめるようになったが、二四七七年には一七〇隻もの宇宙船が、ワープ航行中に星図に記載されていないブラックホールに遭遇して消息を断ち、その数倍の宇宙船が変光星、パルサー、宇宙気流、新星をはじめとする未知の宇宙現象に行く手を遮られて空しく引き返した。彼らは未だ好運だつた。機関を破壊され、数万光年という圧倒的な空間の壁に遮られ、絶望のままに死に立ち至つたものは更に多かつたからである。

徐々に、徐々にではあるが、人類は疲れを覚え始めていた。彼らをして“東銀河”の主となした溢れるばかりの情熱は次第に過去のものとなつた。“東銀河半円”は、彼らの主観にとつては、既に開発し尽くされ、早くも国家エゴの支配する“第二の地球”に変貌していたのである。そこには最早、情熱を注ぎこむべきフロンティアはなく、あるものは地球で人類が散々に繰り返して来た“国家はあるが人類はない”といつむぎ出しの国家エゴだつた。人類の全てが協力しておれば、“辺境宙域”の開拓もまた容易であつたはずだが、彼らは国家の名のもとに協力を拒み、対立を好んだ。“辺境宙域”への進出もフロンティアを求めてのそれではなく、国家の威信を賭してのデモンストレーションと化した。地道な開拓計画は捨て去られ、かわつて華々しくは

あるが無意味な宇宙探査計画が幅をきかせ始めた。球状星団へ、マゼラン星雲へ、更にはアンドロメダへ……国力を傾けた巨大プロジェクトが進行する一方、“辺境宙域”を訪れる宇宙船は次第に減り、やがて絶えた。開拓途上の惑星は総て放棄され、数万とも数十万とも伝えられる移住者達は、祖国に忘れ去られたまま、まるごとの荒々しさと悪意とを剥き出しにする未開の惑星を相手に、絶望的な、しかし、必死の戦いを戦い抜かねばならず、そして、その多くが戦いに敗れ去った。

人類が更に、宇宙そのものからも目を背けるようになったのは、二六一九年、アルデバラン連邦の放った探査船がアンドロメダに達した頃であろう。片道二百数十万光年、七〇年近くを要したこの探査計画は、それ自体、人類の持つ最高の技術と富とを結集したものであり、その輝かしい勝利であったはずのだが、計画の成功は人類に救いようのない倦怠感を与えたに過ぎなかった。圧倒的な空間的距離という悪魔は、ここでも人類の魂を深く蝕んでいたのである。

探査船のアンドロメダ到達のニュースへの感想を求めるジャーナリストに、当時の市民の一人は答えている。

『アンドロメダ？ 結構だね。でも七〇年もかかるんだろ、関係ないよ。それよりも俺達の今日の生活をどうしてくれるんだい？』

活力が失われて行く中で、各国は軍備の拡充に狂奔し始めていた。

最初に宇宙軍を組織したのはプロキオン連合王国であり、当時出現し始めていた宇宙海賊から商船を保護する組織と説明され、最初の内は比較的小規模な軍事組織であった。が、ものの一〇年とせぬ内に、宇宙軍は軍隊たるのゆえんを發揮し始め、際限のない膨張を開始した。設立三〇年にして、プロキオン連合王国の宇宙艦隊は戦艦三〇〇〇隻以上を擁するに至り、深刻な危惧を抱いた周辺国家も次々に軍拡競

争に突入していったのである。

当時、人類社会を二分した超大国、アルデバラン、シリウスの両国もまた当然のように宇宙最強を目指して宇宙軍の大拡張に移った。

軍隊は自然に肥大する。他からの、特に民間人からの制約を忌み嫌う。そして、その存在理由としての仮想敵を必要とする。アルデバラン連邦宇宙軍がシリウス共和国宇宙軍を仮想敵に選び、他方シリウス共和国宇宙軍がアルデバラン連邦宇宙軍を軍拡の好敵手と見做したのは、だから故なきことではなかった。両国はあらゆる面で人類の盟主たらんことを目指し、同一のベクトルの赴く所、必然的な対立を惹き起こしていたから、勢力拡大を図る両国軍部にとってはこの好適この上もない状況であった。

僅かの間に両国宇宙軍は巨大な規模に膨れ上がった。国家の持てる最良の部分が惜しげもなく、軍備という疑いもなく何の生産性もない分野に注ぎ込まれた。多くの才能が軍隊への奉仕を、最初は求められ、後には強制された。発明、発見は軍事に転用され得ることを義務とされ、この条件を肯んじない者は速やかに葬られた。必然の成り行きとして新規の発明、発見は跡を絶ち、科学そのものの進歩は停滞したまま、その一方で軍事応用科学だけがひとり奇形的な発展を遂げるといふ有り様となったのである。

二世紀前にミルズが憂えた事態が現実のものとなろうとしていた。

人類の統一と、“辺境宙域”への再度の進出を説く声は、『非現実的な理想主義』のひとつで退けられ、人類は『堅実な現実主義』を詐称する軍国主義へのめりこんでいった。“辺境宙域”は遠過ぎて手が届かない。“東銀河”こそが人類に残された唯一無二の生存圏であるが、既にその全域には人跡未踏の地はない。しかも、いま我々の手にある惑星とても安全ではなく、敵国は常にその勢力圏を伸ばさんとし

てわが国を狙っている。警戒せよ、軍備を怠ってはならない。いや、隙さえあれば他国の領土といえどもこれを奪い去るのに何を躊躇うのか……？ 奴らも狙っている、我々が狙って何が悪いのだ……？ これこそが地に足をつけた『現実主義』だ。敵との共存が可能なことという『理想主義』は亡国の思想に過ぎないではないか。

各国の政府と軍、そしてマス・メディアの多くは熱に浮かされたように『現実主義』を掲げ、彼らが捨て去り、忘れ去った“辺境宙域”への移住者のことなど意識の片隅にさえ生存を許さなかつた。調停を行うべき全人类的な機関も、際限のない軍備拡張競争を止めるべき歯止めもないままに……

それでも約一世紀、人類は『ダモクレスの剣』の下で危うい平和を保ち得たのだが、これは人類社会のどの勢力も、全面的な戦争を戦いしかも決定的に勝って“東銀河”に君臨できる自信に欠けていたからに過ぎず、決して人類それ自体の非好戦性に由来するものではない。正面から戦えないがゆえのフラストレーションは危険な形で蓄積され、国境紛争、代理戦争、謀略戦など陰湿なかたちでの発散を求めたのだが、それも充分ではなかつた。それと気づかぬ内に火薬は乾燥し切っていき、ほんの僅かの火の気、いや微かな火花でも着火可能な巨大な爆発が用意された。

“東銀河半円”は、一方はアルデバラン、他方はシリウスをその盟主として対立し合う二つの強大な軍事勢力圏に分割された。二七世紀後半、アルデバランを中心とする汎地球圏連合は六〇万隻の艦隊と九億の兵力を持ち、シリウスを盟主とする汎人類相互援助機構は五〇万隻の艦艇と一〇億を上回る膨大な兵力をその傘下に置くほどまでに、それぞれの軍備を強化し続けたのである。当然、軍事予算は膨れ上がり、市民への経済的な圧迫は増加の一途を辿った。軍事費は国家予算

の半ばを優に超え、なお増加の傾向は衰えることを知らなかつた。

耐えかねた市民の一部からは、こつした軍事競争による“恐怖の均衡”の愚劣きわまりなさを指摘する声が興った。こつした勢力を代表する政治家であるメセナ共和国のヤオ・クォルンは、『総人口の二倍を辺境宙域に運んでなお余りあるだけの人と、物と、金とが、無用の軍備に注ぎ込まれている』と苦々しさを込めて指摘し、両陣営指導者の反省を求めたのだ。しかし、二六七九年、両国いずれとは特定されてはいないもの、おそらくは軍部の教唆を受けた一青年が、人類に残された最後の理性とも言うべきこの政治家の生命の灯を一発の銃弾によって吹き消した時、人類の命運は遂に窮まった。

人類社会が、その後更に数十年の余命を保ち得たのは、単に両陣営ともが敵手の軍事力を決定的に破壊でき得るだけの能力に欠けていたというただそれだけの事情による。僅かの科学的進歩とそれに伴う軍事的な均衡の乱れ、それだけで人類社会は容易に崩壊の淵へ転落を強いられ得たのである。

そして、その僅か一步の前進は、際限のない拡大を続けていた軍事予算の多くの部分が軍事科学の研究開発に注ぎ込まれていた事実によって加速される。

西暦二七〇七年、シリウス宇宙軍の惑星破壊用準光速ミサイルの開発は両国の軍事的均衡を決定的に破壊した。更に不幸なことには、これに先立つ二七〇四年、アルデバランの物理学者カイウス・カトゥーが重力レンズ発生装置を發明、同国宇宙軍はこれを応用した恒星破壊レーザの実用化にあと数年の段階に達していたのである。

開戦のきっかけは些細な局地戦であつた。汎地球圏連合に属するプロキオン連合王国と汎人類相互援助機構の一員たるアルツエナ連邦との間に起こつた国境紛争は、プロキオン連合王国の圧倒的勝利に終

わるかに見えたが、断末魔に陥ったアルツエナ連邦は盟主たるシリウスに援助を求めた。

準光速ミサイルの開発に成功し、軍事的な優越を信じたシリウスは大方の予想に反して軍事的な冒険に乗り出した。即ち、二七二〇年、シリウス宇宙艦隊は怒涛のごとくにプロキオン連合王国への侵攻を開始、八月二三日、母星プロキオナ に対して最初の準光速ミサイルを発射した。

ミサイルの開発者らは、ミサイルが歴史に及ぼすであろう影響への洞察には欠けていたにせよ、その破壊力を計算する能力は確実であったことを実証した。プロキオナ に投下された三十数発の準光速ミサイルは、彼らの計算通りにこの惑星を、粉々に砕かれた小惑星帯に変貌させ、瞬時に五億以上の市民を皆殺しにしてのけたのだから……

シリウスの軍事指導者は、敵対するアルデバラン陣営が有効な反撃手段を欠いていることを確信した。絶好の機会である。この機に乗せずしてシリウスが“東銀河半円”に君臨すべき機会は見出し得ないではないか？ アルデバランが反撃手段を見出す前に、電撃的にその軍事を破壊することも、この準光速ミサイルという切り札を手中にした現在では不可能ではないのだ。

二七二二年、汎人類相互援助機構は汎地球圏連合に宣戦した。“銀河系大戦”勃発である。

この戦争を“第一次銀河系大戦”と呼ぶのは無論止しくない。この戦争が当事者達によってそう呼ばれたことはなく、また“第二次銀河系大戦”を戦つことになる彼らの子孫達も、その戦争が“第一次……”と呼ばれるべきであるとは、ついぞ思い及ばなかったのであるから……

大戦は最初の一年間、シリウス陣営の圧倒的優勢下に進んだ。艦隊

戦闘は互角だったが、シリウスの準光速ミサイルに対抗できる兵器をアルデバラン陣営はなお持たなかったからである。二七二四年、シリウスの大艦隊はアルデバラン恒星系から数光年の宙点に迫つた。そして、ここが彼らの最大進出ポイントだった。“第一次銀河系大戦”……敢えてこう呼ぶが……で最も優れた戦略家とされるアーノルド・M・クラウゼネック中将と、アルフレート・ヴァルゼーダ少将が、壊滅に瀕したアルデバラン宇宙艦隊の指揮を引き継いだからである。

理想的な指揮官と参謀長のコンビとされた、この二人はヴェガ星域での会戦で二倍の優勢を誇つたシリウス艦隊に痛烈な打撃を与えてアルデバランの攻略を断念させ、その後一年を経ずしてシリウスの勢力を汎地球圏連合の版図から駆逐してのけた。

『救国の英雄』に祭り上げられた二人の提督は、しかし、間もなく些細な理由から軍法会議に訴追され、軍から追放された。クラウゼネックは失意の中で自殺し、ヴァルゼーダはクーデターを企てて失敗し、改めて軍法会議で銃殺刑の判決を受けた。

二人の英雄を陥れた訴追理由はまさに言い掛かりに過ぎず、彼らの名声を嫉んだ時の権力者が手の込んだ罠を仕掛けて彼らを陥れたのだ、と噂されたが、その真偽はともかく、アルデバラン陣営はその軍事的な脅威を永久に排除してのける最後の機会をこれで失った。二七二七年、シリウスは準光速ミサイルの無制限使用を宣言し、一方アルデバラン陣営は時期を同じくして恒星破壊レーザーの実用化に遂に成功した。

無制限の殺し合いが始まった。

アルデバランが敵陣営に属する恒星系を破壊して一挙に数億の大虐殺を実行したその翌日に、シリウス艦隊は汎地球圏連合の傘下にある有人惑星に準光速ミサイルを叩き込んで報復と為した。一方が十億

の非戦闘員の殺害を『戦果』として誇れば、他方は数十個の惑星と恒星系の破壊を以て自陣営の大勝利を称した。

『理性は消え、人類は殺戮の本能に己を委ねた。神よ、滅びに瀕したる我らを救い給え……』

ある歴史家は憤りと恐怖とをなймаぜにしつつ、震える指先で祈りの言葉を記した。

しかし、救世主は出現せず、祈りを唱える人々の頭上には、ミサイルとレーザー、恐るべき破壊神が天下り、彼らを地獄の劫火の中に焼き尽くした。

人類が愚行の果てに自らの文明の総てを破壊し尽くしてしまう迄にさほどの日時を要することはなかった。人類が“東銀河半円”に覇を唱えるのに約三〇〇年を要した。しかし、“銀河系大戦”が勃発して僅かに一〇年、二七二五年には嘗て四〇〇〇億を数えた総人口、一万の余に達していた有人惑星は激滅し、人口は一億にも満たず、有人惑星の数は百を割り込んだ。相互の距離が大きく離れ、また殆どの恒星間兵器が破壊されたことから、準光速ミサイルその他の恒星、惑星破壊手段の使用は自然に終息した。かわって、それぞれの惑星上での原始的な手段による殺し合いがなお続いていた。破壊を前にして、人々はなお殺し合いを止めようとはせず、いや、破壊を避ける為と信ずるが故に一層、凄惨な争いに狂奔したのである。弱者を支配し、支配権を確立しさえすれば破壊を免れ得る。多くはそう信じ、自らの信念に裏切られるままに滅び去っていった。

たちまちの内に宇宙における覇者の地位を失った“東銀河”の人類が文字通りに壊滅するか、或いは原始時代そのままの文明段階に退行するまでにももの一世紀を要さなかったのである。破壊され、失われた文明は再建されることはなかった。

……破壊され尽くした人類社会。その中で僅かにこの人類の黄昏の時代を生き延びた例外があった。

進出半ばで『現実主義』に毒され、放棄された“辺境宙域”。人類がこの地に足跡を記したことを証したる二つの惑星があった。アルデバラン連邦が開拓に着手しつつも、余りの物理的距離と軍事予算による経済的圧迫の前に遂に放棄の止むなきに至った恒星系エルメティアの最外縁惑星エフタルには、それでも数十の宇宙コロニーと内惑星開拓用のベースとが築かれていた。予定されていた、より地球型の環境に恵まれた第四番惑星メルティアへの進出も、器材と予算の不足の前に頓挫したままだった。

全人類を巻き込んだ“銀河系大戦”は、さしも宇宙の果ての“辺境宙域”もその聖域とは認めなかった。恒星系エルメティアは、シリウス分遣艦隊に攻撃され、惑星エフタルは準光速ミサイルによって破壊された。辛うじて生き延びた数百万人の人々は、万に一つの可能性を求めて未開の内惑星メルティアへ、その生存圏を移したのである。古き世に、星々は真紅の華もて消し去られたり。華は神の怒りの焰ほのおと変じ、空を血の色に染めたり……。人々は神話という形で彼らは大戦の記憶を後世へと伝承した。

言語に絶する辛苦の内に、神話の真の意味は忘れられた。人類の発祥の地が、メルティア以外のいずれかの恒星系であること、それがかつて地球と呼ばれていたという事実さえ、人々の記憶からはほとんど薄らいでしまつのである。

エルメティアから約千数百光年、“辺境宙域半円”の外れ近く、シリウス共和国がかつて“辺境宙域”進出の足掛かりとしてその開拓に手を染めた恒星系ダートは、戦禍をこそ免れたもののエルメティアの

人々よりもその住民達がつきに恵まれていたわけではない。ダートは文字通りの辺境、しかも居住可能な第四惑星は未だ殆ど未開拓のまま放置されている。“辺境宙域”への進出でアルデバランの後塵を拝する立場から遂に抜けだせなかつたシリウスの状況を反映する一つの表象だつた。

つきに恵まれなかつたダートの住民達は自らの手で運命を切り開かなければならなかつた。人類の壊滅に伴い“銀河系大戦”が終息を見たとき、ダート恒星系に残されていた総人口四〇〇万人余を優れた統率力でまとめ、第四惑星の開拓を成功させたのは、当時三三歳だつたユン・ル・ワントである。ユンはダート恒星系第七惑星の衛星軌道上の宇宙コロニーを解体して、宇宙船と惑星開拓用に転用しよう主張した。唯一の生存圏を保証するコロニーの解体は、自ら進んで帰りの橋を焼き捨てるに似た行為であり、多くはユンに反対し、コロニーの寿命に人類の命脈を託すべきだとした。人類がこの程度の戦争で滅び去るわけではない、きつと我々を救出すべく手段を講じているに違いないのだ、焦る余りにコロニーを自ら放棄するべきではない……

が、ユンは、その異常なほどに優れた洞察力のゆえに「銀河系大戦」の帰趨を見切つていた。彼は、反対派を抑えつけた。必要とあらば陰湿な謀略の限りを尽くして敵を葬る事にすら、何らのためらいも持たなかつたから、当然『大悪党』と呼ばれ、政敵からはありとあらゆる悪罵を投げ付けられたが、ユンは歯牙にもかけずに計画を推進させた。

こうして第七惑星を巡る一萬基以上のコロニーが解体され、五〇〇万人近い人々と数十億トンの資材とを載せた宇宙船『ユンの函船』は西暦二七九九年、第四惑星に第二の地球を求め旅に発つたのである。

第四惑星は地球よりもやや大きく、しかも理想的な大気に恵まれて

いた。とは言え、未開の惑星は、それまで宇宙コロニーの理想的な環境しか知らなかつた人々にとつては恐るべき悪意を有した存在にほかならなかつた。多くの人々が未知の疾病と事故に倒れ、荒れ狂う自然が貴重な資材を容赦なく奪い去つていった。エルメティア恒星系第四番惑星と同様、彼らも一旦は原始時代と変わらないレベルにまで退行し、過去の記録のほとんどすべてを失つて、人類の歴史をもう一度、惑星の大地の上に刻み直すという気の遠くなるような作業に従事せざるを得なかつた。ダート恒星系第四惑星では、指導者のユン・ル・ワントが、人類の再び地に満ちる日を迎えることなく、五二歳の苦難に満ちた人生を閉じる。人々は彼の功績を讃えて惑星をル・ワントと名付けたのだが、そのいわれすら数世紀の後には完全に忘れ去られ、いつかル・ワントはル・ワントと呼びならわされるに至る。

人類社会を一旦は破滅させた“第一次銀河系大戦”から数十世紀の時が流れ、一度は総ての技術と富を失つた人類の未裔達は、再び宇宙へ飛び立つ翼を手にした。超空間ワープ航法、人工重力システム、そして慣性中和技術。シエルメスが、そしてル・ワントが……数千年の歳月が、さしもかつては銀河に覇を誇つた人類の遺産総てを過去のものとしていた。シエルメスもル・ワントも、この宇宙が彼らの共有すべき正当な遺産であることを知らなかつた。

シエルメス連邦とル・ワント共和国の恒星間戦争、いわゆる“銀河系大戦”は、シエルメス連邦暦五六年、共和国暦七一年、連邦圏外縁部テュレーン恒星区の未入植惑星、恒星系ヴィルワの第三惑星シユネーゼルで起きた“シユネーゼル事変”に、その端を発する。

共和国宇宙軍少将ヒュンテ・クリュツペル提督は八〇〇隻の艦隊を

率いてシュネーゼルに來航、連邦空軍はオーシボヴィ・シユタルク中將の第三艦隊三〇〇隻でこれを迎えた。不幸なことに、当時のシュネーゼルは惑星改造工事の完了直後であり、しかも手続き上の問題から入植が大幅に遅れ、いわば無人の状態にあった。クリュツペル少將はシュネーゼルを天然の惑星と判断して共和国による領有を宣言、その直後に急を告げられた連邦空軍第三艦隊がヴィルフム宙域に到着、早くも降下を開始していたクリュツペル艦隊の後背を襲ったことから全面的な戦闘に突入した。

戦闘は数日に及び、連邦空軍の完勝で幕を閉じた。この時に作戦を担当したのが当時一九歳の作戦参謀中尉レーフラム・トゥリユー・ネレイドであり、彼は斜線陣と中央突破を縦横に駆使してクリュツペル艦隊を分断、個々に包囲して殲滅する作戦を完璧に実行してのけ、艦隊首脳を驚嘆させた。クリュツペル少將のル・ヤント共和国第八艦隊は九五パーセントの艦艇と兵員を失って敗走し、クリュツペル少將も旗艦と運命をともにするという惨敗を喫したのである。

数千年ぶりの邂逅を、戦闘という不幸な形式で迎えたにもかかわらず、“シュネーゼル事変”ののち約三年の間、連邦と共和国の両国はそれなりに平和的な交渉を継続する。銀河の隣人として近親感を抱いたためかもしれない。使節が何度か交換され、ある程度の外交関係も樹立された。相互の文物も交換され、“シュネーゼル事変”の後遺症で双方にぎこちなさは残るもののシエルメス連邦とル・ヤント共和国は、銀河系開拓のパートナーとなり得るとの楽観も生じたのだが……

一つの事件が、両国の、特に共和国政府の感情を決定的に傷つけた。共和国で発生した重要犯罪……“バードフェザー事件”と後に呼ばれるようになったが……の容疑者の一人が、連邦へ亡命を図ったのであ

る。亡命の仲介をしたのが共和国首都レイヴェルゲンの連邦大使館の職員であったことが、共和国政府の激昂を買ったことになった。この亡命希望者を連邦母星へ護送する連邦空軍の連絡船を、暴走した一部の共和国宇宙軍艦艇が襲撃、両国間の友好を決定的に破壊した。連邦暦五六八年末、共和国暦七一九年の半ばのできごとである。

“バードフェザー事件”は、三つの意味で決定的だった。シエルメス連邦が犯罪者の亡命を認めたことが一つ。これによって共和国市民の、連邦に対する感情が決定的に悪化した。更に、亡命者を護送する連絡船を共和国宇宙軍の艦艇が襲撃したことは、連邦側の態度を急速に硬化させる結果となった。そして、この事件で暗殺された、当時の共和国首相ヴィセンテ・フェレラが、共和国国内で唯一とも言える対連邦融和の方針を堅持していたことである。両国間の感情が急速に悪化する一方で、共和国政府は無責任な対連邦開戦煽動の主張を煽り立てたのである。

クローネス・マールクが銀河系の歴史上に初めて姿を現すのは共和国暦七〇七年に勃発したル・ヤント圏での内戦“ドレド戦役”においてである。

マールクは早くに両親を亡くし、奨学金を得て母星首都レイヴェルゲンの大学で文学を学ぶ平凡な学生だった。もとより軍事などに志のあるうはずもなかったから、このドレド戦役がなかったなら、歴史が彼の名を書きとめることはあり得なかったに違いない。

偶然が幾つも連なりあって、マールクをキャンパスから蹴りだし、本人には不本意の極致ながら、戦艦のブリッジに駆け込ませた。

本人に言わしむれば、多分に好運に恵まれたにせよ、その類いまれ

な戦略家としての才質によってドレド戦役を母星側の勝利に終わらせたマールクは、宇宙軍元帥、宇宙艦隊最高司令長官、十数箇所もの宇宙要塞司令官などの肩書きが、おのが頭上に冠せられるのを呆然として眺めていたのである。

マールクは戦争と政略両面の天才と讃えられたが、彼の才能に最も激しい嫌悪を抱いていたのがかならぬ当のマールク自身であり、その思いは終生彼につきまとうことになった。

マールク麾下の共和国宇宙軍艦隊と戦い、この「第二次銀河系大戦」、特に「前期大戦」と呼ばれる部分をデザインすることになるのが、両国の最初の衝突である。「シュノーゼル事変」で頭角を現した天才参謀レーフラム・トゥリユー・ネレイドである。

シエルメス連邦屈指の大政治家レーフラム・ナイザル・ネレイドの長男として生まれた彼も、マールク同様に軍人を志したことはなかった。ずばぬけた長身、やや病弱ながらも彫刻的な美貌の持ち主のこの若者は、古代史、特に考古学に想いを寄せ、一六歳までは大学で宇宙考古学を専攻していたのである。その彼をキャンパスから放り出したのは、マールクのごとく偶然ではなく、父レーフラム・ナイザルであったと伝えられる。

レーフラムもまた戦争を激しく嫌悪していた。彼は、マールクのように肩を竦めて己の置かれた位置を受容してしまうことがどうしてできなかったのである。必然的に、彼は父ナイザルと不和になり、一八歳で士官学校を卒業した彼は、以後母星はおるか連邦圏のどの惑星にも二か月と続いて降り立たなかった。

が、内心とは裏腹に、彼の天才的な軍事的才能は彼を軍人として累進させた。一八歳で植民星カルシユで起きた大暴動『第九次レアナ暴

動』鎮圧に少尉として参加、連邦暦五六五年の『メルティア紛争』では砲術中尉として加わり、紛争後に認められてライン参謀教育を受け、二二歳で大佐の地位に上り詰める驚くべき累進ぶりを見せた。

やがて……全人類を巻き込む「銀河系大戦」は数千年の時の流れを経て、再び銀河系を席卷することになる……

このとき、レーフラム・トゥリユー・ネレイドは二二歳。クローネス・マールクは二八歳だった。

第一節 開戦前夜

“閣下、ミュッケルです、宜しいでしょうか”

端正な声が、マールクを我に返らせた。ル・ラント共和国母星系第五惑星を巡る共和国最大のナキャソ宇宙要塞司令長官執務室。

「ああ、いいとも。なんかいい知らせでもあるかい、ネイ？」

顔の上に載せていた軍帽を頭の上に放り上げ、マールクは背伸びをしてのんびりした声を投げ返した。

二八歳の、共和国宇宙軍で二人しかいない元帥。もちろん、史上最年少の元帥である。宇宙軍艦隊最高司令長官、ナキャソ、ドライバオム、フェクツチア、アージャーナ宇宙要塞司令官、共和国統合作戦本部評議員など十幾つの肩書きが本名の上に冠せられるのだが、実際に彼に会った者は、想像と現実の甚だしいまでのギャップに呆然とするのが常だった。

中肉中背よりもやや痩身、それ以外に形容するに相応しい言葉のない身体つきに、少しくウェーブのかかった黒褐色の髪は余り手入れがいき届いておらず、おさまる悪く軍帽からはみ出している。瞳は濃い灰色で、太い眉の下で捉えどころのない茫洋とした表情を浮かべていた。顔だけは決して悪くないのだが、部下の一人であるヒースクリフ・ローナクなどには『うちの司令官に色目を使う女は勝利の女神だけだ』などと評され、反論の根拠を今のところ持ち合わせていない。ローナクは『勝利の女神は、げてもの好みなのさ』と止めを刺し、マールクの自尊心をいたく傷つけたものである。

ドアが開いて、ネイス・ミュッケル中將が入ってくる。長身だが、むしろ細っそりと言っていると聞いてもいいほどの痩身。淡い色の金髪、端正なエメラルド・グリーンの瞳の、柔和な印象の青年である。華麗な美貌でこそないが、充分に人目を惹く整った容姿だった。しかし、宇宙軍艦隊副司令長官・兼・第一艦隊司令官、マールク艦隊随一の智將“ミュッケル中將であるとは、一見したのみでは容易には見抜けない。声望と容姿の不一致という点で、この二人は共通している。

「レイティがドライバオムへ戻ったそうです」

ル・ラント共和国宇宙軍第六艦隊を指揮するレイトウラント・シャブリ中將の通称を口に、ミュッケルは脇に抱えていた書類ケースを差し出す。

「うん」

「ル・ラント回廊宙域”の補給路整備ですが、閣下のご指示通り、八〇パーセントの進捗度でいったん作業を中断させました」

言い差し、ミュッケルは金色の眉を微妙な角度に曲げた。

「姉からも連絡が来ました。政府もジャーナリズムも、市民も“開戦”と“連邦打倒”一辺倒だそうです。とても、姉たちの主張を容れてくれるような雰囲気ではないそうです」

「まったく……」

“バードフェザー事件”で、共和国政府とその煽動を受けた市民は激昂の増埒の中に自らの身を投じている。前首相ヴィセンテ・フェレラの暗殺犯人とされたデュラン・バードフェザー元大尉親娘の内、父親のデュランは逮捕の際に銃器で抵抗したために射殺された。娘のコーティリアはよりによってシエルメス連邦大使館に逃げ込み、連邦が彼女の亡命を認めためたために、両国間の関係は一気に険悪化した。共和国政府の強硬な反対を無視して、連邦政府はコーティリア・バードフ

エザーの連邦母星への護送を強行し、結果として起こった『ルシタニア』号事件は、更に両国間に燃え上がり始めていた対立に大量のガソリンを注ぎ込む役割を果たしたのである。

「シエルメス連邦は、こっちの暴走を咎めてきている。一六や一七の女の子に一国の首相を暗殺できるはずがない。無実の少女が冤罪に陥られるのを、みすみす見逃すことはできない、だそつだ」

「道義的責任……ですか？」

「知り合いだったんだつて？ そのコーティリア・バードフェザーとかいう女の子と？」

「ええ。月並みですが、メルに言わせると、そんな大それたことをしでかすような娘には見えなかった」と

ミュッケルは言う。姉のアリシア・ミュッケルが、彼女の事務所で非常勤のメッセンジャーとしてコーティリア・バードフェザーを使っていたことがある。彼女をアリシアに紹介したのは、第七艦隊司令官に就任したばかりのメル・ヤンデキフィティ中將である。

「メルがねえ……」

マールクは太い眉の端を跳ね上げる。苦笑に近い表情は、すぐに茫洋とした風貌の中に溶け込んでしまったが。

ためらい、ミュッケルは問うてみた。

「外交交渉にまだ望みがある、と？」

「ないよ」

放り出すように言い、マールクは指先に引っかけた軍帽をくるくると回し始める。

「あのおっさんたちじゃダメだ。レイティに作業を止めさせたのは、これ以上やったら連邦空軍に知られるからさ。ま、もっとも、知られてもかまわないけどね」

「おっさん」という単語に苦い嫌悪と侮蔑の響きが混じる。共和国政府外務大臣のジェリコウ・シュジュケイ。かつて、「ドレド戦役」開戦の直前、最後通牒を見て次のように応えたと伝えられる。

「このような書式の書類では受け付ける訳にはいきません……前例がないのです」

以来、シュジュケイには「前例大臣」なる罵声が常に浴びせられるようになったものの、シュジュケイ自身の権勢にはいささかの驕りもなかった。彼は政府与党の長老であり、その資金力と党内の根回しの能力は他の政治家の追隨を許さなかったのだから。

しかし、資金力と根回し……マールクもミュッケルも、時として天を仰ぎたくなる。相手は三〇〇億以上の人口と、膨大な兵力、そして工業力を持つシエルメス連邦という化け物である。

「国力比五対一……」

とは、マールクが両国の戦争遂行能力を算定した際の結論であったとされる。国力比五対一は、いわゆる戦力自乗則によれば二五対一の開きを意味する。しかし、

「故に開戦はル・ヤント共和国の自殺行為」

と結論つけたのがマールクと、彼の友人と幕僚たちでしかなかった事実が、この時期のル・ヤント共和国政府の当事者能力の喪失を示して余りある。暗殺されたフェレラ首相の後任者のヒューレット・ザークは、政府与党内での勢力争いの結果、全く偶然にも浮かび上がっただけの政治家であり、シュジュケイ以上に政治的な見識など、望むべくもない。

「ヒースからも、第二艦隊の整備状態について報告が入っています」

「うん？」

「第一艦隊は練度、補給、整備いずれも現状で望み得る最上の状態に」

「なった、いつでも出撃される」と

「ヒースには待機するように言ってくれないか。多分、そう長いことじゃない」

「マルクの手から軍帽が飛び出し、狙ったようにミュッケルの足許に着地する。ただし、狙ったのではない証左に、長身をかがめて拾い上げたミュッケルに、マルクは収まりの悪い髪をかき回しながら軽く頭を下げる。」

「閣下？」

「こいつは戦争になる……」

「連邦から見れば、ル・ラント共和国などさして脅威とするには足りない小国に過ぎない。にもかかわらず、共和国政府は自らを“大国”と錯覚し、錯覚に酔ってさえているのだ。“連邦討つべし”、“連邦を一撃し、大ル・ラントの威を宇宙に示すべし”……新^{フランクフルト}聞やニユースのヘッドラインを飾る大げさで空疎な文句に、マルクは鳥肌が立つ思いなのだ。」

「可愛い気のない小国に寛容な大国ってのは、歴史的に見ても希少価値を主張できるそつだからね」

「連邦を挑発する……というより、共和国に挑発された形での開戦を、連邦は望んでいるのかも知れませんか」

杯を差し上げるポーズで、マルクは友人の明敏さに賞賛を示す。

「ジャーナリズムは“ぎりぎりの交渉を続けている”なんて言ってるけどねえ。どこまでまじめにやっつてんだか、知れたものじゃないよ、ネイ。いずれにしても開戦必至という前提で、われわれとしては物事を考えていかなければならん、ってことだ」

「勝てますか、閣下？」

「勝てるわけないさ」

また無造作に言葉を放り出し、マルクは微笑う。国力五倍の敵と戦うのだ。

「こつちが三回か四回、艦隊戦闘で勝ったところで、大国のメンツつてやつがある。おいそれと“負けた”なんて言ってくれるわけがない」

「では、引き分けしかありませんね。あるいは、我々の優勢負け……」

「ミュッケルは端正な眉を曇らせる。たかが共和国圏の内戦に過ぎない“ドレド戦役”に勝ったくらいで“大国”意識に酔いしれている今の共和国政府や共和国市民が、引き分けや優勢負けなどという結果を甘受するものだろうか。」

「そのときは、政府も市民も、馬鹿をやったことにつけを払つたさ。思いつきり手痛い思いをしてね」

「マルクからの応答は、ミュッケルの予想を超えて苛烈だった。」

「大体、人畜無害な学生を連れてきて戦争させて、やれ元帥だなんだつて祭り上げただけじゃ物足りなくて、拳げ句に怪物相手に竹槍でつこめつて言つて来るんだ。互角でいられるのは、二年から三年だ。その間に、自分たちがどんな相手の向こつづねをかっぱらつたのが気がつかなかったとしたら、そのときは民主主義つてももの本當の恐さをね、高い授業料払つて勉強することになるよ」

「マルクが敢えて省略した主語を、ミュッケルは正確に理解する。」

「マルクの茫洋とした外貌の内側に潜む、研ぎ澄まされた刃を思わせる一面を知る者は、マルク艦隊幕僚の中でも多数派を占めてはいない。」

「この人と会つて、もう何年になるだろう……ミュッケルの思いは数年を遡航する。」

植民星ドレドの圧倒的優勢下で進んだ“ドレド戦役”が中期に至った共和国暦七二年、宇宙軍首脳部は、彼らの戦争指導の拙さのつけを市民の生命で支払うことを主張し、その主張の具体的な政策として学徒動員法を制定した。

“直接国防の役に立たない”と見做された文学系の学生がまず動員されたが、七二年になると最早動員は見境なしだった。

後にマールクの部下となるネイス・ミュッケル、ヒースクリフ・ローナク、ベイ・ドレスン、ファートウリック・ラング、セルティ・マックス、ヤン・トゥール、レイトウラント・シャブリらも彼と相前後して軍籍に入っている。いずれも学徒動員、ないしは徴兵によって心ならずも軍服に身を包んだという点において共通していた。

マールクは、第五惑星の宇宙要塞ナキャンの駐留艦隊司令官ミュトゥレイ・ロメイチエフ中將の副官を命じられた。後方勤務で、実戦経験皆無の彼が司令官副官などと言つ任務を負わされたのは、相次ぐ敗戦で人材が徹底的に払底していたためだが、それがマールクに幸いした。司令官のロメイチエフ中將は優れた戦術家で、部下の意見を聞く度量にも恵まれ、本国艦隊のウエスコット・ローク中將とともに宇宙軍の双璧などと呼ばれてはいたものの、個人的には不遇だった。

マールクが作戦を立てた最初の艦隊戦闘である“メーレンの会戦”の直前、ミュッケルはマールクの推薦で分艦隊を任された。そして、“メーレン会戦”の結果はマールクの推薦の正しさを見事に実証してのけるものだった。

初めて会つたとき、収まりの悪い髪をやたらにかき回す、この中背で瘦身の青年に、ミュッケルは“少なくとも好ましい人物”との評価を与えた。この評価は、“メーレン会戦”後、“ワルステート・ジャンクションの会戦”でドレドの一個制式艦隊を殲滅したマールクの手

腕を目の当たりにして好意の方向に固定した。以後、丸一年以上のゲリラ戦闘から、“ドレド戦役”の決定的なターニング・ポイントとなった“ドライバオム回廊宙域の殲滅戦”、ドレド自治政府の最終的な降伏に至るまで、ミュッケルはマールクの最も信頼する幕僚であり、友人であるという地位を確立するに至っている。

“ドライバオム”以後の戦いは、無論困難はあったにしろ、それまでに較べればむしろ安易な戦いだった。“ドライバオム会戦”の一年後、ドレド宇宙軍はドライバオム宙域の奪還を図って、残存兵力を掻き集めた。

決戦を呼号する参謀本部の喚き声を聞き流したマールクは、ラング、マックスの率いる五〇〇〇隻の艦隊とともにリップルターフ宙域に進出、新規の補給基地の建設を開始、これを知ったドレド宇宙軍は八〇〇〇隻以上の艦隊を結集して補給基地の奪取を企てたのである。

だが、それもマールクの畏だった。マールクは、堅固に築いた野戦要塞でドレド艦隊を足止めする一方、ミュッケルにローナク、ドレスン、シャブリの艦隊、合わせて一万隻以上を与えてドレド艦隊を迂回させ、その補給線を破壊させたのである。補給を失い、二倍以上の共和国艦隊に包囲されたドレド艦隊には、降伏以外の選択は残されていなかった。

更に連戦三年、最後のドレド艦隊を降伏させて、マールクは遂にゲッセル恒星系を包囲下に置いた。呆気にとられるような形勢の逆転である。

三年も戦つ必要はなかった筈だ……と、ミュッケルは無意識に呟く。ドライバオムで勝つた後、あるいはリップルターフの会戦の後で充分ドレドを降伏させることはできた筈なのだ。既に戦勝の可能性を奪われて戦意をなくしたドレドに向かって、全面核攻撃を加えねばならな

い必然性がどこにあったのか？

人気取りだった。ドレド主力艦隊に核攻撃を受け、多くの肉親を失った共和国市民が穏健な講和では納得しなくなっていたのだ。尤も、自らの失敗に口を拭って、徒に好戦的な気分を煽り立てたのは共和国政府と、宇宙軍首脳だったのだが。

さしも温厚なマールクが、命令書を叩きつけて愚劣な官僚どもを罵つたのはこの時だった。

「唯一の植民星を、二度と住めない焼土にしると、奴らはそう言つのか？」

既に母星は熱核攻撃により地表の半ばが居住不可能になっていた。この上にドレドまでを核で焼き払ったりしたら、共和国は増え続ける人口をどこで養うと言つのか？

「聞いてられるか……！」

更迭と軍法会議覚悟での命令拒否。彼の麾下の六人の艦隊司令官も揃って命令を拒絶した。

困惑した政府は、参謀本部の強要するままにマールク艦隊を本国へ召喚、かわって新たに編成した空襲部隊を派遣する。だが、参謀本部の拙劣さは、この部隊に火力支援の戦艦部隊を加えなかったのである。

マールクの主力艦隊が去り、かわって派遣されてきた部隊は護衛を保持しない、それも大気圏内専用航空機を満載しただけの空母部隊、とあっては、これに乗じない方が異常だろう。

ドレド宇宙軍は、なげなしの兵力を集めてこの空襲部隊に襲いかかり、そして猛烈な反撃を受けて文字通りに粉碎された。マールクがドレド艦隊の突出を予測して、マックスとシャブリの艦隊を伏せておいたのである。

「最後の反撃をくじいてしまえば、ドレドも手を上げるだろうさ」

先制の一撃を弾き返されてつらたえるドレド艦隊に、マールク艦隊の驍将達が一齐に攻撃を開始した。マックスとシャブリは中央突破に成功したあと、ドレド艦隊後方に展開して連絡線を断ち、他の四人は前面と側面から敵重なる包囲網を敷く。

総てがマールクの読み通りだったが、決定的な誤算が生じた。

空襲部隊……

空襲部隊は、マールクからの後退命令を無視して前進を続け、核ミサイルを満載した艦載機を発進させてしまったのだ。発進した艦載機は延べで五万機、投下されたミサイルは数万発。ドレドの地表の八割を焼き払い、放射能に汚染された砂漠と化せしめるに充分な量だった。さらに、成層圏に巻き上げられた大量の粉塵はドレドの気候をも破壊した。僅かに残された耕作可能な地域も、気候の激変の前に壊滅的な打撃を受けることになったのである。

そして、それを目の当たりにしたドレド艦隊は、絶望的な復讐戦を挑んできた。

「ばかな、何てことを……」

罵つたが遅い。

ドレド艦隊に空襲部隊を粉碎させてから、マックスらを動かせばよかった……

本意ではあったが挑戦には応じないわけにはいかなかった。ただ、正面からの格闘戦を避け、大型艦の重火力で敵艦を個々に分断し、軽快な突撃艦艇をつつこませて止めを刺していったのだ。

この戦いで、ドレドは戦力と戦意の最後の一かけらを失った。戦前五〇億を数えた人口は、この戦いで熱核攻撃により一〇億を割り込み、地表の大半が放射能に塗れた不毛の砂漠と化したのである。

共和国に対して、ドレド自治政権が無条件降伏を受諾したのは共和

国曆七二五年のことである。

戦争は終わり、平和が戻ったが、残されたものは、熱核攻撃に曝され、焼けただれた二つの惑星だった。母星は地表の四割、ドレドは八割が居住不可能となり、食糧の生産能力は戦前の四割足らずに減退、工業生産力も六割台にまで落ち込む。そして、人口は戦前の一三〇億が八〇億になった。

共和国は戦争に勝ったものの、空しい勝利でしかなかった。戦争によつて得た物はなく、失った物は巨大だった。市民の生活は窮迫し、しかも改善される見込みは全くなかった。そして、共和国政府は戦争という“俗事”から解放され、政権争いに心おきなく熱中できる自由を享受していた。

ドライバオム回廊宙域の近くに外宇宙への通路が発見されたのは、戦争中の七二三年のことで、“オライバオム回廊の会戦”直後から建設を開始していたドライバオム宇宙要塞を根拠地に、この通路から何十隻かの探査船が送り出された。

惑星シュネーゼルの“発見”が報じられたのは三年前、ドライバオムから約五二〇光年。安定したG型の恒星系に属する第四惑星。海陸比七対三とは言え、大陸は温帯地方に集中し、数十億の人口を養うのは容易だった。しかし、そのシュネーゼルには先住権を主張する異星人があり、共和国の派遣した調査船団と護衛の艦隊は強力な攻撃を受けて壊滅した。

異星人は自らをシエルメス連邦と称し、惑星をウィルフワ恒星系シュネーゼルと呼んでいた。

マークは出兵には反対だった。

ドライバオムという難所は通らねばならないにしても、これまで外宇宙への進出を阻んできた暗黒星雲から脱出する航路が発見されたのである。何もシュネーゼルに固執することはあるまい。数年という時間をかければ、ほかにも居住可能な惑星は幾らも見つかるだろうし、もし駄目だとしてもシエルメス連邦から平和裏にシュネーゼルを買い取る、という手段も考えられる筈だった。

“シュネーゼル事変”後、約三年続いた連邦との危うい平和交渉の間、マークはシュネーゼルの平和的な譲渡を連邦に交渉するよう主張し続けた。もちろん、連邦がおいそれとシュネーゼルを手放すとは思われないが、それをつまくやるのが政治とか外交とかいうものではないのか。たとえ、国家予算の半分に相当するような代価を要求されたとしても、戦争を起こせば、その数倍、数十倍の費用が吹っ飛ぶのだから、寧ろ安いものだ。

最初、マークの主張を全面的に支持したのは、彼の最も信頼するネイス・ミュツケル中将の双子の姉アリシア・ミュツケル上院議員を中心とする野党勢力の一部のみだった。が、先代の共和国首相ヴィセント・フェレラがこれに賛同した。アリシアは、シュネーゼルの譲渡交渉を申し入れた、いわゆる“アリシア・ミュツケル書簡”を連邦大統領リー・タウンナーに送り付けたのだが、フェレラ首相はこの書簡に、支持を与えるサインを与えた。タウンナーは了承し、“応分の価格、あるいは辺境宙域における治安協力”を共和国が提供するのなら、譲渡に心じてよい、との意向を示したのである。

しかし、昨年八月にフェレラ首相は暗殺され、しかもその暗殺犯人が連邦へ亡命するという事件が起こった。ドライバオム要塞に駐留していた共和国宇宙軍艦隊の一部が、独断で連邦の連絡船の拿捕を図り、

連邦空軍が反撃したため、両国の友好的な関係は一瞬にして潰れてしまったのだ。共和国宇宙軍の強硬派を代表する参謀総長、デスタリヴァ・ドロク元帥は、“シュネーゼルの復讐”を呼号し、“シエルメス帝国の打倒こそ宇宙の大義”と主張、政府と議会の大部分の支持を集めたのである。

それにしても、とマールクはうんざりする。交渉のテーブルにも着いてみないで、いきなり戦争に訴えようとする政府と参謀本部の発想は彼の理解を超える。欲しい物が手に入らないからといって、いきなり暴力に訴えるのでは、チヨコレートを欲しがって泣き喚く幼児と大して変わらないではないか。

ドレド戦役では百戦して百勝といってよい戦績を上げ、常勝提督の名をほいままにしたマールクだが、それは彼自身の好戦性を証明するものではない。平凡な学生出身の彼にとつて、元帥号も常勝提督の名も、ただ煩わしいものに過ぎない。

戦いは、ないとしたならば、それにこしたことはないのだ。

だが、マールクの願いは叶えられなかった。

共和国暦七一九年一〇月一〇日朝、マールクは参謀本部からの呼び出しを受けたのである。

「閣下、参謀本部からの緊急通信です」

「言つて来たか……」

マールクは読んでいた本を長官用コンソールに放り出し、舌うちして立ち上がる。そして彼を呼びに来たのがミュッケルではなく、少佐肩章の若い女性士官であることに気づいた。マールクとほぼ同じくらしいの背格好。女性としてはかなりの長身。女性にしてはやや濃過ぎ、

切れの長過ぎるきらいのある眉が全体のバランスを少しく不安定にしているその顔に、マールクは古い記憶を刺激されて次の動作を見失った。

「きみは？」

「戦艦『クレストルランス』主任通信士クリス・ローク少佐です、

閣下」

やっぱりそうか、とマールクは頷く。

「きみはローク中将の？」

「小官の父です」

無表情さの底にちらり、と触れられたくないものに触れられた苦痛が覗いた。マールクがもう少し彼女の表情に注意していれば、切れの長い眉が僅かな不審を湛えるように動いたのに気づいたかもしれない。

ウエスコット・ローク中将の名をマールクは未だ忘れていない。ドレド戦役時の本国艦隊司令官。母星宙域まで攻め寄せたドレド艦隊の怒涛の進撃をよく力戦して支え、全軍を崩壊から守り続けた名提督。しかし、参謀本部は彼の功績を評価せず、挙げ句にはいわれもない敗戦の責任を押しつけて彼を処刑した。マールクが共和国の権力中枢に對して、ある種の絶望を抱き始めたのはあの頃からなのだが……

それにしても、そのローク中将の娘が、こともあろうに自分の麾下に在籍しているとは。

「ネイ……ミュッケルはどうしたんだ、なぜ、自分で来ない？」

マールクは無意味なことを問うた。

「ミュッケル提督が、閣下をお呼びするように」と

頷いて、マールクは長官室を出る。通信室に向かいながら、いつものことながら大時代な連中だ、と参謀本部付きの将校達を内心にこき

おろす。他人をわざわざ通信室まで呼びつけておいて、自分達は執務室のコンソールにそっくり返っている神経が分からない。

「ネイ……ミユツケルは？」

「士官室におられます」

「長官室で待つように伝えてくれないか」

「了解」

クリースは復唱をしない。マールクのそれよりも何倍も鮮やかな敬礼をしてのけると、シオートカットの淡い紅茶色の髪を揺らめかして、軽やかに身を翻す。

通信室の通話スクリーンは、既に参謀次長フォルター・ワシエック大将の肥満体で一杯になっていた。頭の中央がすだれのように禿げ上がり、その上のつべりした丸顔の分厚い脂肪の中に埋め込まれたような小さな目が、分厚い近眼鏡の奥からマールクをねめつけている。ドレド戦役当時には少将、第一作戦部長。士官学校首席のエリートとして、参謀総長の椅子を狙っていると聞いていた。

「本日の閣議決定に基づき、共和国宇宙軍最高司令部よりの命令を伝えます」

恐れ入れ、といわんばかりの調子に、マールクは露骨にそっぽを向く。ワシエックのこめかみに太い血管が浮び上がり、痙攣するように震える。一〇歳以上も年下の、それも学徒兵上がりのマールクを上官……マールクは元帥である……として扱わねばならぬのは、士官学校首席の秀才としては堪え難い屈辱だろつ。

が、マールクはワシエックが大嫌いだったから、彼の屈辱を些かでも和らげてやるうなどという博愛精神はかけらほども起きなかった。

「我が政府の努力にもかかわらず、連邦は、我が政府の提出したすべての条件を拒否してきました」

一体、どんな条件を出したって言っただ、この禿げ豚は……マールクは、腹の中で思いきり罵声を浴びせる。惑星シュネーゼルの無条件割譲、「シュネーゼル事変」、「『ルシタニア』号事件」に対する賠償金支払い、フェレラ首相暗殺犯人の身柄引き渡し……この条件では連邦が譲歩するはずがないではないか。

マールクの内心をよそに、ワシエックの長舌が続いている。

「宇宙の大義と正義をこよなく愛する我がル・ラント共和国政府は、両国間の紛争解決に対する連邦政府の誠意が全く見られぬことに深甚なる遺憾の意を評するとともに、連邦政府にして、共和国政府の提示せる全条件を無条件に受諾せぬ限りにおいて、全面的な軍事行動によって条件の受諾を要求するとの決断に至ったものであります」

対連邦開戦の決議と同時に、閣議は貴官をシエルメス連邦に対する軍事行動の最高司令長官に任命することを決定しました。直ちに對シエルメス連邦臨戦態勢に入って頂きたい。閣議は、半年以内の連邦母星占領と、連邦政府の無条件降伏を貴官に要請するものです」

「連邦母星を攻めると言われるのですか？」

冗談ではない。共和国母星系タートから連邦母星系トウーラスまで約二五〇〇光年強。しかも、その内の約二〇〇〇光年は連邦圏に属する。

シュネーゼルでの接触以来、マールクは連邦に関する情報収集と艦隊作戦の研究が続けている。が、情報収集と作戦計画はともかくとしても、作戦を支える物資の集積・補給計画はとうてい十分と言つには足りなかった。

「できないと仰有るのか？」

ワシエックがわざとらしく目を剥いて見せる、というのには多分にマールクの偏見である。ワシエックもまた例の以寡擊衆……少数の味方

で多数の敵を破る……と兵站軽視（無視？）論者。“補給を要求するのは敗北主義の表れである”というあれである。愚者は不可能を知らぬとはよく言ったものだ。

「できませんね」

言葉を飾る必要を、マールクは認めなかった。

“これは共和国政府最高指導部からの命令ですぞ。貴官の言動は坑命罪を構成することにもなりかねないので。承知か？”

「できませんし、ことをできると言っていて、多くの部下を死地に追い遣るより、はつきりできないと言っていて、私一人が軍法会議にかけられた方がマシというものじゃないですか」

ワシエックの顔が青くなり、そして赤くなった。生意気な若僧め、と罵りたいのを辛うじて堪えているのはつきり分かった。

もっとも、マールクはワシエックの気分を斟酌を加えるつもりなど全くない。精々、“あ、怒ったか……”程度である。

“貴官はそう仰有るが、シエルメスがいつ、共和国圏に攻め込んで来るか分からないのですぞ。一か八か、連邦母星に先制攻撃をかければ勝てるかも知れないではないか”

「そうですよね、可能性は否定しませんが」

だからそんな相手と戦争をしなければいいのだ。個人の賭け事なら一か八かも結構だ。しかし、国家を運営し、数十億の市民の生命を預かる国家の指導者達が“一か八か”を常用しているのでは、市民としては生命が幾つあっても足りはしない。

「しかし、共和国宇宙軍艦隊司令部としては勝算なし、とお答えするしかない。参謀本部えり抜きの名将だったクリュッペル提督ですら、連邦空軍の本腰を入れた反撃の前には手もなく捻られた、と言う事実をお忘れなく」

“貴官はそう言うが、敵の息の根を止めるには、敵の本拠地を一撃で叩き潰す、これあるのみではないか”

ワシエックの論理の貧弱さはマールクの苦笑を誘った。上意下達に馴れ切ると、他人を説得する論理すら退化する……というのはマールクの勝手な感想だった。

「そうですよね、連邦からの先制攻撃の可能性自体は否定しませんが」

積極的な意思と、それを支え得る十分な兵力、および長大な補給線を維持するに足る兵站能力があれば、連邦は共和国政府の宣戦布告と同時に、一気に禍根を除こうとするかも知れない。

「それには備えます。辺境警備隊にはパトロールの強化を命じ、ドライバオム宙域の監視衛星も増強しましょう。万一、連邦艦隊が、ここ一〇〇日の内に侵攻して来るようなことがありましたら、我が全艦隊を挙げて、これを粉砕してご覧に入れましょう」

その場合しか確たる勝ち目はない、と言ったらワシエックは卒倒するだろう。が、それは事実だ……マールクはうそ寒いものを感じた。

国力において共和国は決定的に劣る。比較にならないと言ってもいい。このような戦争では、連邦が兵力の逐次投入という最悪の……共和国にとつては最良のミス……を犯した場合しか、共和国は勝てないのだ。「ですが……こちらから連邦圏に侵攻し、連邦空軍を決定的に撃破できるようには、残念ながら我が共和国艦隊は建造されていないのです。その証拠をお見せしましょう」

マールクは操作室を呼び、オレーグ准将と繋がっているか、と問うた。

『繋がっております。多元通話に切り換えましようか？』

ローク少佐の声が答え、マールクをちよっと驚かせた。

ウォロンステッド・オレーグ准将はドライバオム宙域要塞兵站監。

共和国宇宙軍艦隊の台所を握る男である。かつてはロメイチェフ中将のもとで後方参謀を勤めていた。もつとも、後方参謀などを置いていたのはロメイチェフ一人であったのだが……

『こちらドライバオム要塞兵站部。このくそ忙しい時に呼びださんで頂きたいものですな、元帥閣下……おっと、これは参謀次長閣下、参謀本部の兵站は満ち足りておられるようですね、ご同慶の至り。もつとも、おつむりの方は些か補給不足の感、なきにしもあらずではありませんが』

肥満禿頭の参謀次長を、オレーグは遠慮会釈なしにあてこする。マールクもそれを制止するつもりはなかった。前線將兵ほど参謀本部への反感は激烈になる。政治が軍事をコントロールするのは正しい。しかし、おもしろ半分は軍事力を振り回すだけの政治・軍事の指導者を戴かなければならぬ前線將兵ほど悲惨な存在はあり得ない。マールクには、一つの敗戦が億単位の死者を生み出す事実を、共和国の指導者たちがまったく認識していないように思えるのだ。

「貴官の無駄口を聞くつもりはない。説明願いますようか、元帥。このような馬鹿げた挨拶で胡麻かそつとなさるのか」

「とんでもない……准將、挨拶はいい。それより、今、全艦隊を率けて連邦母星へ遠征した場合に補給がどれくらいもつか、参謀次長閣下にご説明差し上げてくれないか」

『四万五〇〇〇の艦隊を二五〇〇光年も……ですが、冗談にしてはいささかか出来が悪い』

「次長閣下は本気でおられる」
オレーグは肩を竦めた。

『一〇日です。それ以上やれば將兵の半ばが餓死しましょうさ。はっ、

もつとも、連邦母星に着くまでに二〇日以上かかりますがね』

「補給が何か！我が共和国宇宙軍將兵は不可能を可能に……」
「大將」

静かだが、敬意のかけらもこもっていない声がワシエックを遮る。「あなたの演説など聞いても何の足しにもなりません。何しろ我が艦隊は寄せ集め、補給もなしに作戦できるほど優秀な“光輝ある共和国宇宙軍”ではありませんよ」

マールクが言外に含ませた非難を悟ったのかどうかわからないが、ワシエックは完全にゆで上がった。「茹で上がっても蛸には見えんなあ」とはマールク。

「宜しいでしょう、参謀総長閣下にそう伝えておきます」

覚えておけ、と言わんばかりにマールクを睨みつけるとワシエックは通信を切った。

「どうも……勝てませんね、この戦争は……」

「ミュッケルもマールクと意見を異にしなかった」

「連邦はそんな馬鹿はやらないと思います。ヒューとの戦い方を見ても奇をてらったような戦法はありません。以衆撃寡^{ひやくるだたき}、或いは徹底的に相手を分断し、各個撃破しています。こついつ相手は兵力の逐次投入などの愚劣な戦術を採るとは考え難いのですが」

「同感だね。だが、こつちから仕掛けてしまった戦争だ。こちらからやめませ……」

言いかけてマールクは妙な表情になった。

「止めます、と言えはいいのかな？」

「連邦が止めさせてくれれば、です、閣下」

「連邦だけじゃないな、参謀本部という分からず屋もいるだし……。さてと、厄介なことだな、ネイ。司令官連中を集めてくれ。ヒースには出撃の最終準備を整えさせるように」

「分かりました」

「ところでね、ネイ」

ふと話題を転じた。ミュッケルは怪訝そうな表情になる。

「さっきローク少佐を私のところに寄越したのは何の真似だ？」

「連邦との戦争と言つ大仕事をしなければなりません。閣下が書類の決裁をなさっていたのでは、連邦空軍と戦争している時間が取れないでしょうから、そのためにも閣下には有能な副官が必要です。彼女が第一艦隊の中でも屈指の優秀な士官です。閣下の副官には相応しいでしょう」

真面目な表情をしながらも、ミュッケルのエメラルド・グリーンの瞳には悪戯っぽい微笑が揺れていた。

「そんなに優秀な士官なのか？」

「閣下や私よりよほど優秀でしょう」

マールクもミュッケルも学徒兵の出身である。戦略・戦術家としては人後におちない彼らだが、正規の軍人としてのルティーン・ワークなどに対してはいつもお手上げ状態だった。連邦との全面戦争ともなれば、マールクが日常の雑務に手を取られているわけにいかないのも事実だった。

「成程ね、それだけかい、ネイ？」

ミュッケルはにこりとした。

「閣下のご賢察にお任せします。副官人事についての手続きは概ね済んでいます。閣下のご承認があれば即日が発令することになる筈です」

ミュッケルらしいやり方だ、とマールクは降参することにした。事前に肌理細かく網を張り、相手を身動きならなくしていくのはミュッケル特有の戦法である。その彼に奇襲されたのではいかなマールクといえども手を上げるしかない。

クリース・ローク少佐はマールクの首席副官に任命された。

「参ったことだ……連中があれほどに愚かだとは思わなかった」

シエルメス連邦大統領リー・タウナーは、外務長官のマツシユバ
ー・ピークの報告に、穏和な老顔を苦笑にしかめた。連邦曆五六九年
九月一日の深夜。連邦首都大統領官邸。

「惑星シユネーゼルを初めとする辺境宙域の無条件割譲、“シユネー
ゼル事変”、“『ルシタニア』号事件”に対する賠償金支払い、フェ
レラ首相暗殺犯人の身柄引き渡し、連邦圏主要惑星に対する駐兵と治
外法権……これは、外交というものではありません」

「構わない、すべて拒否したまえ。連邦は理性ある政治組織体との交
渉は厭わないが、論理の通じないわがまま一杯の幼児と交渉するた
めのいかなる手段も、時間的余裕も持ち合わせてはいないとな」

タウナーは卓上の葉巻に火をつけ、ひどくあわただしく一服、二服
としたが、幾らも吸わぬ内に、腹立たしげに灰皿に押しつけた。

「ラーム元帥、わたしは腹立たしい。甘やかされ放題に育つて傍若無
人そのものな小僧を担任した初等学校の教師も、こんな気分じゃな
いかな」

「……そのような相手とまともな交渉が成立し得る、などと考えたこ
ろ自分自身に腹を立てておいでになるわけだ」

鶴のような瘦身、白髪の初老の軍人が、肉の薄い端正な頬を僅かに
歪めて応える。連邦空軍四〇〇〇万将兵の頂点に立つ、連邦空軍唯一
の元帥、ドウルニトウ・ラーム空軍大帥。

「ああ、そつだ」

二本目の葉巻に伸ばしかけた手を、大統領はばつが悪そうに引つ込

める。

「……？」

「家内に止められておつてな。今の調子で吸いつづけていると、任期
が終わる前に私の寿命が来るだとき。多少、煙草を喫るのは事実だが、
生命を縮めるほどには喫ってはおらんはずだが……」

「先日“アリシア・ミュツケル書簡”……あれは、立派な外交文書
でしたが……決して、ル・ヤント政府も無理性な政治家者の集団とい
うわけではない。少なくとも国防情報局は見ておりますが」

「そのレポートは読んだ。アリシア・ミュツケル上院議員なる人物は
交渉に値する人物だろうが、残念なことにル・ヤントの主流派は町
の無頼漢ごろうきと本質的には何ら変わるところのない連中であることは確
かだ。ピークに最終的な通牒を作らせた。あす、これを連中に突きつ
ける」

渡された書類を一読し、ラーム元帥は険しいと言つていい眉の端を
大きく跳ね上げる。ル・ヤント共和国政府からの一切の要求の拒否、
そればかりではなく逆に償金の要求と、シユネーゼルを含むヴィルワ
恒星系から半径一〇〇〇光年からの共和国の軍事施設の全面撤廃を
求める通牒は、明らかにル・ヤント共和国政府首脳しゅ脳の肥大し切つた自
我に致命傷を与えるものだった。

「大統領閣下、これは戦争を意味します」

「その通りだ、元帥」

タウナーは微笑つ。温厚な大統領の表情が、一瞬、肉食獣のそれを
思わせる。

「わたしは手を洗つたのだ、元帥。あとは、君とカーツ提督の問題と
いうことになる」

「了解いたしました、閣下。直ちに、連邦空軍全軍に警報を発令いた

します。どのような形になるか、まだ予測はつきかねておりますが、最初の一発を放つのがル・ラントであることだけは間違いないでしょう」

「転任命令が来ている」

連邦空軍第二艦隊司令官エイムズ・ナウシユヒル中将は無表情に告げた。邦暦五六九年九月二二日、植連邦中央部、フェローシア恒星区の宇宙要塞ハイシンの衛星軌道上。連邦空軍第二艦隊旗艦『シグナ・レート』号艦上でできごとである。

「どちらへでしょうか？」

長身の青年は礼を失せぬ程度に眉をひそめて見せる。

「連邦空軍艦隊参謀長へ転任だ。既に内示は受けているはずだが？」

「そのお話でしたら……」

「内示は命令だ」

青年……レーフラム・トゥリユー・ネレイド中佐。第二艦隊作戦先任参謀……の抗弁を、ナウシユヒルはあつさりとは無視した。

「貴官の都合を問うものではない。これが命令書だ。本艦を離れて一〇時間後に、コンフィデンシャル・コードで開示できる……質問は？」

「ありません」

敬礼。

しなやかな足取りで飛行甲板へ向かうレーフラム・トゥリユー・ネレイドは二二歳。驚くほどに端正な青年だった。白大理石を丹念に刻んだような彫りの深い整った顔を、淡く輝く銀白色の髪がひきたてている。細っそりしているといってもいい身体は、無駄なく滑らかそのものの動きを見せるが、軍人という印象ではなかった。漆黒に澄み

切った瞳は、むしろ象牙の塔がふさわしく思える。

事実、レーフラムは生粋の軍人ではなかった。

一四歳で連邦総合大学イアス分校に入学を許可されるといふ早熟ぶりを示したレーフラムは、一六歳までは、学究としての未来を囑望され、宇宙考古学教室に学ぶ大学生だった。シエルメスの起源に興味を持った彼は、連邦母星系とエルメティア恒星系に残された古代の遺蹟を丹念に渉猟し、その結果を何件かの論文として世に問うてもいる。それらはいずれも学会の大きな反響を呼び、数年前には“ネレイドの仮説”として一種のブームすら呼んだことがある。

が、一六歳になって間もなく遭遇したアクシデントが、彼の学究としての道を閉ざしてしまった。宇宙考古学研究室の置かれていた宇宙コロニーが爆発事故を起こしたのだ。数年にわたって収集した資料、彼の仮説を展開するために細心の注意を払ってプログラミングを施した自己増殖型コンピュータシステムも失われた。レーフラムは、学問への情熱を失ったとして、一転して連邦空軍士官学校へ転入する。

彼の父レイフレム・ナイザル・ネレイドは、連邦タート・レイピア恒星区選出の上院議員で“ビッグ・ナイザル”と称される超大物の政治家である。元連邦空軍中将、第一艦隊参謀長を務めたこともあり、政界に転じてからは恵まれた謀才と、連邦空軍時代に作り上げた緊密な人脈、そして背後に控えた連邦圏最大の巨大コングロマリット・シユレフからの豊富な資金を生かして勢力を急激に伸ばしていった。こゝと、政治的影響力を拡大する為ならば手段を選ばなかったから、彼は常に『黒幕』、『謀略家』、『寝業師』などといった別名がつきまとい、離れない。

「勲章を」

さして冗談とも思えぬ口調で、ナイザルはレーフラムの前で言い放

ったものである。

そうした男であるから、レーフラムが生まれたのも政略結婚の結果だった。最初、ある連邦空軍提督の娘と、彼は計算づくの婚姻関係を結んだ。その提督の引きで連邦空軍部内に確平たる地位を確立すると、当然のことのように最初の妻と離婚した。二番目にネレイド上院議員の夫人となり、レーフラムの六歳違いの弟レーフル・ファウルの母となったステイシー・ノウランは、シュレフ・コングロマリットの幹部の妹だった。ナイザルは、この妻とわかれることこそしなかったが、レーフラムにとって末の妹になるエリーネ・フェアリの母は彼ら兄弟とは母親を異にする。

レーフラム・トゥリユーはこの父を極度に嫌い、士官学校入学以来一度も生家には足を向けていないのだ。一八歳、二年で士官候補生としての資格を得たレーフラムは、以後、軍人としての優れた才能を示した。コーラル恒星区の惑星カルシユで発生した大暴動“第九次レアナ暴動”の鎮圧に参加したのを皮切りに、“メルティア紛争”、“シユネーゼル事変”にも参加、偉功を立てた。“メルティア紛争”後の数か月、駐留部隊の一員として惑星メルティアに留まったのが、士官学校入学以来惑星上に降りた唯一の経験である。

連邦圏の中心部をなすのが母星シエルメスを含む“コロノス腕”と呼ばれる恒星集団であり、ここに連邦圏の中核ともいえるべき八恒星区が集中する。連邦圏を構成する他の一一恒星区の内、五つの恒星区と連邦発祥の地であるメルティアが“エルメティア腕”に、連邦圏最大の植民恒星区コーラルを含む残りの六恒星区、一〇植民恒星区が“コーラル腕”と“ターミア腕”に位置し、連邦圏にとっての一大フロンティアをなしている。

エルメティア腕とコーラル腕の間には、約七億立方光年にもおよぶ虚無の空間と広大な暗黒星雲の宙域、“タネンベルグの間隙”が広がる。

“タネンベルグの間隙”は、連邦圏の中核とフロンティアを隔てる巨大な隔壁であり、その“エルメティア腕”側の出口に、“連邦空軍のジブラルタル”と称されるヒューロザイオン宇宙要塞が位置しているのは偶然ではない。

最大半径一五〇キロの回転楕円形のヒューロザイオンは連邦圏最大の宇宙要塞。連邦空軍の最大規模の根拠地であり、連邦“連邦の火薬庫”と呼ばれるコーラル恒星区と、ともすればシエルメス連邦の連邦圏支配に異議を唱えようとするメルティア王国へ睨みをきかせるための存在である。レーフラムが出頭を命じられたのも、このヒューロザイオンだった。

九月一七日、レーフラムを乗せた巡洋艦はヒューロザイオンの宇宙港に到着する。促されるままに巡洋艦を降りた瞬間、レーフラムは唖然として立ちすくんだ。

「何だ……この戦艦は……？」

宇宙戦艦 宇宙艦隊の戦力の中核をなす最大の戦闘艦艇^{バトルシップ}。連邦空軍の保有する最大の戦艦は、つい数日前までレーフラム自身が搭乗していた『シグナ・レート』級であり、全長六〇〇シエルメス・ヤード（七二〇メートル強）、乾重量^{ドライウェイト}にして約一〇〇万トン前後である。通常、戦闘の第一線に立つ巡航戦艦の大半は、『コーネット』級と呼ばれる全長にして四五〇シエルメス・ヤード（五五〇メートル弱）の大きさである。

しかし、レーフラムの降り立った埠頭^{ゲイト}に隣接するように係留されているこの戦艦は……

「よつこそ、戦艦『シグナ・フォース』号へ。着任を歓迎する」

立ちすくむレーフラムの背に声が浴びせられる。ちよつと薄くなり始めたダーク・ブラウンの髪を短く刈り込んだ、四〇代くらいの軍人が、右手を差し出していた。

「あなたは？」

「ヴラディミール・レムジー・カトウー技術少将。『シグナ・フォース』号を設計した。貴官がレーフラム・トゥリユー・ネレイド中佐だな？」

「『シグナ・フォース』号ですって？」

「ああ、連邦空軍制式艦隊の旗艦となる次世代の戦艦だ。ちよつどよかった、わたしも着任の申告をするところだ。一緒に行こう」

連邦空軍最初の超ド級戦艦であり、『シグナ・フォース』級戦艦のネーム・シップ、同型艦の一番艦でもある『シグナ・フォース』号は、「一番艦『リヴァイア』、四番艦『トゥルター』」とともに、この九月一〇日に連邦空軍に引き渡されたばかりだった。

完成したばかりの巨大戦艦の優美なシルエツトは、およそ武器と名のつくものに対する嫌悪を隠そうともしないレーフラムにすら、思わず感嘆の声を上げさせるほどのものだった。

「一五個艦隊、一〇万隻に拡張予定の連邦空軍艦隊の艦隊旗艦として計画されたものだ」

カトウー技術少将はそう説明した。これまで五〇〇シエルメス・ヤードが巡航戦艦の実用サイズとされ、それ以上に巨大な戦艦は実用的でないとして来た常識を、この戦艦はあっさり打ち破っていた。

全長一四〇〇シエルメス・ヤード（約一七〇〇メートル）。最大の攻撃力は、集中的な物質・反物質反応の生み出す膨大なエネルギーを利用した巨大な超熱線砲^{アンニヒレータ}。他にも従来の巡航戦艦の主砲の十数倍の出

力を誇る大口徑熱線砲を一八門を搭載。その攻撃力は通常級の巡航戦艦五〇隻分と評価される。

「誤解しないでほしいんだが……」

カトウーは、しかし、この戦艦の最大の特徴が攻撃力でないと強調した。

「この戦艦は旗艦なんだ。従つて索敵・通信能力に代表される電子戦装備こそ、この戦艦の生命なんだ」

主砲にしても、攻撃力のみを考えるならばさらに強力な熱線砲の搭載すら可能だった。が、核爆発や対電子妨害手段^{電子妨害手段}、混戦による通信障害などを突破して艦隊の指揮系統を確保できる能力こそ『シグナ・フォース』級戦艦のが建造された目的なのだ、と得意げなカトウーを見るレーフラムの漆黒の瞳は、しかし物思ひにかげつていた。彼は戦艦のシルエツトの優美さには感嘆した。しかし、戦艦本来の機能に感嘆したわけではなかった。

「どう理由をつけても人殺しの道具であることに何の変わりがあるものか……」

「滅多なことは言うもんじゃないぜ」

第三艦隊の戦艦『ノースラン』号から召集されたレイラー・ド・ナカースル中佐がたしなめる。二六歳、戦艦の操艦技術については連邦空軍随一を謳われる酒豪。ほとんどアルコールを口にしないレーフラムとは対照的に、一晩でウィスキーを軽く一瓶空にする。士官学校時代にはレーフラムとは同期であり、航法部門での成績は、他では総て首席の座を譲らなかつたレーフラムをしてすらその後塵を拜せしめた。

ナカースル中佐に与えられた任務は、レーフラムを補佐する艦隊作戦先任参謀である。彼のほか、情報先任参謀には連邦空軍参謀本部情

報処理部からレーム・エルンスタウト・エルヴェニツク中佐、後方先任参謀としてはヒューロザイオン兵站部からフレット・ラーグランド中佐が引き抜かれている。

どうして視線で穴が空かないのか不思議になるほど、示された作戦先任参謀を命じる、という文面の辞令を睨みすえて後、ナカースルは結論を出している。

「ま、航法と艦隊運動は任せてくれればいい。作戦について諮問してくれるなら、航法と艦隊運動面から見た実現可能性検討だな。作戦そのものの骨組みまで、あてにしてもらえるほど、おれは戦略の才能はないと思ってるから……」

彼らのほかに、『シグナ・フォース』級戦艦の主任設計技師のカトウ少将、航宙物理学の権威として知られるエリサ・ナーバン中佐らが、この史上最初の超ド級戦艦に研究員として乗り組んできている。

現在、第一艦隊司令官であり、艦隊最高司令長官に擬されているのがシャウド・レムトゥフアアン中将である。出頭を申告するレーフラムに、ル・ラント共和国との事実上の国交断絶を告げ、ラアム元帥からの警告電を示したのだ。

「ル・ラント共和国宇宙軍による敵対行動は、向こう一カ月間以内に予期されている。開戦に際して、連邦は共和国による明白な第一撃の確認を期待する……これは、つまり、ル・ラントに最初の一発を撃たせる、という意味に受け取れますが？」

「その通りだ」

レムトゥフアアンは否定しなかった。

「既にシユタルク（第三艦隊司令官）とジェレスタ（第四艦隊司令官）にはユアロフレスタ泊地へ艦隊を進出させた。ナウシユヒル（第一艦

隊司令官）にもハイシンから出撃するように命じた。万一にも、連中が“間隙”を越えてきたときの用意には、ナイクの第五艦隊を充てる」

「第五艦隊は、まだ編成中と聞いていますか？」

連邦空軍の制式艦隊は約六〇〇隻の戦闘艦艇から構成される。連邦曆五六九年の段階で連邦空軍が保有している制式艦隊は第一から第四までの四個、艦艇数は予備を加えても二万五〇〇〇隻。

連邦曆五六六年、“シユネーゼル事変”直後から始まった空前の艦隊拡張計画『第一次建艦補充計画』は、更に第五から第一五までの一個制式艦隊、艦艇数にして七万隻を揃えようとしていた。

しかし、ヘルムート・ナイク中将が第五艦隊司令官に任命されたのが五六九年初頭。第六艦隊のスティルウェル・ボッセ中将、第七艦隊のフェリー・ペイク中将の司令官就任は、いずれもほんの数カ月前。本来、二万隻弱を擁するべき、この三個艦隊は、まだ一万隻に満たない戦闘艦艇を漸く揃えた段階だった。

「ナイク艦隊にはボッセとペイクの艦隊から二〇〇〇を回し、ハイシンに進出させる。拠点防禦と、万一にも突破された場合には後方攪乱に当たらせる」

「第一艦隊は？」

「メルティアに置くつもりだ。異議があるかね？」

「いえ……」

メルティア……レーフラムはふと懐かしさを覚える。メルティアに駐留したのは、“メルティア紛争”の直後から“シユネーゼル事変”直前に第三艦隊に転出するまでの八カ月間ほど。

父ナイザル・ネレイドを思いださせる威圧感と閉塞感に満ちていたから、レーフラムはリアー一族の独裁支配下にあるメルティアの王宮

を敬遠し続けた。唯一の例外は、現女ルリア・セウレリウスの第二王女……とレーフラムは聞いていた……のメイリア・リアー姫。一五歳になったばかりのメイリア姫は、当時メルティアに駐留していた第三艦隊将兵の間で圧倒的な人気を誇っていた。

「大尉は変ですよ」

当時の部下達は、そういつてレーフラムの堅物ぶり、あるいは「晩稲^{あぐて}」ぶりをからかったものである。

「メイは……あ、これはメイリア姫の呼び名ですけど……彼女、話が上手いし、人なつこいし、それでいて、お姫さまらしい気品もあるし……」

もつといい、レーフラムは部下の饒舌を遮ったものだ。貴族や王族なんてそういつものじゃないのか。本気で我々と親しんでなどいるわけがない。お前たちに親しくしてみせるのは、それが彼女の仕事だからだ……

とはいえ、女王ルリア・セウレリウスの頑迷ぶりや、第一王女ローリアの権高さには辟易していたレーフラムである。部下のつわさに聞く、メイリア姫の気さくさには全く興味を惹かれなかった、と言っただけでも実はなかったのだが……もつとも、人嫌いなレーフラムは「^{プリンセス}姫」と聞いただけで怖じ気づいてしまい、遂に言葉を交わすことなくメルティアを離れることになった。

レーフラムの転任を知らされたメイリア姫はひどく残念がり、空軍省を通してレーフラムに丁寧な書簡を送ってきている。内容は、もちろん、外交的儀礼から一步も踏み外すものではなかったのだが。

「メルティアなら、コーラル、ユロノスの辺境宙域に出るにしても、万一にも母星系方面にル・ヨントが侵入を試みたとしても対応しやすい地の利があると思わなにかね」

「同感です」

レーフラムの口調は、内心にふと兆した朔風をそれとは気づかせなかった。

レムトゥファアン中将の布陣はそれなりに見事なものだ。天頂方向から見て、連邦空軍艦隊は巨大なUの字を描いて配置されることになる。Uの字の中央に首を突っ込んでくれば、ル・ヨント軍は三方向から殺到する連邦空軍に袋叩きにされる。また、ル・ヨント圏に近い一方の端は、連邦空軍の全兵力の半分以上で固められ、容易に噛み破れるものではない。

「何が、意見はあるかね？」

「問題があるとすれば、我々がル・ヨント軍のことを何も知らないに近い、ということですよ」

「うん？」

「ル・ヨント共和国とは三年ほどの国交がありますが、小官の知る限り、その軍事力に関する情報が大きく抜け落ちています。おそらく、ル・ヨント側も今日のあることを予測して隠蔽に努めたものと思われるますが……」

「貴官のいわんとすることは認める。その通りだ。だからこそ、貴官を艦隊参謀長に貰った」

「はい？」

「貴官の才能に期待していると言っただ。悪いが貴官のことはかなり詳細に調べさせて貰った。“ネレイドの仮説”のことも、だ」

レーフラムの綺麗な眉が微かに震える。内心の痛みを示す、その微かな動きを、レムトゥファアンは敢えて無視したようだった。

「断片から、全体の情報を推測し、再現させる。貴官のその才質が、ル・ヨントとの戦争には必要だ。これは次長閣下も賛成であられ

る……で、意見は？」

「……であれば、敢えてル・ヨント軍と辺境宙域で戦闘に入ることはありません。ル・ヨント圏から一〇〇〇光年程度の範囲の住民をすべし避難させ、一撃離脱の繰り返しでル・ヨント軍を連邦圏深部に誘引しつつ、消耗させる戦略を採るべきと考えます」

「一〇〇〇光年だと？ 待避させる住民の数だけで一〇億にはなる。どれだけの費用がかかると思っている？」

「戦費だと思えばいいのです」

レムトゥフアンの驚愕に、レーフラムは感応しなかった。

「一年分の戦費を充てれば、一〇億の住民の待避と保証には十分すぎるくらいです。ル・ヨント軍を連邦圏深部……このヒューロザイオン宙域まで引きずり込み、補給を断つと共に、補充されてくる新造の艦艇を注ぎ込みつつ消耗戦にしまえば、三年ほどでル・ヨント軍の戦力は消耗し尽くすでしょう。連邦は、たとえヒューロザイオンまで侵入されたとしても大して国力に痛手をつけるわけではありませんから」

「思い切ったことを言う……」

うなり声に近い。しかし、隠しきれない感嘆の響きがあった。

「しかし、有効だ。それは認める。そのアイデアを作戦として具体化するのに、どの程度の時間が必要だね？」

「二カ月頂けますか？ ル・ヨント軍が二カ月、静かにしてくれているとは思えません？」

「確かに、な。ル・ヨントが動き出す前に、最優先事項として作戦の概要をまとめてくれんかね。大統領閣下に提出し、連邦空軍としての大戦略としての裁可をまず頂くことにしたいのだ。今日から、『シグナ・フォース』号が貴官の乗艦だ。貴官には、情報、組織、資金を必

要なだけ遣えるように最優先権限が与えられる。」

「了解です、閣下」

「よろしい。では、直ちに始めてくれ。わたしは一度、メルティアに赴き、第一艦隊の指揮をアレクタに引き継ぐ。戻るのは半月ほど先になるが、そのときには作戦大綱を読むことを期待していいな？」

「了解いたしました」

敬礼し、退出の意を示すレーフラムを、レムトゥフアンは呼び止めた。不審に眉を顰めるレーフラムに、レムトゥフアアンが手渡したのは大佐の階級章だった。

「連邦空軍制式艦隊三万隻、五〇〇万人の軍師だ。大佐は至当だと思う。期待しているぞ、ネレイド大佐」

最大で三万人を収容できる巨大な戦艦艦隊参謀長執務室へ向かいながら、レーフラムの表情は決して冴えたものではなかった。

わずか二三歳で大佐。一八歳で士官候補生になってから、たった四年あまりしか経っていないというのに……

「人殺しの代償か……な？」

自嘲するように歪めた形のいい唇から、呟きとも言えない呟きが漏れ、レーフラムの耳元で弾ける。初陣となった“第九次レアナ暴動”、初めての艦隊戦を経験した“メルティア紛争”、そしてル・ヨントとの不幸な遭遇である“シユネーセル事変”。いずれも万単位、あるいは一〇万単位の将兵が戦場に投入され、ある者は死に、ある者は身体の一部、あるいは大部分と引き替えに生命を捨った。レーフラム自身が発砲した熱線砲に撃たれ、または彼の立案した作戦によって間接に、何万、ひよっとすると何十万という敵、味方の将兵が戦場に斃れたのは、否定できない事実だった。

軽いはずの階級章が、レーフラムには鉛の巨大な塊のように重く感

じられる。数十万の犠牲者の血を啜った結果が、彼をして四年あまりで大佐の地位へ、レムトゥファアの言葉を借りれば“三万隻、五〇〇万将兵の軍師”の立場へ駆け上らせた。

ただ一度の会戦でさえ、数十万人の死傷者を算した“シユネーゼル事変”。対ル・ラント戦争での、連邦空軍艦隊総参謀長の椅子は、“シユネーゼル事変”の数十倍規模での再現を指導する立場を意味するのだ。勝てば敵の将兵を、負ければ味方の将兵を、わずか半日で百万単位で殺傷できる地位。それが現在、レーフラムが身を沈めている、奇妙なほどに座り心地のいい椅子。

執務デスクの前に、レーフラムは投げつけるように長身を倒れ込ませる。

吐き気を覚えた。

狂気に満ちた吐き気だった。

第二節 メルティア

「いよいよだな……」

旗艦『ラスト・ロイヤルス』艦橋のメイン・スクリーンに浮び上がるありふれたG型の恒星から目を離したヒースクリフ・ローナクは背後に声を投げた。

「確かに」

錆びた声が応じた。

副司令官、参謀長を兼務するドゥリユー・ラ・マーク少将。年齢は六〇歳を越え、用兵の腕もベテランの域に達している。ドレド戦役では、あの悲惨をきわめた“ダート星域外縁の殲滅戦”で、全滅に瀕した本国艦隊の三分の一を脱出させる偉功を立てた。

「よく見つからずにすんだものですな。五〇〇〇の戦闘艦艇、二〇〇〇の補給艦艇はそれなりの数と思いますが」

「まだ、わからぬさ。もう、発見されているかも知れんではないか。いざ、攻撃をかけたなら、反撃してくるのは全連邦空軍だということだつてあり得る。あるいは、完全なもぬけの空だ、ということも」

対照的にローナクは若い。間もなく二七歳になる、金髪碧眼の端麗な若者で、マーク艦隊きつての酒豪、あるいはブレイボーイ・アドミラルとしても知られる。

「発見されていれば、破滅ですな」

「敵の動きはどつたぞ、マーク？」

「連邦空軍を構成する四個制式艦隊の内、三個艦隊がヴィルフ恒星系

方面へ派出されたのは確実です。メルティア宙域には第一艦隊……連邦空軍最強の艦隊が駐留を続け、艦艇数は約六〇〇〇。内、四〇〇〇あまりがメロス宇宙要塞……これはメルティアから五〇光年ほどの位置にある連邦空軍の補給基地ですが……メロス要塞に停泊し、残りの二〇〇〇弱がメルティアに駐留しています」

「合わせれば六〇〇〇……か。ちよつときついな」

「このほかに、連邦空軍は制式艦隊を増強している模様です。少なくとも第五、第六の二個制式艦隊は配備寸前という状態で……そつですな。全兵力が結集すれば六個艦隊で三万から四万……我が共和国宇宙軍艦隊に十分匹敵し得る規模です」

まあ、いいさ、とローナクは肩を竦める。

「元帥とネイがうまく連邦空軍の目を引いてくれてはいるようだ。六〇〇〇でも二つに分けちまえば互角以上の勝負はできる」

ローナクの旗艦『ラスト・ロイヤルス』がナキャソ宇宙要塞を出港したのが一〇日前の共和国暦七二〇年一月八日。ローナク指揮下の第二艦隊所属の艦艇は、共和国圏に散らばる数力所の宇宙要塞や補給基地から、三々五々、通常の演習航海を装って出港し、共和国圏のはずれ、“^{ザ・ギャップ}間隙”にさしかかるあたりの名もない恒星系で集結した。

遠征艦隊は戦闘艦艇五〇〇〇。ローナク中將のもとに、マーク少将マーティエス・ラント准将、ライク・ミュアン准将、ゲイル・ダーク准将ら、“ドレド戦役”を通じてローナクの指揮下で戦った老練な提督が配されているのは、マーク元帥の配慮である。

「エルメティア宙域は、言ってみれば、連邦圏の“柔らかな脇腹”と意つていいね」

この作戦を案出したとき、マークが告げた言葉がそれだった。ローナクだけではなく、ラ・マーク少将他の分艦隊司令、“共和国艦隊

の七提督”と呼ばれる他の六人の艦隊司令官とその副司令官達も、顔を揃えての、開戦前の最後の作戦会議。

「ヴィルワ星系の方面は、シエルメスという双頭の毒蛇の最も手強い一方の頭だと思っ正しい」

「連邦圏そのものが、すなわち巨大な双頭の蛇の陣形をなしている、というわけですか」

「双頭の蛇……うん、そのたとえはなかなか的確だと思うよ」

ローナクの反問を、マールクは柔らかく受けとめる。

「蛇と言つよりも恐竜だけどね」

「エルメティアを叩くことは、必然的に連邦空軍による包囲、あるいは挟撃にわが身を曝すこととなります」

ゲイル・ダーク准将が他の二人の分艦隊司令を代表した。どこいつて特徴のない中年の男だが、当時の共和国宇宙軍では奇跡的なほどに公正な人柄と用兵の手腕を合わせ持った士官であり、「ドレド戦役」では、戦艦艦長としてローナクの上官だったこともある。

「昨年シユネーゼルでクリュツペルは連邦空軍に完敗しております。敵艦隊が総て結集すれば二万から三万五〇〇〇はおります。しかも、補給は自由です……この配置から言つて、五〇〇〇程度の戦闘艦隊では、敵の包囲網の中へ好んで入り込んだことになる上に、包囲網を噛み破れるだけの戦いは期待できません」

「つまり、負けると言っている訳だね、ダーク准将」

「さようです」

ダークも遠慮はない。

「参謀本部の馬鹿どもがこの状況で勝て、と喚くのは分かります。奴らは能なしですから。しかし、閣下までがこのような戦術をおとりにするのは納得できません」

「勝てる目算もなしにこんな作戦は採らないよ。ローク少佐、資料の映写を頼む。」

連邦空軍は連邦圏外縁の要塞化を進めている。シユネーゼルには当然、最も厚い防禦陣を張っているだろう……これに対して我が方の補給力は何とも寒い限りだ。これが連邦圏外縁の恒星系配置図。そして、これが我が軍の現有する補給能力の全て、だ」

二〇人近い提督の目が立体表示スクリーンに吸い寄せられ、一呼吸置いて、失望の呻き上がる。

「驚いただろうが……ま、そういうことだ。従つて、これから伝える作戦案は、以上の事実を前提としている」

マールクは説明を始め、聞き入る提督達は納得の表情をそれぞれに浮かべたが、一抹の不安を隠し切れない。

マールクに対する不安ではなかった。マールクの作戦通りに戦えば、十中八、九までは勝てるだろう。しかし、その戦術的勝利が、果たして戦争の勝利に結び付くのか、という不安であった。

ネイス・ミュッケルが残した言葉を借りるなら、「恐ろしいほど有能な敵を前面に、そして恐ろしく無能な味方を後背に控えて、まさに孤立無援の戦いに赴く思い」だったのである。

ローナクを出撃させると同時に、マールクも麾下の五個艦隊を率い、エルヴェ宇宙要塞に進出している。連邦圏と共和国圏の境界に浮かぶヴィルワ星系……惑星シユネーゼルを含む恒星系まで、僅かに二〇〇光年余り。最前線の基地といつてよかつた。事実、マールク艦隊が進出する前に、何度か所属不明の艦艇や、暗号と思われる発信、あるいはワープの痕跡などが発見されている。

「連邦空軍は既にエルヴェ要塞の存在と、エルベ・ドライバオムのラインに設置された兵站ラインに気づいている……」

「マルクはそう結論づけ、ミュッケルを呼んで命じている。」

「ちよつと、ちよつと出でてきてくれ、ネイ。殴り合つちやいけなけれど、あいてがイライラする程度に、ね」

共和国暦七一九年二月、連邦暦の九月末、ネイス・ミュッケルは二〇〇隻ほどの高速艦隊を率いて連邦圏ラウ恒星区に侵入を敢行する。合わせて一〇個もの辺境警備艦隊が迎撃に出てきたが、啞然としてミュッケル艦隊の後塵を拝する以外の選択肢を与えられなかった。

エルヴェ出撃後五日目に、ミュッケル艦隊は連邦空軍の一大根拠地であるユアロフレスタ泊地にまで侵入する。これに対して、ジェレスタ艦隊が泊地を出撃すると、ミュッケルは全く拘泥する気配さえ見せずに艦隊を撤収させた。ジェレスタ艦隊が、「ル・ラント艦隊発見」の報を受けた宙域に達したときには、既にミュッケル艦隊の姿のかけらもなかったのである。

ユアロフレスタに進出していた連邦空軍艦隊の首脳、シュタルクもジェレスタも怒り狂いこそしなかったが、十分に「イライラ」させられたことは事実だった。猛将として知られるシュタルク中将は、九月二〇日には麾下の全艦を出動させ、実戦さながらの猛烈な演習を実施した。

「哨戒を厳にせよ。無断で接近する艦艇は無警告で撃沈せよ。まず攻撃せよ。警告はその後でいい」

一二日に泊地に到着したナウシュヒル中将は、このシュタルク中将の無謀とも言える命令を却下した。しかし、報復として亜空間滞留型駆逐艦……通称、潜水艦……の大群を、エルヴェ要塞周辺から、更に

共和国圏深部へ派遣しようとするヴェイノールド艦隊参謀長の作戦具申に許可を与えている。

「ル・ラント宇宙軍の行動は活性化しつつあり。嚴重なる警戒を要す」

この時期、ローナクの言葉通り、「^{マルク}元帥と^{ミュッケル}ネイは、連邦空軍の注意を完全に吸収していた」のである。

分艦隊司令を集めての作戦会議の後、ローナクは一人司令官室にあつた。テーブルの上にはもう幾らも中身が残っていないウイスキーの瓶が腰を据え、ローナクは水も氷も加えないウイスキーを水でもあるかのようにあおっていた。相当アルコールは廻っている筈だが、やや浅黒い類には赤味すらささない。その見事に透き通つて碧い眼はスクリーン中央に据えられて動かない。

口こそしなかったが、不安は彼も共有するところだった。メルテアを陥落させ、その後、マルクの指示通りに一切が進んだとしても……現在の共和国政府にとっては、シエルメス連邦との全面戦争などという大事業は荷が重すぎると言つものではないのだろうか。

「ドレドとの戦いだって、まともにならなかつた馬鹿どもの集団だからな」

不安を、ローナクはストレートのウイスキーで苦く飲み下した。「一月二二日を期して作戦を発動する。準備にかかれ」

連邦暦五六九年九月二四日、共和国暦七二〇年一月二〇日、ローナクは麾下の艦隊に命令を発する。史上、「流血令」として知られることになる命令である。

連邦暦五六九年一〇月一日早朝、ジョハン・ランゲルスト少将は、メロス宇宙要塞の索敵網に突然のよう出現した五〇〇〇隻あまり

のローナク艦隊に愕然とした。

「こ、こんな馬鹿な……ル・ヨントはヴィルワに来るつもりじゃなかったのか。なぜ、こんな近くに侵入はいられるまで、接近に気づかなかつたんだ……いや、議論している場合ではない、直ちに迎撃する。メルティアに連絡、レムトウファアン長官に敵の奇襲を連絡、出撃可能な全艦を出撃させ、保壘ラインで迎撃するのだ」

失望は要塞通信室からもたらされた。既にメロス要塞宙域は無数の通信妨害衛星で封鎖されており、超高速通信による連絡は不可能になっている……

「通常の通信シヤトルでは無理です。少なくとも一個戦隊を割いて派出すべきです」

「わかった」

ランゲルストは決断する。では、全艦隊で脱出を図ることにする。

「改めて命令する。出撃可能な艦艇のすべては出撃せよ。艦隊脱出後、本要塞は放棄する」

「放棄ですと!」

「放棄だ」

驚愕する幕僚に、ランゲルストは短く命令をたたきつける。

「放棄する以外にない。要員すべてを連れては脱出できない。艦隊出撃後、要塞要員は無抵抗を宣言してル・ヨント艦隊に降伏する。戦争に勝てば、要塞も捕虜も幾らでも取り返せるのだ」

ランゲルスト少将の判断は、確かに彼のおかれた局面では最善のものであったし、この時メロス要塞にあった第一艦隊主力の約四二〇〇隻が直ちに攻撃可能であったら、“勇将”ローナクといえども苦戦は免れるところではなかったはずである。

「敵艦隊出撃しようとしています!」

「要塞から出撃する前に叩くのだ。全艦、最大戦速、我に続けえつ!」

『ラスト・ロイヤルス』艦橋ブリッジ 指揮シート上で、ローナクは一九〇センチに近い長身を躍り上がらせた。命令が複数の通信路を突つ走り、五〇〇〇のローナク艦隊はエンジンの出力を最大に上げ、最大戦速での突撃を開始する。

「敵、突っ込んできます。出港が間に合いません!」

「間に合わせろ、ぐずぐずするな」

「馬鹿な、あんな速度で突っ込んだら衝突する!」

悲鳴と怒号が交錯する中、最初の二団が辛つじて要塞宇宙港を出港する。

が、既にローナクの鋭鋒は至近に迫っていた。

「遅い!」

華麗な金髪を煌めかせながら、ローナクの腕が一閃する。五〇〇〇のローナク艦隊が、膨大な破壊力をはらんだ光の槍を一齐に投擲する。数十万キロの距離を一気に突つ走つたエネルギーの濁流が、要塞から戦場へ躍りようとながく連邦空軍艦艇のまつた中で炸裂した。

最初の一撃を受けたのは、先任指揮官ランゲルスト少将旗艦の『ヨールンク』号を含む数十隻の戦闘艦艇。極度なまでに集中されたローナク艦隊の斉射は要塞の防禦スクリーンを薄紙を引き裂くように貫き、開け放たれていた要塞宇宙港外扉を突破して、連邦空軍の戦艦群に躍りかかった。

一たまりもなかった。戦艦の防禦シールドはまったく防禦の役を果たさず、一瞬の数十分の一後、直撃を受けた装甲板が蒸発し、宙雷と動力炉が誘爆する。マールク艦隊の基本戦術とも言つべき“まず、指揮官を討ち取る”が、この時は理想的な形で実現された。

閃光、爆発、そして叫喚と轟音。爆風が要塞内部を駆け抜け、超高

熱の旋風が死神の刃と化して、物質、非物質を問わずになぎ倒し、吹き飛ばす。戦艦『ヨールルク』号の爆発は、たちまち僚艦をまきこみ誘爆した一〇数隻の巡航戦艦の爆発は、さしも強靱な要塞をすらゆるがせ、軋ませた。宇宙港から動力伝導管に沿って爆発と火災が連鎖して生じ、要塞の砲塔が焰の中で溶け崩れる。

指揮系統を破壊され、連邦空軍艦隊の組織的抵抗は瞬時にして潰えた。必死になって抵抗を続ける個々の艦艇は、要塞外壁に舷側をこすりつけるようにして突入してくるローナク艦隊の可変性に富んだ動きに対応しきれず、うろたえた挙げ句に懐に飛び込んだ艦載機にとどめを刺された。

「集結せよ、バラバラになって戦っても勝ち目はない」

辛うじて脱出に成功した何十隻かが再集結を試みるが、ローナクは彼らが戦力として機能する前に、手持ちの予備兵力をたたきつける。数十隻規模の部隊に、一〇〇隻単位の新手を叩き込まれ、耐えきれずに四散するところへ、更にダーク、ミュアン、ラントが襲いかかり、雑草を刈り倒すように薙ぎ払つた。

「マーク」

旗艦『ラスト・ロイヤルス』では、ローナクがマーク少将を呼び出していた。

訝しげな副司令官に、ローナクは一言、「ダークの部隊を抽出し、メルティアへ向かえ」と告げる。

「意味は分かるな？」

「連邦空軍第一艦隊の……？」

「知られる前に一気に叩け。機会は今をおいてない」

乾いた音で踵が打ち合わされ、六〇を超えているとは思われぬ律動的な動作で、マーク少将は『ラスト・ロイヤルス』の艦橋を離れる。

ローナクは一言で「ダークの部隊を抽出せよ」と言うが、戦闘状態に突入してしまっている部隊を引き抜き、戦場から離脱させるのである。一つ間違えば、戦線そのものを崩壊させ、勝ち戦を一度に惨敗に変えてしまいかねない困難な作業を、しかし、マークはさしたる混乱も招かずにやつてのけた。

まず、ダーク准将が命令を了解し、艦隊の上方に集結するよう、多数の通信シャトルを放つて麾下の兵力を誘導する。自ら旗艦を駆つて戦場を斜めに走り抜けながら、部下の艦艇を八割方収容し、天頂方向へ離脱したところに、マーク少将が直属部隊を率いて待機していた。

「苦労だった、准将」

「どちらへ？」

「メルティアへ」

「了解した」

極く短い通信の後、マークとダークの機動部隊約一八〇〇隻が戦場を離れる。ローナクの揮つ破壊神の刃から、悲鳴を上げながら逃げまどう連邦空軍の艦艇には、彼らの戦場離脱に気づく余裕はなかったし、仮に気づいたとしてもそれに乗ずることのできるだけの余剰戦力と指揮系統は存在しなかった。

「『シエルナウス』号、離脱します」

『ラスト・ロイヤルス』の電子戦士官の報告に、ローナクは大きく頷く。マークとダークの部隊、約一五〇〇が大きく迂回しつつ、戦場から離れ始めていた。

「期待する、と打電せよ」

「了解……『シエルナウス』より返電、「我、期待に背かざるべし」」

シエルメス連邦の発祥はエルメティア恒星系の第四惑星メルティアである。約六〇〇年前、メルティアから外宇宙に進出しつつあつ

たシエルメス人たちは、政治的な主導権を巡って抗争した。大部分は約一〇〇〇光年離れた惑星シエルメスに本拠を移した。彼らは、“惑星統一戦争”と呼ばれる激烈な大戦を戦いぬいてシエルメス連邦の成立を迎える。一方、メルティアに残留した人々の間でも主導権争いが続いた。一〇〇年近い内戦と混乱のあと、二人の偉大な指導者レムス・レン・リアーと、エアホルト・トヒユナが現われ、メルティアをメルティア公国として統一する。そして、更に数十年ののち、レムス・レンの子孫ジェフィユス・レンはスルフエイク公爵家トヒユナ氏を中央政界から追放して、その後三〇〇年近い“リアー王朝”の基礎を固めたのだった。

現在のメルティアは、第二代の女王ルリア・セウレリウスを元首とする連邦圏唯一の独立国家であることを、ローナクらは知っていた。

「メルティアを陥落すのだよ」

それが、マルルクを中心とした“七提督”たちの結論だった。

「メルティアを陥落させ、その過程で連邦空軍に重大な軍事的敗北を味わわせる。そして、半月でいいからメルティアを軍事的に支配する。連邦には、我々がメルティアを連邦中枢侵攻の橋頭堡として使おうとしているのだと思わせるために……そうでないか、この戦争そのものストーリーが成り立たないんだよ」

一台の高級エアカーが、メルティア首都タロスの白亜宮の前に止まった。メイリア・リアーは車の止まるのを待ちかねたように足早に王宮に入った。王宮の衛兵が捧げ銃の礼で王女を迎えるのにも、会釈すら返さない。無表情を装っていた衛兵が不審の目を見交わした。かなり急いでいる時でさえ、メイリアは擦れ違つる者に対する礼を欠かさな

い。衛兵の捧げ銃に対しても、必ず会釈で応え、一言一言、言葉をかけるのを忘れない。記憶のいい彼女は衛兵全員の名前と階級をそらんにしていた。

が、この時の彼女は我を忘れていた。王宮のスライド・ウェイの上をもどかしげに急ぎ歩く。王家の慣習で長く伸ばし、腰の辺りにまでも届く水晶体の髪が緩やかに彼女の背に流れる。丸みを帯びた頬の辺りが未だ少女期を抜け出していないあどけなさを湛えていた。一九歳メルティアを独裁支配するリアー王朝に生まれた王女ではなく、スルフエイク州の大貴族スルフエイク侯爵の先代フアーリックの末の娘、侯爵家の当主マルルクは彼女にとっては実の兄にあたる。八歳の時に、女王ルリア・セウレリウスの養女となって一一年になる。

養女と言えば聞こえはいいが……人質でしかない。スルフエイク侯爵家はリアー王朝のとつて唯一最大の政敵なのだ。

メイリアはプリンセス・オブ・メルティアの称号を与えられていたが、同時にマーシャネス・オブ・スルフエイクの継承権を放棄させられ、いわば飼育殺しの身の上にあった。彼女の手柄は公式行事での人気を独占したが、メルティア政府は、彼女の人望を王朝と政府への人気取りにしか利用しようとしがしなかった。

豪華な彫刻を施した黒檀の扉が彼女の行く手を遮った。女王ルリア・セウレリウスの執務室。連邦暦二六〇年に連邦から独立してメルティア王国を宣言して以来約三〇〇年、二人の王と女王の閲したその概要。

「プリンセス・メイリア、どちらへ行かれますか？」

控えの間には侍従長コルフィン・クラウス伯爵がいた。彼の許可がなければ、メイリアといえども女王への拜謁はかなわない。メイリアは、表にこそ出さないものの侍従長を嫌っていた。“ローリアの茶坊

主”というのが彼のあだ名であり、第一王位継承者ローリア・リアーにとり入り、子爵から伯爵へ一足とびに成り上がったこの男に、メイリアは初対面の時から好意を抱けなかったのだ。容姿は洗練され、豊かな教養にも恵まれ、それがゆえに弁舌にも長ける。メイリアにとっては、実のない軽薄な人物としか見えなかった。

メイリアは彼を無視し、無視したことがクラウスの自尊心をしたたかに傷つけたようだった。

「お待ち下さい、プリンセス。ここをいざずことお考えです？ 勿体なくも女王陛下の玉座を……」

メイリアの濃いブルーの眸に怒りの色がたゆたい、それがクラウスの口を封じたが、彼女の行方を遮ろうとする動きに遲滞はない。

彼女は、制止しようとする彼の肩を、華奢な右手をつい、と伸ばして軽く衝く。非力に見えた一撃だったが、クラウスはあつと言う間もなくバランスを崩し、衝かれた肩を中心にしてぐるりと一回転して床に転がった。テーブルを押し倒し、派手な音を立てる。

「何事です！」

怒りに満ちた声とともに執務室に通じる純銀の扉が内側から開かれた。メイリアははつとして立ち竦んだ。

女王ルリア・セウレリウスではない。

装身具の宝石・貴金属が、その細っそりした肢体の動きに合わせて光を孕んで閃き、優美さの極致とも言つべき姿にきらめきを纏いつける。艶やかに流れ落ちる、見事なまでに美しい夜の色の髪に包まれた類いまれなまでに整った、しかしひやりとする程に冷ややかな氷の美貌が、咎める眼差しをメイリアに向けて注ぎ込んで来る。いつもこのところではあるが、メイリアは息苦しさを覚えずにはいられない。

『無能な美人は、有能な醜女よりも遥かに始末し易いものだよ』

とローリアを酷評したのは、長く連邦政府外務長官を務めたキエルフ・アキユラである。

『メルティアの未来についての洞察も、また現実の処理能力もなく、ひたすらに高い自尊心と、甚だ傷つき易い自我とを持ち合わせた、国家にとつて最も元首たるにふさわしくない人物……』

と評したのは、これは後にメルティアの國務長官となるヘルマー・ヒルター男爵である。この当時ヒルターは王国宇宙軍中將としてメルティア防空司令官の任にある。

が、ローリアは自分の周囲に、自分を悪しざまに評する人間の生存を許しておくほどには寛容ではなかった。

「控えなさい、メイリア。ここをいざずこと考えています？ スルフエイクの片田舎のつもりでいると許しませぬ！」

「お義姉様……！」

メイリアの口調は切迫する。このようなやりかたがローリアの激怒を買うことなど百も承知の上のこと。悪くすれば、彼女自身ですらその身を危うくしかねない。

「直ぐに市民の地下シェルターへの退避命令を出して下さい。そうしないと大変なことが起こります！ それと連邦空軍艦隊に警報を……」

「お黙り！ 命令を出せとな？ そなた、いつからわたくしに向かつてそのような口がきけるようになったのです。ラルクにそう言え、とでも命じられてきたのか？」

「お義姉様、ル・ヨントの宇宙艦隊が来ます！ 今、ル・ヨントに空襲されれば、メルティアは全滅してしまいます！」

「ル・ヨントが来る？ そのような戯言、聞きとつてもない。スルフエイクの田舎者は、みな昼日中から夢を見ておると見える」

「お願い、お姉様。処罰は後でいかにようにでも。ですから、ヒルター

中将に「連絡を！」

「目障りな！クラウス、メイリアを下がらせなさい。自室に下がっての謹慎を命じます。わたくしがよいと申すまで、謹慎を解いてはなりません。」

クラウス、衛兵を呼び、メイリアを謹慎させなさい、部屋より一歩も出ぬよう兵どもに監視させるがよい」

「は、仰せのままに」

クラウスは平伏し、メイリアの腕を把ろうとするが、メイリアが激しい身振りでその手を降り払うと、どうするべきか迷ったように立ち尽くした。

メイリアには焦る理由があった。

久しぶりにスルフェイクの州都ドルスの侯爵邸を訪ね、兄の侯爵一家とお茶を楽しんでいた、その最中、突然姪のファーリアが悲鳴を上げ、彼女にしがみついていたのだ。

「どうしたの、マーシャ？」

「何か来るわ……怖い！」

病的なまでに勘のいいファリア。特に悪意に対しては極端なほど敏感だった。そう、時には数千キロを隔てた宇宙空間に浮かぶ悪意の存在をさえ、ファリアは感じとるかのよう。四年前の“メルティア紛争”の帰趨を決した“軌道会戦”の日、ファリアは突然に高熱に襲われて侯爵夫妻を驚かせたのだ。ル・ヨント共和国との関係が極度に悪化しつつある今、ファリアの怯える悪意、というよりも危機であろうが、それがいかなる性質を持つものであるか、メイリアにも容易に推測できたのである。

「お願い、お姉様、ヒルター司令官に……！」

「何をしています、クラウス、私の命令がきけぬと言っか！」

全く聞く耳持たない。ローリアのしなやかな手が伸びてコンソールを弾くと、黒檀の扉はメイリアとローリアの間を遮って音もなく閉じた。

「プリンセス・メイリア、王女殿下のご命令です。お部屋へお下がり下さい」

虎の威を借る狐……所詮は茶坊主、相応しくてその地位にあるのではない。

水晶の髪を振り乱すようにようにして振り返ったメイリアの双眸に浮かんだ、凄まじいまでの怒りの表情にクラウスは幾分かたじろいだよつだった。慌てて後じさり、王宮衛兵を呼ぶ。

「プリンセスをお部屋へお連れしろ。王女殿下がよいと仰有るまでお出ししてはならぬ」

衛兵は顔を見合わせる。彼らとてこの茶坊主よりもメイリアの方に好意を抱いている、とは言え侍従長の命令に服さぬわけにもいかないのだ。メイリアにもそれは分かっているが、おそらく時は切迫している。

が、二人の衛兵に腕をとられ、彼女は万事休したことを知った。

連邦空軍第一艦隊を指揮するシャウド・レムトウファアン中将は四七歳の気鋭の提督で、連邦空軍でもまず第一級の戦術家である。何度かの辺境紛争、或いは連邦暦五六五年の“メルティア紛争”でも優れた用兵能力を証明し、連邦空軍最大の戦闘集団である第一艦隊の総帥として、欠けるとことのない将才であった。が、その彼にして、ローナク艦隊のメロス宇宙要塞の奇襲攻撃には衝撃を抑えきれなかった。

「メロスだと？ なぜだ？ ル・ヨントはシュネーゼルへ来るはずではなかったのか？」

ただちにメロスへ救援に赴く……レムトウファアンはそう決断し、メルティア駐留の残存部隊に総出撃を命じる。

「母星に増援を要請すべきか、と」

この時、進言したのは作戦参謀のシャルブック大佐である。

「ハイシンから第五艦隊を動員してはいかがでしょうか」

「ハイシンからでは最大戦速でも三日以上かかる」

シャルブックの進言を、レムトウファアンは拒絶した。

「間にあわん」

「メルティアの残存部隊は一八〇〇です。先にメロスが陥落してしまつていれば、各個撃破を食らうだけです。むしろ、メルティアに無防備惑星宣言させ、我が艦隊はハイシン方面へ後退してはどうでしょうか。そうすれば、合流するまでに二日足らずで済みますし、兵力も七〇〇〇近くあります。十分に艦隊決戦を挑める数ですが」

「それはできぬ」

手をこまねいてローナクに行動の自由を許せば、連邦空軍の存在意

義をすら問われかねない。“五六五年条約”でせつかく吞ませた、“宇宙空間での戦闘能力の全面放棄”条項の放棄をまたぞろ口にし始める恰好の口実を、メルティア政府に与えてしまうことにもなりかねないのだ。

「ランゲルストが四二〇〇もの艦隊を率いて籠もっている。一日や二日は持ちこたえるはずだ」

連邦暦一〇月二日、レムトゥフアアンは一八〇〇隻の艦隊を率いてメルティア衛星軌道から出撃する。

が、マーク少将の分艦隊は、レムトゥフアアン艦隊と擦れ違つようにしてエルメティア恒星系への突入を果たしたのである。

「メルティアの軍事的な抵抗力は速やかに破砕する」

マークはそう作戦を立て、しかも徒に時を費やすの愚を避ける為にダーク機動部隊に、核ミサイル攻撃を命じる。

「全面無差別攻撃ですか？」

恐れを知らぬダーク准将がさすがに鼻白む。無差別、無警告、無制限熱核攻撃がいかなる結果を生むか、ドレド戦役を戦った共和国宇宙軍の一兵に至るまで知らぬ者はない。

ダークの反問を、しかし、マークは肯わなかった。

「政府やドレドの愚行を我々が真似ることもない。軍事施設をピンポイント攻撃する。無用の放射性降下物を発生させるのも拙い。超融合ミサイルだけを使え」

この日、メルティアの首都を含むアスロ大陸の殆どは快晴に恵まれていた。それは最初、目も覚める程に晴れ上がった蒼空を横切る光の箭のように見えた。

「……」

蒼空を横切る光の箭に目をやった人々は、一瞬凍り付き、次の瞬間、一切の色彩が純白の閃光の中にその個性を喪った。

数百万度の超高熱の火の玉が重なり合つて炸裂し、メルティアの地表を数千度の熱線と、風速数百メートルにも及ぶ衝撃波、そしていかなる測定器をすら瞬時に焼け切れさせた凄まじい放射能の嵐とが覆い尽くした。

ヘルマート・ヒルター中将の指揮する防空ミサイル網は何の役にも立たなかった。初弾は同時に総ての防空基地を粉碎し、妨げるものもなく、なつた地表に、更に第二波、第三波、第四波のミサイルが容赦なく降り注いだ。メルティアの地表は阿鼻叫喚に満ち、しかし一瞬の後、それらをすら後続のミサイルの炸裂による爆風が薙ぎ払った。

無論、マークがメルティアの表面をくまなく核爆弾で薙ぎ払ったというわけではなかった。主要な戦略防衛基地へのピンポイント攻撃に限定したため、直接の核攻撃に曝されたのは惑星メルティアの表面の〇・一パーセント足らずに過ぎなかった。

しかし、メルティアの市民にとってはそれで充分すぎた。この日メルティアに投下されたミサイルは数百発、八〇〇キロトンに達した。そして、“ピンポイント”を称する攻撃がいつもそうであるように、コースを逸れた何発かの核ミサイルが首都タロスを始めとして、カルフォルミオ、ラドス、ドルスなど幾つかの大都市の都市部を直撃したのである。中でも首都タロスは事実上壊滅状態に陥り、一五〇万人もの死者と二〇〇万人を越える重軽傷者を算したのである。

ローナクにとってははなはだ不本意なことに“ローナクの虐殺”と呼ばれるこの攻撃での死者総数は約八〇〇万人。メルティアの総人口の〇・六パーセントに相当する。

もし、万一にもメイリアが警告を発した時に退避命令が出されてい

れば、この数は半分に減っていたであろうが……メルティアは半日で軍事的な防禦能力をすべて奪われたのである。

メイリアは耐え切れなくなった。スクリーンを叩きつけるように切り、こみ上げて来た吐き気を抑えるためにライティング・デスクにつぶす。

彼女はタロスの地下三キロメートル、収容人員四〇〇万の大シエルターにいた。しかし、実際に避難できた市民は十万足らず、それも政府高官の家族とその縁故者に限られる。一般市民にはこのシエルターの存在は知らされていなかったのだ。

避難命令が出た時にも、メイリアはローリアとその側近達と対立せざるを得なかった。メイリアが最後まで地表に留まり、市民の避難遊動に当たると主張したのを、ローリアの側近達が一蹴したのだ。この大シエルターは最大の軍事機密、市民への公開など思いもよらないと。

この期に及んで何の軍事機密、と思う。市民がいなくなっても軍事機密が守られればそれで充分とする宇宙軍幹部の考え方は彼女の理解を超えている。

「ああ、お願い、もうやめて……もう殺すのを止めて……！」

空襲の終了と同時に、マーク少将は強襲揚陸艦『アンバード』のダーク准将を呼び出した。

「メルティアは抵抗力を失った、行け！」

ダーク准将麾下の兵力は『アンバード』の他に揚陸艦、護衛の巡洋艦、航宙母艦などに補助艦種を加えて約二〇〇隻、惑星降下兵力一〇万を合わせる。合計一四波、三〇〇〇隻もの舟艇を連ねて首都タロス

周辺に降下、約一万の兵力を王宮地下の大シエルターへ突入させたのである。王宮護衛の衛兵は僅かに五〇〇足らず、彼らは勇敢に抵抗したが、兵力に優り、優勢な重火器の支援を得たル・ラント陸兵の敵ではあり得なかった。

メイリアがはっとしたのは、それまで続いていた戦闘の喧騒がはたと止んだからである。王宮衛兵の壊滅を示す静寂が、ゆっくりと広大なシエルターを席卷していくのが彼女の肌感じられた。

「……！」

だしぬけに居室の扉が開いた。鈍い金属光沢を放つ装甲機動歩兵。

一〇人ばかりが彼女を取り囲み、銃をつきつける。何の害も及ぼしそうな無力な少女一人に、戦車とも互角にわたり合う機動歩兵が一〇人も銃をつきつける様は不気味を通りこして滑稽ですらある。メイリアの顔には全く血の気がなく、蒼白だった。見開いた双眸が美事なまでに碧い。

『プリンセス・メイリア？』

機動歩兵の一人が合成音めいたしゃがれ声で誰何するが、彼女は答えない。蒼白な表情のまま、相手の無表情なヘルメット・ヴァイザを見つめている。

二人の歩兵が銃を収めて歩み出、左右から腕を把った。

『同行をお願いします。メルティア政府はさきほど、ル・ラント共和国政府への無条件降伏を受諾されました』

有無を言わせない。羽毛を扱つ手軽さで華奢な身体を持ち上げてしまつ。両の爪先が完全に宙に浮いてしまつていた。

メイリアは抵抗しなかった。恐怖すら余り感じない。長い睫毛を伏

せ、運ばれて行くに任せた。

「何人殺したのです？」

不意に詰問する言葉を投げつけた。

『何？』

「何人殺したのです、メルティアの人々を？」

先頭に行く、指揮官と思しき機動歩兵が振り返り、やや動揺を示した、というのはメイリアの思い過ごし。

『応える義務はないと考えますが……一〇〇〇万人弱と推定されま
す』

「人殺し！」

『我々は兵隊です』

「……」

『兵隊は人を殺すのが仕事なのです』

合成音に動揺はなかった。

凶報はその日の内にレムトウファアン中将の旗艦『コーネット』へもたらされた。

「メルティア空襲を受く。死傷者多数。王国政府はル・ラント共和国に無条件降伏。王国政府首脳はル・ラント宇宙軍に囚われたもよう”

剛腹なレムトウファアンでさえ、“馬鹿な”の一言の後、数秒間は沈黙の帳で自らを包み込む以外に対応を見いだせなかつたほどの凶報である。

ローナクは絶好の機会をとらえた。

翌三日、撤収を決意したレムトウファアンがワープアウトした直後に、メロスを離れたローナク艦隊が強襲したのである。

「総兵力に於いて我らが劣るはやむなし。各局面でさえ優勢であれば、敵を各個に撃破できるのだ」

ローナク麾下の艦隊は約三五〇〇。勇猛をもって鳴る“勇将”ローナクは旗艦『ラスト・ロイヤルス』を艦隊の戦闘に駆って立ち、レムトウファアン直率部隊に躍りかかって来た。

ローナク艦隊は豪雨のごとき一点集中射撃を叩き込んで第一艦隊の中央を突破、転じてこれを半包囲すると言う得意の戦法。“敵の旗艦を先ず屠れ”というマールク艦隊のセオリを、ローナクは彼らしい華麗な戦術で忠実に踏襲してのけたのだ。

レムトウファアンの旗艦『コーネット』号は、態勢を立て直す暇もなく、開戦一時間を経ずしてローナク艦隊の重囲に陥った。これに呼応するかたちでマールク分艦隊も戦場に駆けつけ、レムトウファアン艦隊は、ローナクにとって理想的な挟撃を受ける羽目に陥つたのである。

『降伏せよ、生命は保証する』

ミュアン准将からの降伏勧告に、戦艦『コーネット』は沈黙を守った。ミュアンは旗艦『ワスコリア』でブリッジで敵の頑なさを悪意を込めて罵った。

「馬鹿が、自分が死んで、それで責任を取ったつもりか、卑怯者……！」

死ねばそれで責任を果たせるといふ軍人特有の卑劣さをマールク麾下の提督達は一樣に嫌悪する。司令官が死ねば艦隊は崩壊し、指揮系統が乱れておびたしい戦死者が出るだろ……

「殺してやれ、敵の司令官は死にたいと仰せた」

十数隻の巡航戦艦の集中砲撃が『コーネット』を捉え、一瞬後『コーネット』は閃光の中に浮び上がった後、超融合爆発の純白の火球と化して音もなく四散した。

後に「エルメティア恒星系外縁の会戦」と呼ばれるに至るこの戦いは、奇襲による記録的な殲滅戦である。連邦空軍最強を謳われた第一艦隊ではあったが、奇襲され、指揮系統を最初に破壊された以上、マールク艦隊屈指の勇将ローナクの攻勢に耐えきれぬものではなかった。

第一艦隊は五〇〇隻以上を完全撃破され、辛うじて母星への離脱に成功したのは、シャルブック大佐に率いられた僅かに五〇〇隻足らずに過ぎなかった。戦死傷者数約一〇〇万人の余に至る連邦空軍史上屈指の一方的敗北である。

「大統領閣下、ル・ヨントがメルティアを攻撃しました。第一艦隊が全滅し、レムトウフアアンも戦死したもようです」

「メルティア？ ヴィルワかゼムリアあたりではないのかね」

報告を受けた時、リー・タウンナー大統領は意外そうな表情で、報告をもたらしした官房長官のハリー・ゼラーを凝視した。

「変ですね、ル・ヨントはメルティアを攻めたりはしないはずですが」
「同席していた副大統領のカーリッツ・レークシーも驚きを隠さなかった。」

「損害は重大なもようです……」

権力者達の反応に戸惑いながら、ゼラーは続ける。

「第一艦隊は壊滅し、メルティアは占領されました。ルリア二世陛下は詔を発せられ、ル・ヨント共和国政府に無条件降伏を受諾されました」

「……つたく」

温顔をしかめ、タウンナーは舌打ちする。

「首都を灼かれて震え上がりおったか。口ばかり達者で骨がないのは昔からだか」

「これは連邦に対する重大な背信行為、利敵行為です。まあ、令、彼女らの責任を問うのは無意味ですが、これはいずれ使えますよ、大統領閣下」

「確かに後日のことだな、カール。メルティアには暫く貸しておくとして……ハリー、ラム元帥を呼びたまえ。その後で閣議だ」

退出するゼラーとすれ違つように、格幅のいい初老の男性がシークレット・サービスに案内されて入ってくる。

「ここまで痛烈にやられるとは、正直言つて思わなかったな」

「早耳だな、ナイザル」

「だてに長いことこの世界にはおらんよ、リー。反撃はどうするのだ？」

ナイザル……タウンナーの与党である連邦共和党院内総務を勤める上院議員レイフレム・ナイザル・ネレイドは、逞しい顎を撫で回した。初老と言つてもいい年齢だが、一八〇センチを超える長身は鍛え抜かれた鋼鉄の強靱さと、肉食獣のしなやかさをいささかも失っていない。「メルティアを奪われたのはともかく、第一艦隊とレムトウフアアンを喪つたのは痛手だな。最高司令長官の後任を早く決めなければ、艦隊を動かせない」

「で、議会はどつなのだ、ナイザル」

「連邦党は動揺……というより、動揺を装っている。クアシムが早期講和を提案する方向で動いているようだ」

セリア恒星区選出の有力上院議員の名を挙げ、ナイザル・ネレイドは薄く笑つた。

「セリア政府は連邦がタート・レイピア政府に主導されているのを面

白く思っていない。第一艦隊の全滅をリーの失政だと強弁されると、ちよつと苦しい」

「失政には違いない」

あつさりとうウナーは認める。緒戦の痛烈な敗北も、この剛毅な政治家の精神には大したダメージを与えたようには見えなかった。

「戦争に犠牲はつきものだが、これはちよつと大きすぎる。まあ、我々のような門外漢が議論していてもしょうがない。善後策はラーム元帥に依存するものとして、我々は我々にできることをしよつではないか」

レーフラム・ネレイドは“エルメティア恒星系外縁の会戦”の推移をヒューロザイオン宇宙要塞で聞いた。

「負けたそうだが、という情報を持ってきたのはナカースル中佐である。

「惨敗だ。レムトフアアン提督も戦死……どんなマジックを使いやがったんだ、ル・ヨントの野郎は……？」

「メルティア空襲を陽動に使った奇襲戦法……そんなところだろう……」

レーフラムはヒューロザイオンの戦術コンピュータをアクセスし、“エルメティア恒星系外縁の会戦”のデータをコンソールに引き出した。

「拙い布陣だな、まるで叩いて下さい、だ」

「主力をメロスに置き、奇襲に備えていたのは当然の布陣だと思うが……」

「ル・ヨントの主力がシュネーゼルの方面で派手に動いていた。こちらが陽動で、我々はみごとに戦略的奇襲を受けてしまったということ

になる。まさか、“^{ザキヤン}間隙”を渡つて、メルティアまで入つて来るとは思つていなかった。ル・ヨントがヴィルワ・シュネーゼル方面から

侵攻を開始するとの前提を置いて、初めて有効な布陣なんだから、一気に懐に飛び込まれては対応のしようもない。戦略レベルで負けているんだから、戦術レベルでの用兵なんかあまり意味がない」

ナカースルは唸り、そしてコンソールに表示される戦闘が親友の指摘通りに推移して行くのを感じ嘆の目で見つめた。ローナク艦隊がレムトフアアン直率の部隊を粉碎し、指揮系統の混乱を起こした第一艦隊の他の部隊を次々に撃破して行く様子を。五〇〇〇近い艦隊を縦横に操り、思うがままに連邦空軍第一艦隊を壊滅させて、しかもローナクは艦艇をほとんど失わなかったと言う。どう楽観的に報告を集計してみても、ローナク艦隊の損害は数隻の中小艦艇に過ぎなさそうだと……

「見事な用兵だな」

「人殺しがうまいだけだ」

ピシャリと叩きつけるレーフラムにナカースルは目を見張る。

「傲慢になどなるものか」

メルティアの失陥、ついで“メルティア恒星系外縁の会戦”での第一艦隊の壊滅と、戦争のシナリオは連邦にとってはなほだ不利なかたちを見せているようだった。

この段階でレーフラムは何もできなかったし、また何もしようとはしなかった。ローナク艦隊に痛烈な反撃を食らわせる自信が彼にはあった。が、彼は動こうとはしなかった。

惜しくない、という思いが彼につきまとい、離れない。彼が作戦を立て、そして戦えば、連邦空軍は勝つだろう。しかし、それはル・ヨントに戦死者の大量生産を強いることでしかない。自分の責任に於いて膨大な屍の山を築くよりは、味方の無能なるがゆえに自らが死者の

列に加わるにしくはない……

レーフラムを現実の世界に引き戻したのは、突然に士官室のTVスクリーンに現れた見知らぬ青年の姿だった。

「……？」

最初、レーフラムもナカースルもそれが誰なのか理解できずに嘩然としてスクリーンに視線を奪われてしまっていた。

幅の広い堂々たる濃紺の軍服姿。華麗なほどの金髪に突き刺す様な鋭い眼光を放つ双の碧眼……一瞬後、レーフラムは理由もなく、この青年が敵であることを悟っていた。

『わたしはル・ラント共和国宇宙軍ヒースクリフ・ローナク中將だ。

親愛なる連邦市民諸兄に衷心よりのご挨拶を申し上げます』

眼光に劣らぬ鋭気に満ちた声が鼓膜を突き刺し、レーフラムの直感の正しさを証明した。

『我が軍はメルティア王国を完全占領し、王国政府においては、ル・ラント共和国への無条件降伏を受諾されている。賢明なる連邦政府首脳並びに市民諸兄に要請する。これ以上の戦いを我々は望まない。連邦政府において、放棄された和解のための交渉テーブルに再びつく用意をされるのであれば、我が軍はメルティアの占領を解除し、一兵も余さず共和国圏へ撤収した上に、メルティア復興のための支援をする用意がある。』

繰り返す。我々はこれ以上の戦いを望まない。我が艦隊は連邦の発祥の地メルティアを完全占領し、かつ、更に連邦圏深部への侵攻の準備を完整させている。敢えて戦いを望むのであれば、更に数百、あるいは数千万の生命が喪われることを、連邦市民の賢察に委ねよう。

本日より二〇日の期間、我が軍は直接的な軍事行動を停止し、連邦政府の賢明な判断を期待するものとする。軽率な判断はこの上にまた、多くの犠牲者を算する結果に終わるのみである。

連邦政府、及び市民諸兄の賢明なる決断を期待するや切である』

放送は連邦全域にわたって全チャネルを介して行われた。連邦空軍による強力なECMも何故か効を奏さず、連邦圏、特にエルメティアに隣接する恒星区はパニック状態に陥った。徹底抗戦を叫ぶ者、戦いに利なしとして休戦交渉を主張する者、また『最悪の平和でも、滅亡するよりはいい』として無条件降伏の受諾を訴える者など……大統領リー・タウナーは、暴動には連邦空軍師団を投入する一方、各惑星の耐核シェルターを開放しての退避を開始させることでパニックを鎮圧したのである。

が、目の前の敵ローナク艦隊に対しては、さすがのタウナーもなすところがなかった。

この時点で連邦空軍の戦力が全く尽きていたわけではなく、三個制式艦隊がユアロフレスタ泊地に健在であり、編成途中とはいえ二個制式艦隊相当の戦闘艦艇はヒューロサイオン要塞に集結を終えていた。

決定的だったのは、レムトゥファアン中將戦死に伴う指揮系統の混乱だった。このため、二万隻近い戦闘艦艇を擁しながら、連邦空軍艦隊は五〇〇〇ほどのローナク艦隊への反撃を断念せざるを得なかったのである。

第三節 巨艦動く

連邦暦一〇月一五日、レーフラム・ネレイドはレムトゥフアアン中将の後を襲った連邦空軍艦隊最高司令長官のもとに一冊の分厚い書類を提出していた。

「うむ、ご苦労」

エルウィン・レーフクイ・カーツ大将。五四歳。空軍次長を務める大将が自ら望んで艦隊最高司令長官に転出するなど、まさに異例中の異例と言ってもさしつかえない。

「ナウシユヒルに任せるつもりだったのだがな」

空軍総相ドルニトゥ・ラアム元帥の言葉にカーツは肩を竦めた。

「私は時間稼ぎです、ナウシユヒルを呼び寄せ時間を稼ぎ出せばそれで宜しい。私がやられば、彼を出して下さい」

カーツは八日にヒューロザイオンへ着任、直ぐにレーフラムを呼び出して作戦の検討を命じた。

「出撃を一〇月二〇日とし、作戦を二段に分ける……、メルティア政府首脳の救出を優先し、しかる後にローナク艦隊の撃退にかかる……見事な作戦だな」

カーツは薄い紙の書類を繰りながら軽く唸った。僅か一〇日足らずで作成されたその作戦案は、しかし、圧倒的に不利な現在の状況をとまたやすく逆転させ得ることを示している。

「“撃滅”を旨指すのではないのだな」
「そうです」

レーフラムは穏やかに頷く。顔色が幾分、冴えない。

「今の状況では撃退がやっとであると……」

カーツは「メルティア紛争」でのレーフラムの上官だった。レーフラムは戦艦『コーネット』号の砲術士、カーツは第三艦隊司令官。旧知の間柄であると言っている。

「宜しい」

大統領の裁可は即決だった。

ラアム元帥に向かってタウナーはこともなげに笑い捨てる。

「作戦は認める。しかし、予算が足りない。予算を動かすには議会の証人が要る。それでは奇襲的「反撃」などできん。ゆえに……」

呆れるラアム元帥の前に、タウナーは予算の横流しを命ずる命令書にサインしたのだ。

「違憲さ、無論な。負ければ政治生命どころじゃない、生命そのものをなくすんだからな。君のいわくにはこの化物を出せば勝てると言つ。なら構わん、どちらにしても政治生命がなくなるんだとしたら、生命の残る方に賭ける。辞表など何百枚でも書いてやるから、君の方は思いつ切りやってくれ」

『シグナ・フォース』号は巨大な戦艦である。戦艦として前例の無い戦闘力を持つだけでなく、三〇〇機にも及ぶ単座、複座の艦載機と、九〇シエルメス・ヤード級の突撃艦二〇隻を搭載、更には完全武装の一個師団を運ぶ。三隻の巨艦の搭乗員は七五九名に達した。

が、研究目的に乗艦する航宙研究所員の名を聞いたレーフラムは、眉をひそめずにはいられなかった。

エリサ・ナーバン中佐。連邦空軍航宙物理学研究所の主任研究員の一人。二二歳の若さで理学博士の学位を取った才媛として知られ、連

邦空軍の士官の中でも最優秀の一人に数えられる。が、人事を誤ったのではないかとレーフラムには思えた。

研究所に置くべき人材なのである。いかに連邦空軍が彼女を高く評価し、起死回生の反撃を企てる『シグナ・フォース』号幹部搭乗員に相応しいと考えたにしても、前線の修羅場へ出して、万が一にも失うことにならなければ、その損失は単に連邦空軍ひとりのそれに留まらないのだ。

「志願したわけではなくてよ」

長身、ブラチナ・プロンドの髪をショート・カットにしたこの博士中佐がこともなげに投げた言葉は、さしもレーフラムの予測したそれすら裏切っていた。

「でもノモーナの生活も、もつかれこれ三年……暫くフィールドに出るのも悪くはないわ。ちょっと分野が違っただけけど、それもいいでしょう。あなたが作戦を担当しているのなら、他の戦艦に乗るのよりも安全でしょう？」

「乗らない方が安全ではないのかな？」

「宮仕えの悲しさね」

顔色一つ変えるでもない。灰緑色の瞳は、かえってレーフラムの生真面目さを面白がってでもいるようだった。

医療部門を統轄するのが僅か一七歳のエミル・ノーラ特命中尉。士官学校オプスプラファスト分校に籍をおく候補生であるが、極めて優秀な士官としての才能に恵まれていると判断されたことと、セリア自治恒星区の出身であることが選抜に至る主要因となった。

「どつだい、だらしねえじゃねえか、最近の若造はよ……」

口の悪いナカースルなどはそう評したものである。彼自身とて二六歳、若造と呼ばれるに相応しい年代の最中にあることなど、柵の上に

放り上げてしまっている。

「余程人が足りねえんだな。連邦空軍も前途暗いよ」

「そう、君にこんな巨艦を任せねばならないようにね……」

レーフラムは反駁不可能な一言で、ナカースルのぼやきを封じた。

一〇月一九日、作戦は各級指揮官に伝達された。

「明二〇日、出撃する」

カーツは穏やかな口調で申し渡した。

「索敵艦からの報告によれば、メルティアの衛星軌道上にはル・ヨントの機動部隊、およそ二〇〇隻が停泊中であり、ローナク艦隊主力はメロス要塞に集結している。一方、メルティア・ペネトレイト市付近に大規模な地上基地が構築されつつある。開戦劈頭、『シグナ・フォース』号は直接メルティアの衛星軌道へワープし、ワープ明けと同時に突撃艦と艦載機による奇襲攻撃を敢行、軌道上の敵艦隊を叩き、更にメルティアへ空兵部隊を降下させてメルティア王室、及びに政府首脳の救出を行う。いかなる不測の事態が生じようとも、この方針は変更されない。

これは完全なる奇襲によってのみ、その成功が期待される極めて際どい作戦であり、従って参加兵力は攻防両面において懸絶する『シグナ・フォース』級三隻のみとする。友軍艦隊の助力は、現段階においては陽動以上のものを期待しない。しかし、メルティアの敵艦隊は惑星降下作戦用の補助艦艇が主体であり、また明日にはローナクの告げた期限が切れ、ローナク艦隊の主力は当然、ユアロフレスタの我が主力艦隊の動向に目を奪われているだろう。勝利の蓋然性は高いものを期待できるのだ。いや、『シグナ・フォース』級戦艦三隻をもってし、

しかも連邦空軍二千万将兵から選抜された諸君であれば、必ず勝利を手に来るものと確信している。

「以上だ、質問は？」

「何故マルチアなのですか？ 本艦をもってローナクの本隊を足止めし、第二から第五の四個艦隊と呼応して挟撃した方が合理的なのではありませんか？」

突撃艇の一艦を指揮する若い中尉が疑問を呈し、カーツは好意的な表情で彼の質問に頷いて見せる。

「合理的だ。もし、他に条件がなかったとしたらならばそのように作戦をとっただろう。が、これは連邦政府の最高首脳の決定だ。残念だが君の疑問をここで解いて示すことはできないのだ」

カーツは改めて一同を見直し、沈んだ表情のレーフラムに一瞬だけ目を止めた。

「他に質問はまいか、なければ解散。明日の出撃に備えよ」

戦艦『シグナ・フォース』は遂に動き出した。

レーフラムの作戦者としての巧妙さは、他の四個艦隊をしてエルメティア宙域への集結を命じたことだっただろう。ローナクへの牽制として『シグナ・フォース』号の動きを共和国宇宙軍から秘匿する一方兵力集中のための行動を兼ねさせたことである。しかもこの間、連邦政府は『シグナ・フォース』号の行動に合わせて、ローナクからの降伏要求を拒否する声明を連邦圏放送ネットワークに流し続けたのである。

「……歴史あるシエルメス連邦は、瓦として全からんよりも、寧ろ玉として砕ける道を選ぶ。市民諸君、連邦の栄光を信じ、ともに戦おう」

ではないか。人事を尽くして、そして倒れて後止まんの精神のもとに戦わば、必ずや全能なる我が主は我らの頭上に勝利を冠せられるであろう。

「連邦万歳！」

「熱演……」

奇妙な節回しをつけ、ナカースルは肩を竦めてそう評した。

「よく言つよ、全能なる我が主、瓦として全からん……だと。あんな時代錯誤な科白、どっから引つ張つて来た？」

レーフラムは心えない。大統領の演説の内容などどうでもよいこと。ローナクを挑発できさえすればよいのだから……洒落気のあるタウナーが、古書かなにかから前時代的な演説を漁って、何やら狂信者めいた科白を書き上げたのでもあるだろう。放送を見る市民の呆気にとられた表情が、レーフラムには見えるような気がした。

「ワープに入るぞ、各部最終チェック。ワープ、一五分前、秒読みを開始しろ」

巨大な戦艦はヒューロザイオンの船渠を音もなく翔び立ち、そして間もなく艦首を空漠たる宇宙の只中に向けて固定した。

従来の戦艦であれば、大質量を間近に控えた宙点でのワープなど不可能な筈だった。当然、通常の重力子駆動を用いて外宇宙へ出なければならず、そうすればローナク艦隊の監視網にひつかかるだろう。であるからこそ、ローナクも連邦空軍に奇襲の余地なしと確信していたのである。

この戦艦は違っていた。大質量の影響を遮断し、任意のポイントでのワープを可能にする重力波遮蔽シールド……極めて高張るために『シグナ・フォース』級戦艦に至って漸く実用装置の搭載が可能になった……の威力を、この戦いで初めて発揮する機会に恵まれたのだ。

連邦曆一〇月二五日、メルティア衛星軌道上のダーク機動部隊所属艦の跳躍航法追跡装置が、突然狂気のように警報を喚き散らし始め、ル・ラント将兵の度胆を抜いた直後、呆然とする彼らの目前に化物が現れた。

「敵艦隊を確認、前部主砲斉射。目標至近！」

時を移さず、『シグナ・フォース』、『リヴァイア』、『トゥルーダー』の主砲が目に見えぬエネルギーの束を吐き、ル・ラント艦を直撃。巡航戦艦の防禦シールドを一撃で貫通した。直撃を受けたル・ラント艦は苦悶する余裕すらなく超融合核爆発の閃光の中に取り込まれて四散する。

「初弾命中。突撃艇全艦、艦載機全機発進せよ！」

リュホールド・ラフ大佐の命令にも弾みがつく。突撃艇は、艦首に大口径の熱線砲を装備、超融合核雷発射管三門を持ち、至近距離ならば巡行戦艦にさえ一撃必殺の威力を有していた。

巡洋艦『ワルフ』が最初にやられた。至近距離に肉薄した突撃艇の主砲をもろに浴びせかけられたのだ。『ワルフ』は艦体中央を熱線砲に貫通されて二つにへし折れ、艦首側が宙を舞って直衛の駆逐艦に激突し、艦尾側は近くにいた航宙母艦の艦腹をぶち抜いた。

「行けるぞ、攻撃の手を緩めるな……空兵隊降下準備！」

先手をとったことを確信したラフ大佐の声が鋭い緊張を孕んだ。間髪を入れずに『シグナ・フォース』の飛行甲板から無数の舟艇が発進し、メルティアの地表に向かって降下する。

一瞬の戦いだっただ。

大型艦は突撃艇の主砲を至近距離から叩き込まれて次々に轟沈し、中小艦艇は態勢を立て直す余裕もあらばこそ、一〇〇〇近い艦載機群

にまといつかれ、また巨大戦艦の圧倒的な火力の餌食となつていったのである。

「よし降下しろ」

ラフ大佐が命じた時、軌道上のダーク支隊は殆ど壊滅状態だった、僅かに生き延びた少数の艦艇の抵抗が散発する他は組織的な抵抗は全く影を潜めたままである。それ程までに『シグナ・フォース』号の奇襲は凄まじく、そして苛烈だった。

ゲイル・ダーク准将は、馬鹿馬鹿しいことに何も出来なかった。『シグナ・フォース』号の奇襲が報じられた時、彼は地表の基地で安らかな眠りをむさぼっていた。

「何だ、騒々しい。今、何時だと思ってる？」

苦々しげに叱責するダークの表情を、伝令となつてきた少年兵は啞然とした表情になつて見つめ、そして逆に彼の方が司令官を叱り飛ばすかのように声を張り上げた。

「敵であります！突然に衛星軌道上に現れ、既に我が支隊は壊滅状態であります。司令官閣下のご指示をお願い致します！」

「な、なに、て、敵だと……」

「敵であります」

建物が激しく振動し、ダークに状況を悟らせた。信じ難いことだが連邦空軍は反撃に転じたのだ。どうやってローナク艦隊主力を迂回したのかは知らないが、彼らはメルティアを最初に奪回しようとしているのだ。

後悔の念がダークの胸に突き上げる。支隊の艦艇には戦闘態勢をとらせていなかったのだ。

「敵は何隻か？」

「分かりません。敵艦出現の一言だけで……」

またぐらりと建物が傾いた。爆発音に続いて、レーザー・ガンの発射音が次第に激しさを増しながら距離を縮めて来る。司令室へ向かうとするダークの前に血塗れの兵が現れる迄、幾らも時間はかからなかった。

「何だ、何事だ！」

「シエルメス兵だ……一〇〇〇、いや二〇〇〇はいる……に、逃げろ！」

「馬鹿を言つな、何でシエルメス兵がいるのか？」

「知るか。いるものはいるんだ。司令室も奪られた……も、もう駄目だあ」

「司令室を奪られただと……メルティア政府首脳はどうしたか！」

「そ、そんなことわかるもんか……奴らは機動歩兵、こつちは殆ど丸腰だ。叶うわけじゃないか……」

爆音、そして規則正しいガチャ、ガチャという足音。

不意にダークの目前に見馴れない機動歩兵が現れた。愕然とするダークに向けて十数門のバズーカ砲が狙いを定め、超高張力鋼製のトマホークが非常用の照明の光を吸って血の色の輝きを閃かせる。

『ダーク准将？』

一人が問うた。

『連邦空軍第三七空兵師団ティ・リユン・ホウ少佐。連邦空軍の名においてあなたを捕虜とする。大人しく従われない』

夢ではないのか……ダークはおのれに問う。つい数時間前までは勝ち誇ったメルティア占領軍司令官ではなかったのか……とすると俺は未だ寢室で眠りこけているのか、それにしてもなんてリアルな夢なんだ……

が、次の瞬間、電磁手錠の冷たさが彼に一切が現実であることを悟

らせた。

僅か三時間足らずの作戦に過ぎなかった。この戦い、所謂“メルティアの会戦”で共和国宇宙軍は戦艦一八隻を含む約二〇〇隻を破壊、ないしは捕獲され、戦死者六万二〇〇〇、捕虜三万五〇〇〇を算した。連邦空軍の損害は突撃艇二隻の小破、艦載機四機の損傷に過ぎず、戦死者は皆無。戦史にもまれな、完璧な奇襲成功である。

基地の地下からメルティア王室、政府首脳的全員が無事に救出されたのはそれから間もなくのことだった。

「こちらです」

メイリア・リアーが案内されたのは、士官居住区画の一〇四号室。数階層をなす士官居住区画の一階層がメルティアの首脳達を迎え入れるために用意されていた。

「何れ友軍の艦隊が迎えに参ります。数日のこととなりましようが、ここでお待ち願います。ご不自由ではありましようが、本艦は戦艦でありますので何卒ご容赦願いたいとのことであります」

案内してきた若い士官が幾分切り口上の早口なのは、メイリアのプリンセス・オブ・メルティアの称号を過分に意識しているせいかもしれない。浅黒い肌に短く刈つた黒い髪。身のこなしは俊敏そのもの。歯の白さが鮮やかに見える。

「お聞きしても宜しくて？あなたは砲術士官でいらっしやう？」

「は、本艦の第四対空班を指揮しておりますティム・レイグ中尉であります。艦隊参謀長より、プリンセス・メイリアを護衛せよとの命を受けております」

「先任参謀……？」

「レーフラム・ネレイド参謀大佐であります」

喋り過ぎである。部外者のメイリアにここまで話す必要はない。が僅かに小首を傾げたメイリアに濃紺の瞳を据えられ、レイグは自分の喋ってしまった内容にさえ気がついていないのだ。

だから、レーフラムの名を耳にしたメイリアが、急に頬を紅潮させたのにも気がつかない。

「大佐にお会いできません?」

「は……大佐に、でありますか……え、いや、しかし、大佐は只今、作戦会議中でありまして……」

「今直ぐには申しませんわ……取り次いで下さるわけにも参りませんの?」

「は、い、いえ、そういうわけでは決して……」

レイグはあがつてしまっている。

「ネレイド大佐はわたくしを護衛するようにとお命じになったのでしよう。それなら、取り次いで下さることも護衛の内、とお考えになつて下さりませんか? 無理かも知れませんが……」

そういうものか、と頷くのはレイグの錯覚である。とんでもないこじつけなのだが、メイリアが言つともっともらしく聞こえるものらしい。

しばらくためらつてのち、レイグはレーフラムに取り次ぐことを承諾してくれた

メイリアはスツールに腰を降ろして待った。コンソール組み込みのライティングデスクとスツール、簡易ベッドと小さなシャワールームクローゼットといった、士官用個室の殺風景さもさして気にならなかつた。

「ネレイド大佐です。お呼びでしょうか」

「お入り下さい」

メイリアは弾かれるように視線を上げる。思っていたのよりもずっと高い位置にレーフラムの端正な顔があつた。鞭のように引き締まつた長身にオリブドラヴの艦内服。よく整つた美貌に、僅かに乱れた銀髪が淡く輝いている。メイリアと視線をあわせ、漆黒の瞳が心持ちにはかむような微笑を浮かべた。

「有難うございました。救つて頂いて。心から感謝します」

「いえ、任務ですから。それに私は作戦を立てただけ、礼は空兵隊を指揮したティ少佐に言つてやって下さい。彼が命がけで敵基地を占領し、貴女方を救いだしたのですから」

言いながら、間近で見たメイリアの容姿が記憶を刺激したらしく、レーフラムの眉に奇妙な影が浮かんで消えた。

「確か……第二艦隊のメルティア進駐のりに……」

漸く思い出した。第二艦隊のメルティア進駐、「メルティア紛争」とその終結に伴つ五六年条約によつて、連邦空軍はメルティア駐留権を得、その先兵として送り込まれたのが、『シグナ・フォース』の就役までは連邦空軍最大の戦艦を謳われた『シグナ・レート』号以下の第二艦隊……レーフラムはライン参謀教育の為に第三艦隊に転じるまでの一時期、同号の砲術長としてメルティアに駐留していたのだ。

『シグナ・レート』のシャトルがメルティアのスパールク宇宙港に降り立ったのを迎えた十代半ばにさしかかつたばかりの少女……いや、確かそれ以前にもどこかで出会つたことがあるような……

奇妙に懐かしく、郷愁をすら覚えるような記憶が、目の前の柔らかな容貌の少女に繋がっていることを、レーフラムは不意に思い当つた。掴もつとすると、つい、と逃げ、掴んだと思つた淡雪のように溶け消

えてしまつ記憶の断片がレーフラムにはもどかしかつた。

「ええ、光栄ですわ、覚えていて頂いて」

レーフラムは落ち着かない気分を味わっている。彼は人が苦手だった。殊にプリンセス・オブ・メルティアと言葉を交わすなど……親友のナカースルあたりならうまくやるかも知れないが。

メルティアは、惑星のサイズとしては連邦母星に較べるとかなり小さい。重力加速度比も〇・七七。メルティアの人々は一般に小柄であり、メイリアもその例に洩れない。王位継承者ローリア・リアーは絶世の美女と讃えられるだけあつて、見る者をしてまばゆさを覚えさせずにはおかない。それに較べれば、小柄でやや丸顔、笑くぼの似合うメイリアはいかにも子供供した印象を拭い切れない。

「それで……何か、「こ不満でも？」

やや声が震える。

「ええ……」

ちよつと言葉を切る。

「メルティアの人々は、いつ救けて頂けるんですの？」

おや、という表情がレーフラムの目に浮かんだ。メルティア政府首脳の中でメルティア市民を気遣い、レーフラム達にそれを問うた者は皆無だった。特にローリア・リアーなどは連邦空軍の用意した待遇の総てに不満を鳴らし、兵達を閉口させているのだ。

「……今直ぐに、というわけにもいきません」

連邦の被つた被害として小さなものではなかった。ダーク支隊を全滅させ、メルティアを奪回したとは言え、ローナク艦隊主力は健在であり、これの撃退をなおざりにしてまで、メルティアの復旧を優先させるべき理由を連邦政府は持たないだろう。

「お願いしても宜しくて……？ スルフエイク州の地下シエルターと

連絡を取りたいのです」

「スルフエイク州……何故？」

「兄の一家がいます。無事かどうかを」

「兄とおっしゃる？」

「スルフエイク侯爵フルク・トヒユナ」

ほう……レーフラムは思わず声を上げる。メルティア統一の英雄、そしてメルティア王朝の開祖シルウィス・トヒユナの伝説は彼もよく知る所。古代史に憧れ、そして考古学を志した一時期を持つレーフラムもまた、歴史を志す少年達がそうであるように、『シルウィスは誰』に取り憑かれたことがある。知らぬ名前ではあり得ない。

「お願い、大佐！」

彼の沈黙を躊躇と見たのか、メイリアは碧い眸に必死の訴えを浮かべる。

「兄は……それに義姉も、真つ先に避難するような人ではありません。

最後の最後まで留まつて一人でも市民を退避させようとしていたに違いないのです。だから、よけい案、しられます」

「それは……しかし……」

レーフラムは迷わざるを得ない。よし、とは言えぬ。『シグナ・フォース』は無電封止中。ローナクに所在を知られる前に電撃的な各個撃破を狙う以上、メルティア貴族の一人や二人の安危を確認するため、作戦そのものを危つくるような行動は許されない。そう、作戦はレーフラム自身の手になるものだから……

最初にメルティアを救援したのは、連邦の好意のゆえなどと解釈するのは、よほどにおめでたい人間だけだろう。たとえ数年前に連邦と戦つた相手であるつとも、連邦は必ず救援するのだというデモンストラーション。だから、連邦政府首脳が、果たしてメルティア首脳が無

事に救出されることを望んでいたかどうかすらも疑問なのだ。連邦圏を掌握する“鋼鉄の爪”連邦空軍にとって、政治目的は常に総てに優先する。

レーフラムはエルヴェニツク大佐を呼び出した。

“何だ、おい本気か。第一級無電封止命令だ。暗号無電の発信も禁止されている。違反すれば軍法会議ものだぞ。”

プリンセス・メイリア、残念ではありますが、「ご希望には添いかねます”

メイリアが悄然とするのを、エルヴェニツクは渋い表情で横目にする。

“言い難いことを言わせるなよ”

「申し訳ない。封止命令のことは充分承知していた」

“なら、わざわざ呼び出すこともないだろう。レイディに頼みごとをされれば誰だっていやとは言いたくないだろうがな……”

「メルティアの地表探査はしたのか？」

“やった。写真撮影とリモート・センシング。少なくとも大陸は総てはん、スルフエイク地方の探査結果を見せて差し上げようってわけか”

「軍機だったな」

“一応な。ちよつと待て。閣下の了解を得る”

エルヴェニツクの視線が横へずれ、声が消えた。一言、三言、口が動き、不意に意外なことを聞いた驚きに眉が跳ね上がる。

“カーツ閣下からだ、切り換えるぞ。悪い話じゃなさそうだ”

「何？」

スクリーンが司令官室に切り換わり、カーツ中将はレーフラムに向かって直ちにスルフエイク侯爵一家を救出に向かうよう命ずる。

“命令だ、一個中隊を連れて行け。貴官が自身で指揮を取るのだ。これは連邦政府からの指示だ。反問は許さん”

「命令受領、そして了解」

応える。訝しいことに変わりはないが、その命令が連邦政府のどのレベルから出たものであるかを質す権限は、一介の大佐に過ぎぬ彼にはない。

「ご自分でいらつしゃってくださいるんですの？」

メイリアが問う。連絡を取るのではなく、救出に行ってくれるというのだから、手放して喜んでもいい筈のだが、彼女もどことなく釈然としなない表情。勿論、本当は救けに行つて欲しい。しかし、市民の多くが被害を受け、地下シエルターに閉じ込められている者も少なくない今、王女としての立場上、それは口にできないこと。連絡を取りたいと言つのが彼女の精一杯のわがままだった。

勿論、連邦の好意づくと思つほど彼女は世間知らずではない。“シエルメス連邦には人間の感情はない。あるのは冷酷な国家利益だけだ”とは、兄の侯爵の口癖である。

レーフラムは頷き、にこりと微笑んだ。

「必ず、^{マイキス}侯をお連れします」

「ありがとうございます、大佐」

メイリアはつと立ち上がり、レーフラムの手を把つた。

「……！」

レーフラムはびっくりしたように慌ててあとじさる。

「失礼します、後ほど、また……」

想っていた通りの人……メイリアはきびきびとした足取りで立ち去るレーフラムの後ろ姿に暫し見惚れていた。

欺瞞と陰謀、嫉妬と反目の渦巻くメルティアの白亜宮。そのただな

かでその青春を送らねばならないメイリアは、レーフラムの、冷酷さを表面に装いつつ、その実、内面に暖かさや優しさを持つ両面に魅せられ、憧れたのだ。

「この戦艦に乗るつ」と決心したのがこの時だった。この戦艦の乗組員の一人に加えて貰おうと。

戦艦に乗り組めば、それは時に死に繋がることになる。軍事に疎い彼女とて、充分に承知していたし、事実そう考えただけで怖くて仕方なかった。強いて言えば衝動。初恋を知った少女の、恋する人の傍らにありたいと懐つ抑え難い衝動であつただろうが、それだけはない。そうせねばならない、というそれは一種の義務感だつた。彼女自身どうにも説明し難いことながら、そういう義務感が彼女を衝き動かしていたのだから。

「プリンセス、長官がおいでを願いたいとのことです」

「二時間もした頃、レイグ中尉が彼女を呼んだ。スクリーンを入れるとレイグはしゃちこぼつて敬礼する。空軍礼法は、プリンセス・オブ・メルティアたるメイリアを中将に準じせしめるのだ。」

「はい、どちらまで参れば宜しくて？」

「ランディング・デッキまでご同道願います」

レイグは突撃艇の格納庫にメイリアを案内した。突撃艇はドックと俗称される鋼鉄製の円筒内に格納され、楕円形に配置されたドックの中央に突き出した着甲板にチューブで繋がれている。

メイリアが着くと、チューブの気密ドアが開き、蒼白なやつれ切つた表情のラルクと、彼に引き続いて、ぐつたりしたファーリアを腕に抱いたレーフラムが姿を現した。

「お兄様……？」

レーフラムの背後を透かし見、そして恐ろしい事実気づいて呆然となる。

空軍礼法ではメルティア侯爵は准将に優越し、侯爵妃もこれに準じる筈。少佐は侯爵妃シエリアよりも先に艇を降りることを許されないのだ……シエリアが生きていれば……

レーフラムはラルクに続いて艇を降りた。意味するところは明白だつた。

「……お義姉さまは？」

レーフラムがかぶりを振り、メイリアは言葉を途中で飲み込む。

「侯妃シエリアのお姿はありませんでした。お気の毒です」

低く言つ。

「回避されるのが遅すぎたのです。専用のシエルターにすぐ回避されていれば何ともなかつたでしょうが、ご夫妻は最後まで地表に残つて市民の回避を指揮なさつていたため、第一層のシエルターで爆撃を受けてしまわれたのです。シエルターの天井が崩れていました。残念ですが、本格的な機材を用いなければ手がつけられません。最早、時間的にこれ以上メルティア宙域に留まることも不可能です……」

「いいえ、感謝しています。兄と、姪を救つて頂いて」

澄んだロイヤル・ブルーの瞳に見つめられ、レーフラムはうるたえて目を反らした。

「別室を用意させます。ご一緒におられた方が宜しいでしょう。特に……」

彼は彼の腕の中で寝息を立てているファーリアのあどけない寝顔に視線を落とす。

「特に母上が亡くなられたのですから」

ファーリアの身体を受け取ったとき、メイリアは姪の眠りが自然の

ものでないことに気づく。苦しませまい、という配慮からラルクが睡眠薬を与えたのだらう。

「レイグ……」

ふと、目をそらしたレーフラムが命じる。

「部屋へご案内しろ」

“メルティアの会戦”の翌日、『シグナ・フォース』以下の三隻はハイシン宇宙要塞から急航行してきた第五艦隊と会同した。『コーネツト』級巡航戦艦、『トウリニール』級超大型巡洋艦号を中心に四五〇隻の打撃艦隊は、数の上ではローナク艦隊の五〇〇隻には及ばないものの、『シグナ・フォース』級戦艦の戦闘力を考えれば、反攻には十分のものと云えた。連邦空軍艦隊も漸く反撃態勢を整えつつあったのである。

ヒューロザイオンからは戦艦『リヤミア』を旗艦とする補給船団が来航、『シグナ・フォース』以下の艦艇に大量の補給物資を供給する一方、救出したメルティア首脳を旗艦に移した。

その中の一人が思いがけないことを言い出してカーツ大将以下を困惑させたのはこの時である。

メイリアだった。こともあろうに『シグナ・フォース』への搭乗を希望したのである。カーツが難色を示したのは当然だった。

「戦争というものを貴女はご存じない。前のメルティア紛争のごとき、ほんの局地的なごせりあいですら戦死者は八〇〇〇を越えています。まして、今度の戦いは、理念も価値観も、何ら相通じるところのない異星人種間の争いです。妥協の余地は殆どなく、いずれか一方が絶滅するまで何年も続くかも知れぬ戦となるでしょう。既に出た犠牲者だ

けでも一〇〇万を数えるに至っている有様です。我々職業軍人ですら予測しかねるような凄まじい戦いが続くことでしょう。そのような戦争の、そのただなかに、王女たる貴女をお連れするわけには参りませぬ」

が、メイリアは自分が王女であるがゆえにこそ戦いに参加したいのだと主張した。

「王族はメルティアの元首であり、市民に対して責任を負っています」

彼女は折れなかった。

「今度のことがメルティア政府の無能のゆえとは申しません。でも、今メルティアの人々は地下シエルターで救いを待ち詫びています。そんな時に、王族の一人として連邦母星へ逃げのび、安全な所でのつうとして居るのは、自分の負うべき責任を放棄することになります。」

それに連邦の方々がメルティアのためにも戦って下さると言うのに、メルティア市民の一人としても危険のない所に隠れているのは卑怯です。わたくしは王女たるの責任を放棄したくないし、卑怯者にもなりたくないのです。」

「お願いです、提督。わたくしをこの戦艦に乗せて下さい」

カーツもレーフラムも困惑した。正論である。市民を放置しておいて自分達だけがシエルターへ逃げ込んだメルティア政府首脳の醜態は見るに耐えない。それに較べれば、メイリアの態度は王女たるに相応しい、と個人的な感情としては賞賛をためらうものではない。しかし、戦艦への搭乗を許可するとなると話はおのずから別であろう。彼女を加えることで『シグナ・フォース』搭乗員の負担が増しこそすれ、プラスになるべき要素はかけらほどもないのだ。

「熱意は買うべきべきです。ル・ヨントとの戦い、この一戦でけり

つくものではありません。メルティア王女が自ら進んで戦場に立つというのです。少々のマイナスには目を閉ざしても構わないと思いません」

エリサ・ナーバン中佐が、わたしが引き受けましようと思し出た。

「そう負担にはならぬようにできる、と思いますから」

メルティア政府も反対せず、むしろ、積極的に賛成する気配を示したほどだった。

「ふぬけめ……」

毒づいたのはナカースルである。

「一九の女の子一人を戦場に立たせといて、手前らはさつさと後方へ退避かよ、こ立派なこつた。さすがに王様ともなると平民どもとは一緒には戦えんというわけか」

エリサよ、お姫様だからって手加減は抜きだぜ」

エリサはさりげなくナカースル毒舌をかわした。

「手加減をするような余裕があると思って、レイ？航法の方が手加減できるほど人が余っているのかしら？。だったら少しこつちへまわしてくれなくて？」

カーツは許可した。さしあたり士官候補生待遇とし、ナーバン中佐に扱いを一任する。

「空軍礼法では……」

カーツはメイリアに辞令を伝達してから続けた。

「メルティア公爵以上の貴族は空軍中将以上に相当することになっているが、今回は儀礼のために乗って頂くわけではない。期待される能力と、貴女の意志に敬意を表するとして士官候補生、止むを得ざる所と思う、我慢して頂く。本職も一人の士官候補生として貴女を扱っただろう」

「よくわかっています、提督」

応えながらもメイリアの華奢な身体は不安に震えていた。幼い頃から、戦艦はおるか宇宙船にすら殆ど乗ったことのないメイリアだった。彼女に許されていた僅かな生活圏は、あくまでメルティアの地表に限定され、宇宙へ出ることは許されていなかったから……

だからこそ、こんな巨大な戦艦に乗り組んで果たしてやれるのか……自分で言い出したことながら彼女の心は不安で波打っていた。

メイリアが何時になく顔色を強ばらせ、青ざめさせていたのも無理のないことだった。

「貴女が本艦の搭乗員の一人となられたことは、いずれ連邦の全市民が知るようになる。総てのメルティア市民が貴女に喝采を送っているのだ」

励ますようなカーツの言葉に、メイリアは精一杯、直立不動の姿勢を取って敬礼した。

『連邦空軍メルティア奪還。王室並びに政府首脳的全員を救出せり。ダーク支隊は壊滅。ダーク司令官は戦死のしよう』

戦勝に酔っていたローナク艦隊の空気が一変した。

レーフラム・ネレイドの作戦の巧妙さは、ローナクが艦隊をメロス要塞周辺宙域に集結させるのを見計らってメルティアへの突入のタイミングを設定した点である。『シグナ・フォース』級戦艦と異なり、重力波の遮蔽装置を持たないル・ラント艦は、恒星系から離脱しなければ、恒星系間航行に入れぬ。

「何だど！」

さしもの「勇将」ローナクが愕然として色を失った。

「マーク、どう見ろ？」

「些か……」

マークも首を捻らざるをえない。

「ダークを一撃で屠るとは……余程豊富な予備兵力を連邦空軍が有しておったことになりましょつな」

「奴らの兵力は四個艦隊……ヒューロザイオンから一個艦隊を出したらしいことは確かだが、それにしても速すぎる」

戦艦『アンバード』を中心に二〇〇隻近い強力な機動部隊であるダーク支隊。それが一日足らずの戦闘で壊滅したのだ。まさかそれが化物のような巨大戦艦によってなされたものであるうなどは、さしもローナク、マークの二人にも思い及ばない。

「撤退すべきです」

「何……？」

マークは言う。もともとこの作戦は、連邦空軍の兵力密度の薄さを利用して一挙に連邦の中枢を制圧できるという前提のもとに立てられ、そして事実作戦は計画通りに推移した。

「しかし、いずれ連邦空軍が本腰を入れて反攻に出て来れば、五〇〇の艦隊では支えきれないのは当然のことです。その場合は直ちに撤収するのが、元帥との申し合わせであったはずです。これ以上、この宙域に留まることは消耗戦を意味します。我々にとって不利過ぎます」

「退けや言いつのか……」

歯の間から押し出すような声だった。端麗な眉がぎりつと吊り上がり、目が蒼い焰のように歴戦の副将を射る。「マーク元帥府の三将の一人として“勇将”の名をほしいままにしたローナクにとつて、ダーク支隊の瞬時の壊滅はまさに屈辱以外のなにもでなかつた。

「左様です」

しかし、マークも主張を退けない。

「自分より強い敵とは戦つな、と言つのが百戦して百勝するための鉄則でありましょつ。今退けば、損失はダーク支隊のみ。二〇〇の艦艇、一〇万の兵を失つたこと、これは決して小さなものではありませんが、ダークを一撃で屠り去る敵です。今度は第一艦隊を撃破したようにはいきますまい。まして、ドライバムから三〇〇光年、エルベからですら二五〇〇光年強、奇襲の利を失えば、連邦圏深部での我が軍の勝ち目はまづたくありません」

マークは言う。

中途半端な撤退というものはないのだ。退くのなら一気に連邦圏を離脱すべきである。ウィルワ恒星系の外縁くらいまでなら友軍艦隊の応援を頼むこともできる。ここで一日行動を送らせて、敵の挟撃下に陥つたら、それこそ援軍どころではないではないか。

ローナクは数瞬の沈黙を先行させた。優れた軍人としての理性が感情をねじ伏せるまでの時間。職業軍人の陥りやすい心理の陥穽からは、ローナクは自由でいることができた。マークやミュツケルと同様に、ローナクも生粋の軍人ではない。

「……了解した。ミュアン、ラントに連絡。可能な限り早く、本要塞を放棄し、撤収に移る」

「了解いたしました、閣下。連絡のために一支隊を先行させてはいかがでしょうか」

「無用だ」

連邦圏の深部である。地の利は決定的に連邦空軍にある。下手に兵力を分派しては、みすみす連邦空軍に各個撃破の機会を与えるようなものではないか。

「元帥とネイを信じろ、マーク。わざわざ知らせずとも、何とかしてくれるし、俺たちが俺たち自身をも救えぬと言つのであれば、彼らに救援を求めたところで間に合はずまいさ」

「……悔しい、とお思いですが、閣下」
「悔しいさ」

左の掌を拍つ拳の勢いがいつになく激しかった。

「俺が職業軍人だったとすれば、面子を立てるためにするすると戦線を拡大するだろう。一戦し、制式艦隊をもつ一個、叩きつぶせれば、マークの負けも収支償う……が、それが心理の罫つてやつだ」

無能な軍人ほど、「今度こそ」という言葉を好むのだ。

抽斗から取り出した封も切つていないウイスキーのボトルを、ローナクは放つてよこす。辛つじて受けとめ、眉をひそめるマークに、ローナクは言い放つ。

「貴官に預ける」

「いつまででしょう？」

「無事に共和国圏にたどりつければ、貴官に進呈する。もし、俺がやられたら、甲いの代わりに飲んでくれ」

「では……」

厳格な表情を、マークは緩めた。

「確かにお預かりしますが、封を切るときは徹宵しておつきあいをお願いいたしますぞ」

『シグナ・フォース』を旗艦とする臨時艦隊……後にそれが新編成の第一艦隊の中核となったのだが……は、メルティア宙域に一日しか留まらなかつた。時を移してローナク艦隊に撤退の余裕を与えることをレーフラムは恐れたのだ。

が、そのことはメイリアがこの巨艦に馴れるべき時間を一日しか与えられなかつたことも同時に意味する。

搭乗員は、この当時四〇〇〇万を数えた連邦空軍将兵の中から選ばれた最高の練度をもつ士卒ばかり。その中であつてずぶの素人、それもお姫様育ちのメイリアが彼らに互して効果的に活動することを求められたのだから、彼女の負担は小さくはなかつた。

ナーバン中佐、そして軍医長ノーラ中尉とも、可能な限り彼女の負担を軽くするよう配慮したが、実戦行動に入っている戦艦の中ではそれにも限界がある。好んで死におもむくものはいない。僅かの反応の遅れが致命的な結果に直結する戦場で、メイリアをそれほどまでに庇うことなど、誰にもできはしなかつたし、またナーバン中佐もノーラ中尉はそれを命じることでもできぬのをよく知っていた。命じれば、部下は指示に従わなくなる。

「そついつものなのよ、ええと、何と呼べばよくて。メイリアでいい？」

初めて会つた時、エリサ・ナーバンはそう切り出してメイリアを戸惑わせた。

「リアー候補生なんてあんまりだし、それに階級称って好きじゃないから」

変わった中佐殿とメイリアは思つ。仰々しく、形式にばかり拘るメルティア宇宙軍の士官しか知らないメイリアには、階級称が好きじゃない、などと言いつ中佐など想像もつかなかつた。

が、同時に気が楽にもなつた。

「メイと呼んで下さい」

「メイ……？ オークイ、いい名ね」

で、話は戻るけれど、本当にあなたのこと、余り庇つては上げられ

ないと思う。士官は下士官、兵員の命を預かっている。特定の人間を庇つために、他の人間により多く危険を冒せ、とは命じられないのよ」
分かつてはいるつもりだった。しかし、それがあくまで、つもりに過ぎないことを、間もなくメイリアは思い知った。艦内生活の厳しさは彼女の想像を遙かに超えていた。当直を終わると、メイリアは食事も咽喉を通らないほど疲れ切っていたのだ。

「疲れてるようね、メイ」

当直交替の申告をするメイリアにエミル・ノーラが話しかける。乱れた前髪がメイリアの広い額に汗で貼りつき、目の下には薄く隈が浮いて疲れ切っていることを示していた。

「ちよつと座つて」

「え？」

「何か薬を射つたげる。大丈夫よ、せいぜい栄養剤だから」

馴れた手つきで高圧注射器を用意し、メイリアの艦内服の袖を開く。華奢過ぎるほどに細い腕に、エミルはさすがに不安を覚える。この娘大丈夫かな、と。彼女がメイリアよりも二歳年下である事実は、この場合あまり意味を持たない。

「明日、メロス宙域に入ることは聞いた？」

「ええ」

「明日は訓練は無い。代わりに本物の戦いがある、怖い？」

「とても」

本音だった。

「私も怖い」

とエミル。

「中尉が？」

信じられない、というメイリアの表情に、エミルはブル・グリー

ンの目に照れたような表情を浮かべた。

「買いかぶらないで。私も実戦は初めて。でも信じることね、ネレイド大佐が作戦参謀で、カーツ閣下が最高司令官なら負けはしないわ。そう信じれば幾らかでも怖さが減るし、実際私はそう信じてる」

その夜。

『シグナ・フォース』号の下士官居住区で、メイリアは眠れぬままに過ごしていた。初めての兵員生活に疲れ切っている筈なのに、かえって目が冴えて眠れなかった。それこそ生まれて初めて実戦に参加することからくる興奮、これからの戦闘に対する不安、そのほか様々の思いが彼女の脳裏に交錯して、安らかな眠りを妨げる。

しばらく輾転反側して後、彼女は眠るのをあきらめ、部屋を出た。下士官居住区は二人部屋だったが、最大三万人を収容する巨大戦艦の居住区は多く空いていた。ノーラ中尉の配慮もあって、メイリアには同室者がいない。下士官居住区をあてがわれたのは、『シグナ・フォース』の搭乗員の全員が士官、ないしは下士官であったからに過ぎないのだが。

艦の中央部、古代の軍艦の司令塔を思わせる、しかしはるかに小さな構造物が突き出している。航行中のみ舷外へ展開される展望室だったが、彼女がかけたのはこの展望室だった。星空を暫くでも眺めていれば眠気も兆そつというもの……

彼女は入口で足を止めた。

通常航行時のみ開かれる巨大な展望窓の、窓際に黙然とたたずむ先客は、鞭のようになやかな長身に銀白色の髪。レーフラム・ネレ

イド大佐以外ではあり得なかった。

一瞬ためらったのち、展望室に歩み入ったメイリアは心の弾むのを意識する。

「何をしていらつしやるの、ネレイド大佐?」

さりげない声を出すのに多少の努力が必要だった。

びっくりしたらしい。腰を沈め、しなやかな身体をくるりと旋回させるや、ホルスターから抜き放ったレイ・ガンの銃口をぴたりとメイリアの額に向けかけ、そして唐突にその動作を停止させた。

「ああ、なんだ……あなたでしたか。驚かさないで下さい」

「別に驚かそつだなんて……心外です」

ちよつと拗ねて見せる。レーフラムは、抜き放ったレイ・ガンのやり場に困ったように視線をそらせる。

「星が見たくて……そつしたら大佐がおられたから、つい声をかけてしまいました。宜しくて?」

「ええ、どうぞ」

小柄なメイリアから見るとレーフラムは見上げる程の長身で、すらりとしているとはいえ、肩から腕にかけてはいかにも軍人らしく逞しかった。が、彼女の胸を衝かれたことには、ひどく顔色が悪い。色白なのはもともどだろうが、このときのレーフラムの顔色は青白い、血の気のないものだった。

「どうなさつたの、私の顔に何かついていませんか?」

レーフラムの方も自分の顔をじつと見つめているのに気づいて尋ねた。

レーフラムは少しうろたえ気味に彼女の問いを否定してみせた。絶世の美女とは言えないにしても、何かしら心なごむ雰囲気を持ったメイリアの容貌に、我知らず見惚れていた自分に気づいたのだ。

「いや、別に、何も……で、どうです、馴れましたか?」

「少しは。食事がとても美味しいのが気に入りました」

「え……?」

呆れてメイリアを見直す。メルティア王宮の仰々しさは、彼も良く知るところなのだ。そのメルティアのお姫様があっけらかんと、食事が旨いなどと言つ。

「旨いですが、あれが?」

「空腹に優る調味料はない、と言つてしょう?」

思わず笑つてしまふ。成程、会話がうまい。メイリアが綴る言葉は、まるで、レーフラムが上げかけた心理的な障壁をすりりとくぐり抜けてくるような、そして一度受け入れてしまつと、もう心を閉ざすことなど忘れてしまつような居心地の良さを帯びて、彼の心の裡を暖めるようだった。

メルティア王宮の仰々しさと王女ローリアの尊大さは、メルティアに駐留した第二艦隊の将兵の間では非難の種だったにもかかわらず、白亜宮でのカクテル・パーティなどにはほとんどの士官が欠かさず出席したといふ。“話の上手な、可愛らしいお姫様”との会話を楽しみたいために……

「大佐、お尋ねしても宜しい?」

「なんなりと」

答える口調もつい軽くなる。

「あなたの、お体のことなんです」

「……?」

レーフラムは表情をすつと強はらせる。

「どこかお悪いのではありません? もし、気づいておられたら、すぐ治療を受けて頂きたいんです」

「冗談は止して下さい。医者でもないあなたがどうして……」

「分かります。第二艦隊でメルティアにおられた時から、あなたの身体の状態は普通ではなかった、そうではありません？」

「宇宙飛行士症候群^{アストロナーツ・シンドローム}という厄介な症例がある。極めて長期間、惑星表面に降り立たなかった航宙士^{アストロナウト}に特有の全身症候群で、風邪と同じ根治不能ながら、最終的に突発的な死を招く病気として、航宙士^{アストロナウト}特に連邦空軍軍人に多発し、恐れられていた。

その初期に当たっているのではないかとメイリアは問うたのだ。

レーフラムの表情が一瞬強張り、そして緩んだ。隠しても無駄、彼女は知っている。

「今は駄目です、未だ戦わなければならない」

「だったら……」

メイリアは一步步より、碧い眸^めを一杯に見開いてレーフラムを見上げた。

「だったら、ノーラ中尉にこのことを知らせ、カーツ提督に伝えて貰います」

言い募るメイリアを、レーフラムは凝然と見つめる。一瞬憎悪に似たきらめきがその双眸に宿り、メイリアを口ごもらせた。が、その光は瞬間現れただけ、レーフラムの表情は直ぐにもとの物静かなそれに戻った。

「有難う、けどやはり駄目です。戦いを間近に控えた段階で、艦隊参謀が一線を離れる事は許されないので。少なくともメル・ラント艦隊の脅威がなくなるまでは……それまでは口外しないで欲しい、頼みます」

「いやですー」

メイリアは激しく首を振り、長い水晶色の髪が、低い人工重力の中

で緩やかに広がり、舞い躍る。

「五日や十日で終わる戦いなんですか？ それまでもしものことがあったら……もし、そんなことになったら……」

自分自身を許せないだろうと、メイリアは思っただ。知らないのなら……知らぬのなら……しかし、それでも、やはり……

「大袈裟だな」

ふつと微笑う。

いなされたような気がして、メイリアは一瞬、言葉を失った。

「命にかかわるような病気でもないでしょう。そこまで心配して頂くのはかえって恐縮ですよ。軍人ですからね、病気でなくとも戦いで戦死することだってあるんです。この戦争が一段落ついて見通しが立った時点で自分のことは自分で処理します」

頷けなかった。

大したことはない……レーフラムは言う。しかし、彼女には、彼が既にかかりの苦痛を耐えているらしいことがわかるのだ。

「どつしても？」

「今、私が前線を離れることでより多くの将兵が犠牲になります。できません」

そう……それが組織、連邦空軍の論理。レーフラムを失うことは、連邦空軍にとって勝れた士官を一人失うことを意味する。それだけのことなのだ。彼一人の犠牲によって数十万の将兵の戦死を回避できれば、充分に採算が合うというもの。

メイリアは頷いた。彼女の心の内までは、さしも敵の心理を読みぬくに長けたレーフラムにも窺い知ることはできなかったのではあるけれども。

第四節 マールク艦隊出撃

“メロス宙域に敵影なし”

先行する索敵艦部隊からの連絡が、『シグナ・フォース』号の戦闘艦橋に静かな衝撃を与えた。

『シグナ・フォース』号を旗艦とする連邦空軍艦隊四五〇〇隻がメロス宙域に達したのは、連邦暦一月二日。“メルティアの会戦”後わずかに三日目のことである。

エルヴェニック情報先任参謀からの報告に、“連邦空軍で最も剛毅な提督”とさえ言われたカーツ大将も軽いショックを受けた表情で黙り込んだ。

「どっ見る？」

「撤収した、と見るべきです」

レーフラムは迷わなかった。

「そいつはどうか？」

「反論したのはナカースル中佐である。」

「ここで退いてしまえば、せっかく第一艦隊を撃破した戦勝の意味がなくなるじゃないか。むしろ、転じて連邦圏深くに入り込もつてんじゃないのか？ 戦争に全勝しようと言っただけなら、連邦市民の戦意をぶち壊す必要がある」

「それはないよ、レイ」

メルティアを占領され、第一艦隊は壊滅させられた。が、冷静に考えて連邦がそれで完全に無防備になった訳ではない。メルティアを占

領したところで、連邦母星までは直線距離でも約一〇〇〇光年。しかも、直線航路をとるためには、ヒューロザイオンを初めとする宇宙要塞群の並ぶ“要塞回廊”^{フォーレス・コルネル}を横切らねばならない。まだ健在な連邦空軍艦隊は、“要塞回廊”を根拠地に、容易にローナク艦隊の補給路を遮断するだろう。

「第一艦隊の壊滅は、連邦空軍史上初めて被った一方的な敗北です。連邦市民は“連邦圏の鋼鉄の爪”ですら、掴み潰しかねる存在を初めて目の当たりにしたことになります」

レーフラムは更に指摘する。

「一般に戦争には二種類があるとされる。敵を全面的に屈伏させることを目指すものと、敵の領土の一部を奪い取るのを目的とするもの。」

「つまり、ローナクが……というより、この場合はル・ラント宇宙軍が……彼らはヴィルワの奪取だけを今度の戦争の目的と考えて、その環境を整えるために奇襲をかけてきた、と？」

「ヴィルワも欲しいのですが、本音は案外、戦争を続けたくない、というだけのことなのかも知れません」

「第一艦隊を鮮やかに殲滅して見せ、しかも、3DTVというメディアに司令官自らが現れて見せる。連邦空軍の敗北を強烈に印象づけるためには絶好のやり方というべきではないか。」

「まだ一部を撃破されただけなのですから、さっさと撤収してしまえば、後には“第一艦隊の全滅とメルティアの無条件降伏”だけが印象として残ります」

「無論、反撃を受けて直ぐに撤退する……並みの軍人なら、失った面目に賭けても肯じられない選択ではあるだろう。ローナクが面目にこだわるようなレベルの指揮官であれば、して恐れる必要はない……レーフラムは歯牙にもかけなかった。」

「後方を遮断し、立ち枯れさせればいいのです」

むしろ、ローナクが撤収に移っていた場合である。

「追撃するべきではありません。ナウシュヒル提督にはユアロフレスタ泊地を根拠地として、これ以上のル・ヨント宇宙軍の奇襲攻撃に備えていただきます」

レーフラムは説明する。メロス要塞を大至急再建して、有力な制式艦隊を駐留させるとともに、連邦空軍艦隊はユアロフレスタ泊地に進出、ル・ヨント宇宙軍との対峙の態勢をとる。“間隙”と呼ばれる空白宙域を渡って来ようとするル・ヨント艦隊を事前に捕捉できるようこの宙域を取り囲むように配置されている連邦空軍の宇宙要塞には索敵機能を集中させる。

「もつとも、ル・ヨントの最高指揮官が十分に優秀であれば、奇襲攻撃は二度と使ってこないでしょうけれど」

“間隙”を渡っての奇襲攻撃は一度限りの奇手。二度も連邦圏の深部に奇襲を許すわけにはいかない。

カーツは察したようだった。

「ユアロフレスタからヴィルワのラインで消耗戦に持ち込むのが狙いか？」

「できればならみ合いであってほしいのですが……二年すれば、第一時建艦補充計画の第一期艦がほとんど竣工します。第一期分の七万隻が就役すれば、ル・ヨントを戦わずして下すことも可能ではないでしょうか」

レーフラムの真意を、カーツはかなり正確に理解する。戦い、血が流れるのを何よりも嫌うのが、レーフラム・ネレイドという若者である。

連邦とル・ヨントの国力比は五対一と言われる。連邦が七万隻の戦

艦を建造している間に、ル・ヨントが戦場に投入し得る新造艦艇は一万五〇〇隻というところだろう。二年後になれば、連邦は一〇万隻を戦場に投入できるのに対して、ル・ヨントは三万から四万隻である。これは、宇宙での艦隊戦闘を少しでも知る者にとって絶望的な戦力差である。

「そこまではどうかな？」

軍人としてのカーツの履歴は、レーフラムのそれに一〇倍する。戦争が、レーフラムの思つような論理だけでは動かないことをカーツは経験的に知つてもいる。いづれ数で圧倒されるのなら、講和よりも攻勢を選択するのは、軍隊というものの習性でさえあるのだ。

自分たちの前途が“戦わずして勝つ”の王道ではなく、鮮血に彩られた“霸道”であることを、この時のカーツは論理によらずして悟っていたと言つていい。

ややあって、カーツは断を下した。

「よからう。本艦隊は、このままユアロフレスタへ向かう。無論、ローナク艦隊が隙を見せるのであれば、その後尾を拍撃するにためらいはしない。」

ネレイド大佐……改めて貴官に命じる。レムトウファン中將より命ぜられていた全般戦略計画を、向こう二カ月以内に完了させよ。完了しだい、タウンナー大統領に裁可を要請する」

カーツの意を察して、青白く澄んでいたレーフラムの頬に微かに赤みが差す。

「了解であります、閣下！」

『軍事面から見た“銀河系大戦”の奇妙さは……』

“銀河系大戦”終結後に、メルティア・スルフエイク侯爵は、その著書の中で指摘している。

『軍事面の当事者がいずれも無用の戦闘と流血を嫌悪し、これを回避することに大きな努力を割いた一方で、彼らの努力を無に帰するため努力が並行して行われていたことである。驚くべきことは、前者が戦略レベルで、巧者が政略レベルでの動きであった点である』

連邦暦一月五日、連邦首都星大統領官邸。

「ローナク艦隊はメロス宙域を撤収、連邦空軍艦隊はこれを追撃……ユアロフレスタ駐留艦隊は同泊地にとどまらしめ、ヴィルワ・シユネーゼル宙域を固守せしめる……これは拙いですが、大統領閣下」

「何が拙いんだ、カール？　メルティアはわずか半月占領されただけで奪回できた。ル・ヨントの艦隊も、一部とはいえ撃破できた」

「それが拙いのです、閣下」

副大統領カーリッツ・レークシーは指摘する。撃破したとは言え、それはわずか二〇〇隻ほどの小部隊ではないか。

「第一艦隊は六〇〇〇を喪いました。これは連邦史に拭いがたい大きな汚点を残したことになります。連邦が連邦であり得るゆえんものは、連邦空軍不敗のゆえです。一旦、連邦空軍が不敗であり得ぬことが証明されれば、メルティア、カルシユ、セリア……次々に反旗を翻すでしょう」

「全力を挙げてローナク艦隊を叩けたいわけかね」

「そうです。戦略レベルでは確かに無理をしてローナク艦隊を追撃する必要はありませんまい。私が、カーツ提督よりも戦略に詳しいなどと自惚れてはおりませんよ。しかし、戦略は政略に従属するものですし、政略はできるだけ短期間に、ル・ヨント宇宙軍に対して決定的な戦術

的勝利を要求しております」

「きみの意見に一理あることは認めるよ」

副大統領の饒舌に、タウナーはちよつと辟易したように顔をしかめた。

「既にセリア恒星区は、開戦劈頭での敗戦について大統領の失政を追求する構えを見せておりますし、メルティア政府は“五六五年条約”の緩和を要請するとの声明を出してきています。場合によっては、上院に大統領弾劾決議を出してくる可能性もあります」

「そうかね」

タウナーは苦笑つ。

「カール、わたしの任期はあと一年弱だ。後はきみに任せるつもりだが、一つだけ忠告させてもらってもよいかな」

“後は任せる”というフレーズが、レークシーの鼓動を一拍以上跳躍させた。最敬礼しかけ、レークシーは、大統領の温顔に浮かんでいるやや皮肉っぽい微笑に気づいて姿勢を正した。副大統領の胸の裡に潜んでいる権力への指向を、大統領は正確に洞察している。見抜かれていることに、しかし、レークシーは特に困惑を感じていなかった。

彼にとってタウナーは目指すべき、理想的な権力者の姿の具現である。

「何なりと？」

「あの男には注意し給え」

「あの男？」

「ナイザルだ」

「ナイザル……」

「切れ者だが、あれは危険な男だ。手駒として操りきれぬ自信がなければ、余り懐に入れぬことだ」

きみに扱いきれるほどナイザルの器は小さいものではないと思う

がね……言い差し、タウンナーは言葉を呑み込む。最も信頼する副大統領の感情を傷つけて、益するものは何も無い。

タウンナーには予感は無かった。

何年か後、この時に胸の裡に飲み下した言葉を痛みと共に思い出すことになるだろうとは。

「本人もだが、あの男のバックには軍産複合体の影がちらつきすぎている。たとえば、シュレフだ。軍産複合体が、連邦圏の

「もう一つの政府」と呼ばれていることも知っているはずだな？」

「ご忠告、胸に銘記しておきます」

「議会での論争なら受けて立つ。弾劾したいなら、勝手にやるがいい。が、カール、ラアム元帥との協議事項に加えることは約束しておく。確かに殴られつぱなしでは、いささか鼎の軽重を問われるというものだ。忠告には感謝するよ、カール」

「光栄です、大統領閣下」

「いったんは物柔らかくレークシーの進言を退けたものの、タウンナーが少なからず閉口することになったのは、連邦のマス・ジャーナリズムによる、半ばヒステリックな対ル・ヨント強硬路線の主張だった。

一月四日に、連邦圏最大の新聞社であるリードン・セイル社が「メルティアで大虐殺」を大見出しに掲げたのを皮切りに、五日にはライジング・サン社が初めて「ローナクの虐殺」なるフレーズを報道の中で使用して、「ル・ヨント宇宙軍の非道」を非難する社説を掲載する。3DTVの有力放送ステーションも次々に「ル・ヨント討つべし」の大合唱に加わった。

「あいつも変わらず悪辣なやり方をする男だな……」

大統領官邸からいくらも離れていない、上院議員会館、壁を大きく

切り取った窓から差し込む晩秋の陽光が、オフィスの主人の硬質な横顔を、奇妙な隈取りめいたオレンジと淡いグレイで染め分けている。

「最も優れたジャーナリストは最も優れた煽動者であり、時に集団発狂を引き起こす能力の持ち主だった。現在のマス・ジャーナリズムは、個々のジャーナリストの能力ではなく、マス・メディアという媒体を介して集団発狂を引き起こす」

「マスに近いバリトンが静寂を破る。ほめられたと受け取っておこう、などといういささが手垢のついた台詞を返すほど、その言葉の対象となった人物は、相手を自身と対等の存在とは認識してはいない。無論、相手にそれと気づかせるようなことはなかったのだが。」

「文化論か……似合わぬな、ナイザル」

「たわごとだ。聞き流せ、サイモン・ユーゼルフ。いずれにしても、連邦市民はル・ヨントと戦いたがっている。ジャーナリズムは単に火をつけ、油を注ぎ、煽り立てただけだ」

「にしてもあの女をよく3DTVなぞに出演させたな」

「わたしがローリアを出演させたわけではない。歴史的に見ても、商業ジャーナリズムは戦争が好きなのだ。組織を支配するのは経済であって哲学や倫理ではないからな。経済的に大きな効果を期待できる提案やアドバイスは常に歓迎される。生命がけて戦争に反対するのは個人であって、組織ではない」

「タウンナーが聞けば、彼がレークシーに与えた忠告の正しさを再確認しただろう、その言葉に満たされた冷嘲は、しかし、さして相手を感じ銘させたようではなかった。」

「それで、勝てるのか、連邦空軍は？」

「勝てるにしても圧勝はするまい。圧勝できるなら、トゥリユーがあれほどに消極的になるわけはなからうよ。よくて辛勝、へたをすれば

大敗北という事態もあり得る」

一息つき、ナイザルは微笑う。獲物を捕らえた後の、肉食獣の微笑
「予測はつかぬ。一つだけ確かなのは、戦争が続くということだけだ」
「望ましい事態だ……」

「コーヒト・カップを受け皿に戻し、彫刻的な表情の男はしなやかな身のこなしで立ち上がる。サイモン・ユーズルフ・ノウラン……連邦最大の複合企業体シュレフの幹部であり、ナイザルの妻ステイシー・フランセスの兄。」

「申し入れは了解した。わたしにとつても、これは一種の賭けであることは理解してもらえらるだろうが」

「ああ、理解している。しかし、これは賭けではない。わたしがこの地位にあり、お前がシュレフの最高経営幹部会の末席に連なったこの時期にル・ラントが仕掛けてくる……」

「仕掛けさせたのだから、悪漢」

「何を戯けたことを言っている、サイモン。わたしが望んだことが実現されぬのが悪なのだ。ゆえに、わたしは悪人などではない」

「何とでも言っがいい」

「コンソールの電子秘書が告げる副大統領の来訪が、サイモンの足を止めさせる。」

「ちよつと遅かったな」

「常に時間に正確な男は、他にすることがない男だ。一年半後のことは本決まりか、ナイザル」

「多分な……」

立ち上がり、ナイザルは自らレークシーを迎えに立つ。

「恐縮だな、カール。副大統領直々に運んでもらわずとも、呼ばれれば、こちらから出向いたものを……」

「いや、依頼するべきことはこちらにある。来て貰ってはかえってこちらが恐縮するよ、ナイザル」

「サイモン・ノウランは知っているな、カール。シュレフのビッグ・ブラザーの一人だ」

姿勢のいい長身を室内に運びながら、レークシーはナイザルと握手し、それからサイモン・ノウランとにこやかな会釈を交わす。仮面舞踏会にも似た会談を見つめる冷酷な漆黒の瞳は、意外にも興深い表情を浮かべている。

……皇帝にでもなるうって言っのか！

数年前、彼に面と向かつて罵声を叩きつけた人物に、ナイザルは冷笑を向ける。

……違っな。

個人の政治的権力と策謀程度で連邦に君臨する皇帝など出現しない。皇帝と言わぬまでも、連邦圏の最高権力者、あるいは最大の経済的支配者を望む者は無数。ナイザルはその中の最大の者であるかも知れないが、多数の中の相対的強者というに過ぎない。

権力と財力への憧憬ゆえに溢れかえる策謀と陰謀、そのせめぎあいの中で、いつしか歴史の必然が生まれる。歴史の必然は、動かしがたい流れとなつて、ある個人をその表層へ浮かび上げさせ、その名を刻印する。それがたまたまレイフレム・ナイザル・ネレイドであるかも知れぬし、ナイザルの名がシエルメス帝国の初代皇帝として歴史に刻まれるのであれば、それは歴史というものの持つ意志であつて、ナイザルの策謀のゆえではない。

目に見えぬ者に、ナイザルは冷笑を送る。

……策謀によつてのみ歴史が積み重ねられるわけではないが、策を巡らさぬ者に歴史が媚びを売ることもあり得ぬことだ。

「……つたく」

「ローナクの虐殺”で死傷したメルティア市民は、実際には一〇〇〇万に達していなかった。タウンナーや、あるいは連邦空軍首脳の一部を烈しく舌打ちさせたことに、この数字が億から十億の単位にすり替えられて報道されるまで何日も要さなかったのである。

更に火をあおったのが六日の、ローリア・リアー・メルティア王女による放送だとされる。

「我が祖国メルティアは、暴虐な侵略者、非道の軍事帝国ル・ラントからいわれのない全面攻撃を受け、立ち直りがたい痛手を被りました……」

にもかかわらず、連邦行政府と連邦空軍艦隊司令部は微温的な対処で、侵略者艦隊の大部分を取り逃がしたばかりか、彼らが膨大な略奪物資を抱えてル・ラント圏へ逃げ込むの手をこまねいて傍観しようとしてさえている……

連邦政府と連邦空軍の大部分からは、「あの女にしては上出来以上のでき」だと罵られるに至ったのだが、絶世の美貌を謳われるだけにローリア・リアーの訴えは、マス・ジャーナリズムによる報道に、効果的に油を注いだ。

「あれが油なもんかよ、ガソリンじゃねえか！」

『シゲナ・フォース』号艦上で罵倒の声を上げたのはナカースル中佐であり、メイリアは「お義姉さま、どうして……」と絶句したものである。

「連邦空軍が、祖国メルティアと、恨みを飲んで虐殺されていったメルティア市民の復讐を果たしてくれると信じたからこそ、わたくしは最愛の妹たる、そしてメルティア市民にとってもかけがえのないメイ

リア……プリンセス・オブ・メルティアを、連邦空軍に一士卒として託したのです。連邦政府と連邦空軍の、ル・ラントに対する態度を、わたくしはかけらも理解することはできません。なぜ、侵略者が、凶暴な軍事国家が罰せられもせずのうのうと生き延び、武器さえほとんど持たず、銀河の平和のみを願っていた我がメルティアがこのような悲惨な目に遭わねばならないのでしょうか……」

「政府が無能だったからじゃねえか」
と、これもナカースル中佐の合いの手である。もつとも、フレーズ自体は古い小説の台詞の剽窃だったが……

「よく言つよ、銀河の平和のみを願っていた我がメルティアだとさ」
ナカースルの罵声はともかく、マス・ジャーナリズム……タウンナー

は苦々しく「マス・ヒステリアリズム」と吐き捨てたが……に主導された世論と、これに呼応した連邦議会の圧力を無視することはできなかった。

「無謀は分かっている。しかし、一戦も交えずにただ後退するのは、連邦空軍が鼎の軽重を問われよう」

リー・タウンナーは、レーフラムの主張の正しさを認めつつも、ローナク艦隊追撃の訓令にサインせざるを得なかったのである。苦渋の表情を押し殺すラーム元帥に、大統領もまた苦悩を隠し得なかった。

「シュレフ・コングロマリット……でありますか……？」

シュレフ・コングロマリット。数万もの企業体から構成される、連邦圏最大の企業複合体。「連邦圏の穀倉」と呼ばれる豊かな恒星区コールを、事実上の私的な植民地とし、そこから吸い上げる膨大な富は、連邦圏の過半に達すると言われる。歴代の大統領の中にも、密かに「シュレフ・コングロマリットの代理人」と指弾された人物が少なくない。

「シュレフはシュネーゼルに多額の資本を投下してあるからな。むざとデュレーン辺境をル・ラントの手に委ねるのは承伏できかねる……そう脅してきおった。一戦して、決定的に連邦空軍艦隊が敗れたならともかく……とな。“ビッグ・ブラザーズ”の決定だそうだ」

シュレフ・コングロマリットの経営を最終的に決定する最高経営責任者会議の通称を、タウナーは、苦いものを吐き出す口調で口にする。ララム元帥……連邦空軍唯一の元帥……は、ため息をついた。

「ル・ラント共和国よりも、シュレフ・コングロマリットの方が、遙かに連邦にとって危険極まりない組織に、小官には思えますな」

ララムは優秀な軍人であり、軍政家であったが、無論、予言者としての才能には恵まれていない。にも拘らず、この時の言葉は奇妙に神託めいた響きを帯びてタウナーの耳朶を刺激したようだった。

「かも、知れん。いかに有能で有効な組織とはいえ、シュレフは所詮営利を旨とする私的な組織だ。連邦圏内部での紛争ならともかく、恒星系間戦争だから……切所に至って、シュレフが、彼らの営利のために連邦そのものを売り渡す行為に走ったとしても、驚くにはあたらぬのかも知れん……」

元帥、だからこそ、不利は承知で連邦空軍艦隊には出戦してもらわねばならん。“連邦圏の鋼鉄の爪”が握りしめるべきものは、自治恒星区だけではないのだ」

「出戦……でありますか……」

「出戦だ。それも連邦圏深部ではなく、可能な限りシュネーゼルに近い恒星系でな」

「大統領閣下。ル・ラント艦隊の可動兵力は三万近くに達すると予測されております」

「知っている」

「対するに、連邦空軍が辺境宙域に集中し得る最大兵力は一万五〇〇〇余りに過ぎません。カーツ、ナウシユヒル、シユタルク……いずれも名将ではありますが、一対二の劣勢下、デュレーンの辺境でル・ラント軍と正面衝突しては勝算は余りに低いものでしかありません」

「無理を言っていることはよく分かつています。勝てるように環境を整えてやれぬことを今更、詫びても仕方がないこともな」

議会も、ジャーナリズムも“ル・ラントへの復讐”を叫び、熱に浮かされかねない状況である。タウナーは、連邦圏を二分する二大政党の一、連邦共和党の出身だが、その連邦共和党自体、資金の基盤をシュレフ・コングロマリットにおいているという弱みがある。

「……この一〇年間、シュレフの呪縛を少しでも緩めようとしてきたのだがな……」

“連邦史上、最も剛毅な大統領”と呼ばれたリー・タウナーが、しかし、精神的な容貌に無形の戦いへの疲労を滲ませているのを、ララムは見て取っている。連邦暦五〇〇年代に入って、連邦共和党が大統領職を独占してきたのはシュレフ・コングロマリットの支持によるものである。

一〇年前、カートウルウ恒星区辺境の開発で財をなしたタウナーは、“最近七〇年間で初めて”シュレフの財政的援助を受けずに大統領選に立候補し、そして、シュレフ・コングロマリットの猛烈な妨害を排除して大統領に選出された。以後一〇年、タウナーの指導下に、シュレフ・コングロマリットの恣意的な経済活動はしだいに掣肘を受けつつある。

「大統領……軍部の長たる小官がこのようなことを申し上げるのは問題であることは十分、承知しておりますが……」

「きみの言いたいことは分かっている……つもりだ……。来年の選挙

「のことだろう」

「は……」

連邦憲法は規定する。連邦大統領の任期は五年。同一人物が二期〇年を越えて、その職に留まることはできない。

「ル・ラントからの宣戦は……」

「非常時故、非常の策をとれ、と言いたいのだろう……しかし、それはできませんよ」

「しかし……」

「敢えてすれば、議会はわたしを訴追するだろう。憲法違反者としてな。わたしのスタッフに十分の研究をさせたが、目はないな」

「……」

「ネレイド大佐に非公式に伝え給え。全滅は避けよ……と」

「全滅さえしなければ、今後の戦いは勝てる……」

「大勢が死ぬだろうことは分かっている。しかし、艦隊の中核さえ残れば、わが国には十分の国力がある。緒戦、敗れるのは致し方がないが、むやみに兵員を損なう戦いだけはするな……と」

一月八日、タウンナーは『シグナ・フォース』号のカーツ大将に向けて訓令を発する。

「連邦空軍艦隊は、ル・ラント艦隊のル・ラント共和国圏撤収を妨害すべく、可能な限りの手段を講じるべし」

カーツから訓令を提示されたレーフラムは、蒼白な表情のまま、しばらく天を仰いで微動だにしなかった。

「これは、敢えて流血を量産しろという命令に聞こえますが……」

「第一艦隊の大敗北が余りに大きすぎた」

それがカーツの返答だった。

「恒星区政府の中には“連邦空軍不敗の神話”にはつきりと疑義を抱き始めるものが急速に増えてきている。放置すれば、連邦圏が崩壊する」

「敢えて挑めば、我が艦隊の損害は……」

「連邦圏の崩壊は“惑星統一戦争”の再現だ。犠牲になるのは無数の市民だ。たとえ二万の艦艇と二〇〇万の兵を失ったとしても、連邦圏崩壊に伴って数億の人口が失われることに比較すれば、敢えてこの命令を肯う意味はある」

レーフラムは端麗な眉を歪ませる。連邦圏の崩壊を防ぎ、内戦を回避するのは連邦政府の責務ではないか。なぜ、将兵の流血で政治の問題を贖^{あがな}わねばならないのか。

「これは命令だ、レーフラム・ネレイド大佐。連邦圏の外縁部で、ナウシユヒルの艦隊と連携してローナク艦隊を撃破するべく作戦立案すべし」

「閣下……」

「反問は許さん。これは命令だと言ったはずだ」

そんな命令を受けるくらいなら抗命罪で処罰された方がましだ……レーフラムの表情を読み取ったのか、カーツは、不意にその巖を思わせる表情を緩める。

「ローナク艦隊への追撃は、可能な限り連邦空軍の損害を少なくするよう行つのは当然であるし、全般戦略の検討は継続するように。以上だ」

「……了解しました」

一五万隻におよぶことになる連邦空軍艦隊の艦隊旗艦として建造された『シグナ・フォース』級戦艦は、旗艦としての贅沢な設備を持つ。艦隊司令官室、艦隊幕僚の会議室、控え室などが付属している。

長官執務室から控え室へ退出したレーフラムは、意外な人物を見いだして眉を跳ね上げた。

「あ、ネレイド大佐……」

「ああ、貴女ですか、メイリア姫^{プリンセス・メイリア}」

「姫^{プリンセス}」は止めて下さい、大佐。「メイ」でいいです。ナーバン中佐やノーラ中尉にもそう呼んでもらっていますから」

ちよつと心外そうな響きだが、濃^{ロヤル・ブルー}紺の眸はうれしそうに微笑っていた。つられたように、沈みきっていたレーフラムの頬も僅かに緩んだ。

「長官に用ですか、メイ？」

「え？ ええ、少し。ノーラ中尉にお願ひしてお時間を頂きました」

「どのような……」

「秘密です」

およそ戦艦に似つかわしくない、ちよつとおどけた口調。言葉を失い、レーフラムは苦笑するしかない。

執務室に入ったとき、カーツは艦内通話でカトゥー技術少将と話しているところらしかった。

「閣下……」

声をかけるメイリアに、待て、と手を上げてみせ、カーツはカトゥーとの用談を続ける。

「ル・ラントの母星は……」

「第一次建艦補充計画は……」

切れ切れな会話の断片が、聞くともなく佇むメイリアの耳にも入ってくる。

「用件は？」

「カーツは短く聞つ。」

「お願いが有ります、二つ」

ふつと、カーツの表情が厳しくなる。ナーバン中佐なり、ノーラ中尉なりが命じて寄越したのでないなら、士官候補生待遇のメイリアが、こつして司令官室に現れるのは重大な越権行為である。本来なら叱責して下がらせるところだが、カーツは敢えてそうしない。

メイリアの様子にただならぬ色を見てとつたからであり、また、彼女が軍人ではないこともある。言いたいことは言わせておき、軍規については後で注意すればよい。注意して聞き入れないほど、メイリアは感性の鈍い女性ではない。

「言つて見給え」

「農園ブロックで花を育ててみたいのです。ノーラ中尉のお話では余裕が少しあるということでしたから」

花と戦艦か、とカーツは苦笑を禁じ得ない。やはり、お姫様だと思わぬでもないが、彼は直ぐに微笑を消した。

「よかるう、詳しくはナーバン少佐と相談して決めるといい。何の花にするつもりかね。多分、花の種までは積んで来ていると思うが」

「メルティアン・ローズ
メルティアン種を持って来ています。宜しければ」

メイリアは首にさげていた小さな銀のロケットの蓋を開いて見せる。深紅の小さな花をつけ、メルティアンで広く自生する。メイリアはこの花が大好きだった。

「用意がいいな、私に異存はない。ノーラ中尉の判断に任せよう。話して、許可を得給え」

カーツの目がまた少し鋭くなる。

「もつ一つは何だ、言つて見給え」

「母星へ戻して下さい。もう、ル・ラント軍は追い払ったのでしよう、それなら」

「メイリア」

「ヒシャリとメイリアの言葉を遮る。」

「本艦は戦艦だ。そのことは忘れてはいまい。君はメルティアにあっては王女だが、本艦にあっては一士官候補生に過ぎない。先程のような有益な提案なら知らず、その一士官候補生が戦艦、ひいては艦隊の行動を左右しようというのは重大な逸脱行為となる。本来なら、この件だけでも軍法会議を構成し得ることをよく覚えておき給え」

「でも……」

「抗弁しようとするメイリアを叱責しかけて、カーツはふと思いつま

る。「でも、何だね？」

「でも……」

「苦しげにメイリアは目を閉ざす。」

彼女の脳裏に数日前のできことが鮮やかに蘇っていた。そう、「メルティアの会戦」の翌々日、展望室での……

「ネレイド大佐です、あの人はひどく身体をこわしています。早く治療しないと手遅れになるかもしれない。ですから、お願いです、母星へ帰還して、あの人に治療を受けさせて下さい……せめて、ネレイド大佐だけでも母星へ……」

「まさか……」

「本当です。私を罰して下さい下さっても結構です。ですから、母星へ戻って治療を受けるようにと提督から命令を！」

嘘ではないな、とカーツは結論した。このような嘘を言ったところで、メイリアには何の利益もない。リアー氏一党の策謀という可能性もないではないが、ル・ヤントの勝利は彼らにも何の利益ももたらさぬことは、「ローナクの虐殺」で思い知っただろう。もっとも、彼ら

が政治的には白痴同然であることも確かであるから、即断は禁物だが……

「何時から気が付いていた？」

「二年前、『シグナ・レート』号がメルティアに来た時からです」

『シグナ・レート』号や、その前に乗り組んでいた『ジェイファロー』の軍医すら気がつかなかったレーフラムの体調の異常を、メイリアはどうして知ったのか……？

数秒間の沈黙の後、カーツはメイリアの思い詰めたような目の中に回答を見出した。それは、彼女が戦艦搭乗を希望した真の理由でもあるのだらう。

「分かった、ネレイド大佐は本艦の医療ブロックで治療を受けさせる」

「提督……！」

「未だ本艦の任務は終わっていない。従って母星への帰還はできない。君は部署へ戻り給え。以後は直接私に意見具申することは慎むように。本艦は戦艦だ。君一人を例外扱いにすることはできないのだ」

メイリアは唇を噛み締めて、カーツを睨んだ。碧い眸が微かに涙を浮かべている。

「が、カーツは敢えて平板な調子で続けた。」

「ご苦労だった、下がって宜しい」

一月二〇日、レーフラム・ネレイドは少将への昇進を内示された。ル・ヤント艦隊のダーク支隊撃破とローナク艦隊の駆逐、およびメルティアの解放に対して最大の功ありと判断されたためであり、連邦空軍は、最年少の少将の地位をもって報いるとともに、再編成途上の連

邦空軍艦隊の総参謀長を命ずるに至っていた。

しかし、二三歳……最年少の提督の地位を名誉と見なすようなメンタリテイと、レーフラムは完全に無縁だった。英雄と呼ばれ讃えられる影に、彼の作戦の元に戦い斃れた夥しい屍が映っていたのだ。

「人殺しの報酬……か」

吐き捨てる口調は苦々しさのみを増すように、周囲には思われたのである。

呼び出された時、レーフラムは一人、連邦空軍コンピュータ複合体を使つてのシミュレーションの最中だった。それまでに明らかになつてゐるル・ラント宇宙軍艦隊を“ユースレスク”にシミュレートさせ、彼自らは連邦空軍艦隊を指揮しての艦隊決戦を検討していたのだ。

第一次建艦補充計画の進行状況から見、連邦空軍の兵力がル・ラントのそれに並ぶのは、早くとも二年後になりそうだった。

「それまで持ち堪えられれば、この戦争は勝ちだが……」

ひとりこぼす。

「彼らが一隻、一兵も兵力を増強しなければ……だが」

さすがに苦笑する。あり得ない仮定だ。全面戦争の様相を呈するこの戦争を遂行するのに、一隻一兵の兵力増強も図らないなど「気違い沙汰だ。それどころか、マールクがローナク以上に優秀な戦略家ならば、味方の優勢な間に可能な限り連邦空軍の戦力消耗を強いるような作戦を講じるだろう……そう、レーフラムがマールクであれば、必ずそうする。

そのシミュレーションも彼はやってのけていた。ル・ラントの補充力を対連邦比〇・一から四・〇まで数十段階に分けて双方の戦力推移を予測し、その各段階における戦闘をシミュレートする。

数千にも及びバタンをシミュレートした結果は明るいものではない

かった。最悪、ル・ラントの完勝、連邦の壊滅で戦争が終わる。

「……が、必ずそうなるわけでもない」

またひとりこぼす。変数が多過ぎるのだ。シミュレーションは無数の可能性を予測し、それぞれのケースの確率差は誤差の範囲でしかない。結局、レーフラムとしては戦術レベルで、情報収集のための何らかのアクションをとる必要を感じていた。持久戦となれば、決着がつくまでに最低三年、悪くすれば五年を覚悟しなければならない。死者総数推定三〇〇万人から三億人……“ユースレスク”の弾き出した冷酷極まる数字は、レーフラムに悪寒を覚えさせた。

「ネレイド提督、カーツ閣下が執務室までおよびです」

艦の中核コンピュータの合成音が、彼の思考を途切れさせた。

「何だ？」

「来れば分かる、このことです」

舌打ちしてユースレスクとの接続を切り、司令官室に向かう。

「命令だ、医療ブロックにおいて検査、及び治療を受けよ」

入ってきたレーフラムに、カーツは前置きもなくいきなり浴びせかけた。

「は……？」

「聞こえなかったのか？」

啞然とするレーフラムに、スティール・グリーンの目が据えられる。

「い、いえ……しかし……」

「なら行け。直ぐにだ」

「は、し、しかし……」

「反問は許さん、命令だ。以上」

カーツが合図する。その時になって、レーフラムはエミル・ノイラ

中尉の存在に気がついた。

「行きましょつ、提督」

「し、しかし……」

「司令官命令です」

有無を言わさない。ノーラは彼の腕を振り、長官執務室を出る。

「どつしてこんな命令が？ 私はどこも……」

「嘘はおつしやらないで……私の責任になります。メイが閣下に直接あなたのことを話しました。お分かりでしょう？」

「メイリアが……？」

レーフラムは呆気にとられたまま口をつぐんだ。

同じ頃にメイリアは水耕農園ブロックにいた。ノーラ中尉の許可で、花を育てる場所として与えられたのがここだった。もともとは二〇〇〇を遥かに超える搭乗員用の生鮮食料品の生産施設だったのが、より効率のいい酵母培養による施設に設計変更になったため、一ブロックが搭載されたのみで後は換装された。このブロックも換装される予定だったのが、今次大戦の勃発でその余裕がなく、そのままになっていたのだ。

その二画に、彼女はメルティアン・ローズの種を播いていた。深紅のピロイドのような花をつける、メイリアの最も好きな花。シエルメスの創生神話“古き世に、星々は真紅の華以て消し去られたり、華は神々の怒りの焰と変じ、空を血の色に染めたり”……天から地に墜ちた焰が凝った、空を彩る血の色の華。

やがて総てのシエルメス軍艦が専用の水耕農園ブロックを搭載してメルティアン・ローズでメルティアン薔薇を栽培し、そのブロックを“メイリアの花壇”と呼びならわすことになる。無論、この時のメイリアには思いもよること

ではないが。

“メイ……”

中枢コンピュータも彼女を愛称で呼ぶのはナーバン中佐の指示だろつ。

「はい？」

“医療第三区中央医務室へ”

「はい、わかりました」

了解と言えはいい、が、メイリアは馴れていない。

エミル・ノーラは電子診療装置からの報告を受けていた。表情がやや暗く、青緑色の瞳もいつもと違って厳しい。

「中尉？」

「よくないわ……」

平板に言つ。メイリアは、と胸を衝かれる思いで立ち竦む。

「よ、よくない？」

「そつ、よくない。本来ならば即時入院、加療半年、絶対安静。過度の宇宙生活からくる全身衰弱……宇宙飛行士症候群の恐れがある。一体、『ローネット』や『シグナ・レート』の軍医長は何をしていたの？ 軍法会議ものの怠慢だわ……ネレイド提督もネレイド提督よ、こんな状態で自覚症状が出てないはずなのに……」

そんなに頼りないのかな、わたしつて……」

後の方は独り言に近く、メイリアの耳には届かない。エミルは、レーフラムが自分を信頼し切れずに症状を隠していたのではないかと、心の片隅に小さな痛みを覚える。軍医長の自分には隠しても、メイリアには打ち明けているなんて……

「そんなに？」

メイリアは蒼くなった。

「ええ、私は司令官に報告します。あなたはE B A ルームに。参謀長に待っていてくれるように、そう言ってます」

「はい」

「“了解”よ、メイ、忘れたの！」

メイリアはちよつと驚いた。彼女にはエミルの苛立ちの理由が分からない。

E B A ルームへはトランスファ・チューブ一つ。待つほどもなく

レーフラムの長身はE B A ルームから姿を現した。

「ノーラ中尉が待っていて下さるように、とのことですよ」

「了解」

スツールに腰を降ろす。やや疲れたような動作だった。メイリアはうつらうつらしてしまう。

「いけないのですか？」

「なに、大丈夫ですよ。そう簡単に参ったりはしません。それより、

ノーラ中尉、ご機嫌斜めだったんではありませんか？」

「え？」

「搭乗員の健康管理は彼女の職掌です。それを私は無視した。彼女を介さずに、あなたを使って……こういう言い方はあなたに失礼だが……あなたを使って頭越しに報告した。彼女が気分を害さなかったとしたら、むしろ変でしょう」

「済みません、勝手なことをして、怒っていらつしやるでしょう？」

「どつして怒る必要があります？感謝しなければならぬのに……」

「でも他人に話さない、というお約束でしたのに」

「その約束を、私が守りそうにもない、とそう思ったからこそ、敢えて閣下に話したのでしょうか？ 事実、その通りです。あなたが負担に思うことはない。ただ、中尉には私から詳しい話しをおきましょ

う。事情さえ分かれば、彼女も感情を害することもないはずですから」

「提督……」

「……？」

「この戦争はどのくらい続くのでしょうか？」

メイリアの心境は複雑なものがある。

戦争が早く終わってほしいのも本音であり、また長く戦争が続けば、あのメルティア王宮に戻らずに済む、というのも偽らぬところ。驕慢さを絵に描いたようなローリア・リアーや、陰謀を趣味とするかのよつなメルティア貴族達の中で息も詰まるような生活を送るより、たとえ自らの生命を危険に曝し続けているにせよ、この戦艦の搭乗員達の方によほど好感が持てる。まして、レーフラムとこうして同じ戦場に立っているのだから。何よりもメイリアは、一九歳になるまで政略結婚の具に供されなかつた奇跡に感謝したかつた。

「それがわからない」

レーフラムはメイリアの心理の方程式より、戦術上の証明問題に興味を惹かれたようだった。

「連邦の国力は、この戦争を十年間続けるに足るものですが、ル・ヨントにはそれだけの国力はないでしょう。逆に、現有する戦闘力はル・ヨントが圧倒的で、これは一、二年では逆転できそうにない。」

とすれば、当然ル・ヨントは短気決戦を焦り、連邦は長期戦に引きずりこもうとする。戦争が五年を越えるようなら連邦が、それ以下で終わるようならル・ヨントが戦争の勝利者となる……ただ、予想できないのが、五年以上の戦争になるか否か……です。ル・ヨントの政府首脳がメルティア並みに愚劣なら……戦争は直ぐには終わらないでしょう」

メイリアがスルフエイク侯爵の妹と知つたせいとか、それとも持ち前

の性格なのか、メルティアを批判するレーフラムの口調には遠慮なしの辛辣さが満ちている。

彼の言う通りだ……と、メイリアもメルティア政府の現状については、多少の苦さを込めて同意せざるを得ない。

「しかし、何で戦争なんかするのだから……」

ふっと、レーフラムの口調が変わる。メイリアは問う瞳を向けた。

「彼らはシエルメス人とほとんど、いや全く変わらない……外見上だけでなく、死んだ捕虜を調べた結果……では彼らは完全にシエルメス人と同一の生命体である、といつてもさしつかえない……」

レーフラムは捕虜の生体解剖という凄惨な事実をメイリアには知らせたくなかった。連邦空軍は彼らが完全な異種生命体である、との先見に基づいて十数体の生体解剖を強行した。結果は、彼らがシエルメス人と変わらない生命体であるという事実。恐慌に陥った連邦空軍は、慌てて情報の総てを封鎖した。レーフラムには、対ル・ラント戦の参謀長であるという理由から、極秘という条件のもとに特に知らされたのである。

聞いた時、聞かなかった方が良かった、と思った。国家の名の許に人類は蛮行を繰り返す……たとえ、ル・ラント人が異種人類だったとしても、そのような行為が正当化され得るものなのか……？

「不思議だとは思いませんか？」

「え……？」

「少なくとも二〇〇〇光年以上離れたポイントに同一の人類による社会が存在するという事実です……」

「……」という仮説があるのを知っていますか……メルティアは人類の発祥した惑星ではなく、単なる植民星ではなかったのか、という。考古学……そう、宇宙考古学では定説と……よかった。人類はどこかほ

かの惑星で生まれてメルティアに植民し、そしてシエルメスを我が版図としたのではないかと。では、その惑星、言ってみれば真の母星はどこだったのか。それが、数年前までの宇宙考古学での最大のテーマでした。」

メイリアは少なからず驚いてレーフラムを凝視していた。どちらかといえば寡黙な彼がこれほど喋るところをメイリアは知らない。

「神話もそう……この説を裏付ける。連邦の創生伝説……これがメルティア全域で語られているのは余りに不自然だし、それにあの内容はどう考えても戦争を示していると思われない……多分、本当の母星を滅ぼしてしまった戦いを……」

それと……『シルウィスとは誰？』、知っているでしょう？」

ちよつと悪戯っぽい微笑を浮かべて、レーフラムは続けた。

「ええ」

シルウィス・トヒユナ。スルフエイク侯爵家の始祖と伝えられ、連邦がようやくメルティアの地上に歴史の最初の刻印を打ち込んだ頃に活躍した軍人政治家と伝えられる。その出自は、過去数千人の歴史家、考古学者の探求の手をすり抜けて、歴史の闇の中に溶け込んでいく。

シルウィス・トヒユナの出自を求めることを、学会ではシルウィスとは誰？』と呼ぶ。

「では本当の母星はどこなのか……自分なりに考えるところがあった……できれば、自分自身の考えを一生賭けてもよい、検証してみせるつもりだった……人間の生れ故郷はどこか、なんとなく分かるような気がしていたから……」

夢を追う表情。

「では、どうして軍人なんかに？」

言いかけて、メイリアはしまった、と後悔した。レーフラムは、我に返ったように元の冷徹な艦隊参謀の表情に戻っていたのだ。

「この戦争の話でしたね……いつまで続くのか、という。そう……ル・フロント政府がメルティア並みに愚劣ならば、連邦が多分勝てるでしょう」

話題を切り換えてしまった。メイリアにとっては別に聞きたいとは思わぬ話題に。レーフラムは彼女の表情を敢えて無視して、続けた。「ただ、今のところ、分かっているのはル・フロントの艦隊司令長官の名前だけです」

クローネス・マールク……それが、この時期に連邦空軍の知り得た唯一のル・フロント共和国宇宙軍の要人の名だった。

共和国暦七二〇年二月一六日。

エルヴェ宇宙要塞の司令長官執務室で、帽子を顔の上に載せて居眠りを決め込んでいたマールクのコンソールが電子音を響かせる。

明るくなった3Dスクリーンにネイス・ミュッケルの端正な姿が浮かび上がる。マールクの姿を目にして、「相変わらずだな」とでいいたげに翠色の瞳が微かに笑みを浮かべる。

「わたしだ」

「ミュッケルです、閣下」

「ヒースかい？」

“連邦の3DTVの報道をキャッチしました。ダーク提督が連邦空軍の奇襲攻撃で完敗……憎むべき侵略者は雪崩をうって辺境へ潰走した、とのことですよ”

「そうかい」

帽子を被りなおし、マールクは首筋を揉みほぐしながら大きくあくびをする。

「よかった……」

“ご心配でしたか？”

「プライドの高いヒースのことだからね」

“だから、マーク少将に付いて行って頂いたではありませんか”

少将であるマークに対して、中將であり、艦隊副司令長官のミュッケルが敬称しなければならぬ必要はないのだが、この青年は肩書きで物を言う習慣を持っていない。

「ああ、まあ、そういうことだけだね」

“ホット・ラインが繋がっています。閣下の執務室に繋ぐよう手配をしておきました。ベイ、ファートウリック、セルティ、レイティ、ヤン、メルにもホット・ラインを繋ぐようにと”

相変らずやることにそつがない、とマールクは頷く。

宇宙艦隊総司令部はナキャソにあるが、この時期マールクは既にエルヴェ要塞に総司令部を移している。総兵力四万八〇〇〇隻、人員約一五〇〇万、七個制式艦隊と一個防空艦隊をミュッケル、ローナク、ドレスン、ラング、マックス、シャブリ、ヤンデキフィティの“七提督”とフェレスレット・ランク少将が指揮する。この時点では連邦空軍の艦隊兵力の約二倍を擁するものの、この兵力を除けば共和国には大した戦闘力はなく、また兵力補充に充てるべき国力も底を突きかけているのだ。

「無謀には違いない。しかし、このまま時を費やしていても有利になるのは連邦だけなんだ」

マールクが麾下の提督達を集め、改めて連邦圏への侵攻作戦を示したのは、共和国暦七二〇年一月三日、ローナクによるメロス宇宙要

塞奇襲攻撃の翌日である。

「彼我の兵力差が今とは逆になったとき、ル・ラント回廊、ドライバオム宙域という難所を盾にとつても連邦空軍の侵入を食い止められるという保証はない」

「しかし、閣下、彼らの戦力を一時的に破壊したところで補給力の差が決定的です。確かに勝てると思います。ですが戦術的な勝利に過ぎないではありませんか。出戦することで我々も損害を被ります。兵站線も一〇〇〇光年も維持できるかどうか……」

第四艦隊を指揮するファートウリック・ラング少将が疑問を呈した。ブラウンの髪、綺麗に整えた同じ色の口ひげの紳士。二七歳、マルルクの学生時代の後輩で、ドレド戦役では主に空母機動部隊を指揮した。猛将でこそないが、敵の弱点を冷徹に見抜き、的確な兵力集中でこれを撃破するのを得意とする戦略家タイプの提督である。

「しかし、ファートウリック、君は三倍の敵をドライバオムのこちら側で迎え撃ち、撃退する自信がありますか？」

「強がっても意味のないことです。ありませんね。ドライバオムのこちら側では逃げる所もない」

ミュッケルの問いに、ラングはあつさりと答えた。叶わないものは叶わない。参謀本部のように「不可能を可能にするのが……」などと、自分にはできない事を他人に強いるような精神上の腐食から、彼らは無縁だった。

「しかし、閣下はあの禿豚が出撃を命じてきたのを断られたはず。それを、今度は自ら出戦しようと言われるのはどうも……」

「禿豚はひどいな」

マルルクは苦笑する。ワシエック大将のあだ名であり、もとより好意に発したあだ名ではない。マルルク麾下の提督達は、ドレド戦役当

時に参謀本部が一人安全な地下シェルターに逃げ込み、宇宙で我に数倍するドレド主力艦隊を相手のロメイチェフ艦隊の悪戦苦闘に高見の見物を決めこんだ上に何の補給も与えなかったのだ。勝ったのをいいことにして、当時の参謀将官は戦争の責任を負うどころか、殆どが階級を進め、受勲さえしている。禿豚ことワシエック大将も当時は少将、対ドレド作戦部長を勤め、本国艦隊司令長官ローク中將の更迭に暗躍したと言われている。噂だが、マルルク艦隊の中でそれが事実でないと思う者は一人としていない。

だから母星を一步出れば、ワシエックを大将閣下などと本気で呼ぶ者はなく、下級兵士に至るまでが、この悪意に発したあだ名「禿豚」で済ましている。

「確かに、我々の敬愛するワシエック大将閣下の言いなりになっていではこの戦争、半年で片がつくだろう……連邦の勝利で」

辛辣な調子でマルルクもラングに贅意を示す。共和国参謀本部の高級将官は、戦いに補給が必要などとは夢にも思っておらず、しかも敵より多数の兵力で戦つのを「卑怯だ」といつてははからぬのだ。そして共和国政府は、戦争はマルルク達が勝手に戦い、しかも必ず勝つものと単純に信じこんでいる。彼我の情勢を冷静に睨んで、的確な外交を講じてくれるような有能な政府ではない。

マルルクはドレド戦役の勝因を誰よりもよく知っていた。

ドレドに優れた政治家がいなかった……もし、ドレドに優れた、或いは狡猾を極めた政治家がいれば、共和国の首脳を利益誘導で釣り、圧倒的な戦略的優勢をそのまま戦争の勝利へと結び付けただろう。財産と地位を保証されれば、今の共和国の首脳の殆どは喜んで共和国を売り渡すだろう……マルルクは、自分の觀察がそれほどの外れではないことを知っている。ところが、ドレド自治政権の首脳はそれができず、

「マルクの天才によって戦略的優勢が破壊されるとともに破滅せざるを得なくなったのだ。」

「しかし、この際、戦術的な勝利が必要なんだ。それも徹底的な。戦術的に決定的な勝利を上げ、連邦に向こうから手を上げさせるしかない。それしか、この戦争をとにかくも終わらせる手はない。」

「それで終わるんですか？」

「激した声を上げたのは、ローナクとその勇猛さを並び称されたベイ・ドレン中将。彼は家族の全てを、ドレド艦隊の母星空襲で失っている。参謀本部と政府の無能さと無責任さに対する怒りは誰よりも強い。」

「政府や参謀本部の能なしども、我々が勝ったら勝ったで、図に乗ってもっと勝てと言ってくるくらいが落ちです。奴らには戦争が分かってない。どうして連中の尻拭いばかり我々がやらなきゃならなんのですか？」

「おい、よせ、ベイ。閣下に向かって、その口のききようはないだろう。」

「いいんだよ、レイティ、ベイの言う通りなんだから。」

「止めに入ったシャブリを、マルクは制する。」

「ベイ、君の言う通りだ。しかし、戦いません、御免なさい、で済ましてくれるほど、連邦は甘くない。彼らは有能だ。冷酷なくらい。彼らを交渉のテーブルに引き出すには、それなりのことをしなけりゃならないんだ……」

「ヒースは緒戦に勝つだろうが全勝はできないし、全勝できなければ直ちに退かせる。ヒースが帰ってくると同時に、連邦圏に対する本格的な侵攻を行なう。」

「シユネーゼル……ですか、閣下？」

「ミュッケルが問う。」

「いいと思うかい？」

「兵站線の維持という点では最も好ましいのですが……」

「語尾を濁すミュッケルに、マルクは微笑んだ。彼がこういう物言いをするときには、もっと別の思案があるのが常だったから。」

「しかし、それだけに敵も予想しているでしょう。乗ってやる必要はない、と思えますが……」

「いいだろう、私もそう思っていた。ここへ行くつもりなんだがね、意見を聞かせてくれないか？」

「一瞬の静寂の後、上がった驚愕の声を無視して、マルクは収まりの悪い髪をかき回した。」

「じゃ、説明させて貰うよ。」

「マルク自らは高速巡航戦艦『ドルスファイ』に搭乗して第二、第

三、第七の各艦隊と直率艦隊を率いる。兵力約一万六五〇〇。いずれも艦齢が若く、高速機動性能に優れた艦艇のみを選抜したものである。」

「一方、ネイス・ミュッケルは超ド級戦艦『ドレスト』に将旗を掲げ、第一、第四、第五、第六艦隊合わせて約二万三〇〇〇隻を指揮する。」

『シグナ・フォース』級には及ばぬものの全長一四〇〇メートルを超える超ド級戦艦一六隻も彼の指揮下に組み入れられた。」

「要塞には防空艦隊と制式艦隊の一部約三〇〇〇隻を残し、派手さこそないものの用兵の粘りには定評のあるランク少将に引き続き要塞を預けた。」

「出撃に際し、マルクは全艦隊将兵に訓示する。得意ではないし、好んでもいなかったが、マルクは出撃の意味を将兵から隠すことを好まなかったこともあって、この種の訓示は欠かしたことはなかった。」

「諸君、また戦いが始まる。今度の敵は随分手強いだろう。多分、長い戦いになると思う。なるだけ早く終わる様には考えてあるが、戦争だからお互いどうなるかまでは予想できない。できることなら早く終わって、全員が揃ってル・ラントへ帰ってこられるように努力しようじゃないか……諸君の好運を祈っている」

明日は出撃と言つて、マールクはミュッケルを『ドルスファイ』に招いた。

「しばらくは会えんだろうからね、いい酒を手に入れてある」

『ドルスファイ』は『ラストロイヤルス』級の超大型巡航戦艦であり、もともと副司令官トウル少将の旗艦だった。マールクが搭乗する関係上、トウル少将は司令官休息室をマールクに明け渡していた。

「悪いね」

「いえ……」

ローナクの不在時に臨時に第二艦隊の指揮をとる黒髪の副司令官は微笑んで敬礼を返した。

早いものだ……というのはミュッケルの迷懐である。優しい両親と双子の姉に囲まれていた幸福な少年時代……ドレド戦役での学徒動員から、思いもかけぬ戦場での日々、そして両親の死、ひとり残った姉のアリシアは下院から上院議員という思いもよらぬ人生を選択した。そして、自分はその“メーレン会戦”のあと、ロメイチェフ中将に初めてこの人と引き会わされたのだ。

何もかもが過ぎ去っていく……何も知らず、何も思い患うことなく、両親と姉の庇護のもとにあった日々を懐かしむのは、彼の甘えなのかも知れぬにせよ……

「閣下、一つだけお尋ねしたいことがあります」

グラスに注がれた芳醇な液体を眺めながら、彼は切り出した。

「何……？」

「閣下は本当にこの戦争に勝てるとお思いなのですか。確かに一時的には勝てましよう。連邦があるいは本当に講和へ動くこともありえるやもしれません。可能性としては否定しませんが、そうなったとしても本国政府にその条件を生かす手腕があるとは、私には思われませんにもかわらず、閣下が出戦を決意されたのは何故ですか？」

マールクは酒をすすり、片手で髪を掻き回した。

「はつきり言えば、勝ち目はない。この戦いは政略レベルで既に負けているんだ。連邦のような相手を敵に回して勝てるはずがない」

「ならば閣下……」

「しかし、戦争は始まってしまった。本国の連中が後先も考えずに始めてしまったとはいっても、始まってしまったものはやめさせなけりやならない。そう思つたらう、ネイ」

「どうやってやめさせるのです。参謀本部や政府の人々などは自分達がどのような敵と戦おうとしているのかすら、知らないのです」

「ネイ……こうなったのは誰の責任でもない、市民の責任だと思つんだがな」

「どういふことですか？」

「共和国は独裁国家じゃない。独裁者がいて、そいつがそれ戦争するぞ、俺についてこい、とやったわけじゃないんだ。幾ら軍の発言力が大きくなったと言っても、共和国の憲法は軍が政府……つまり議会制民主主義に基づく市民の統制に従うべきことを定めている。戦争をやめようとするれば、やめることのできる権限は依然として市民の手にあるんだ」

しかし、政府は近視眼的な人気取り政策を、軍部は短絡的な侵略政

策をのみ押し進め、市民はこれを批判しない。できるのにしないのだ。そして、軍のプロバガンダに踊らされるままに、戦いには必ず勝てるものと思ひ込んでいる。

「共和国の民主主義はいつのまにか衆愚政治に姿を変えていたのだ」

「でもそれは、閣下が出戦を決意されたことの理由を説明したことに
はなりません」

「マールクはちょっと哀しげな目で親友の姿を見遣った。

「賭け、さ。大量の死者が出る。市民はドレド戦役で亡くした家族の事を思いだして、ひよっとすると冷静さを取り戻して、戦争をやめようと言いつつも出さぬかもしれない……最初の一年、多分二年は勝てる、決定的にはないにしても……」

「楽しい未来図ですね」

「やや皮肉っぽい口調はミュッケルには珍しい。酔いが回るほどには未だアルコールを口にはしていないのだが。

「マールク艦隊将兵一五〇〇万、その賭けのためのチップですか？」

「それはお互いの主義に反するね、ネイ。負けると分かったら、それ以上將兵を無為に死なせるのは將としての責任放棄だ。そうじゃないかい？」

「成程……」

少し納得したようにミュッケルは頷く。ワインを一口、口に運んだ彼は、ワシエックなどが聞けば腰を抜かしたに違いない科白を平然として口に乗せたのだ。

「どのあたりで勝負を投げるか、今度の戦争はそれが問題ですね」

第五節 アルヴェスタの会戦

「ル・ラント宇宙軍の前衛基地より、制式艦隊らしきもの、大挙出動せり。艦艇数、約一万五〇〇〇。ヴィルワ方面へのワープ・インを確認。超下級宇宙艦多数を含む打撃艦隊」

エイムズ・ナウシヒル中將のもとへ第一報をもたらしたのは、フーバー・ブリン中佐指揮する亜空間滞留型宙雷艦SSTB〇〇四である。

「いいタイミングだ」

連邦暦五六九年一月一〇日。メロス宇宙要塞を放棄したローナク艦隊は、間もなくユアロフレスタ泊地から数十光年の航路を通過するはずである。

既に『シグナ・フォース』号のカーツ大將からは訓令が届いていた。「可能な限りの機動兵力を挙げ、撤退中のローナク艦隊の側面、あるいは全面より打撃を加えよ。主隊（カーツ大將の直率艦隊）との連携に注意」

艦隊の細部の運用は貴官の裁量に任せろ、という内容の訓令を、ナウシヒルは腹心の部下に示して見せた。

「我々を牽制して、泊地に釘付けにし、ローナク艦隊を無傷で収容するのが目的でしょう」

艦隊参謀長のヴェイノールド少將が半白の頭を傾けた。

「一万五〇〇〇とは、思い切った数を出してきたものです」

「五〇〇〇や六〇〇〇を出しても意味はない。ル・ラント艦隊の指揮

官はやり手だ……全艦出撃準備を発令する」

ユアロフレスタ泊地には三個艦隊一万五〇〇〇が駐留する。

「全艦でローナク艦隊の退路と、敵の本隊との連携を断ち切りつつ、ローナク艦隊自体はカーツ提督に処理して頂く」

それがナウシヒルとヴェイノールドが練り上げた作戦だった。

「ル・ラントの指揮官はできる人物らしいが、数日の消耗戦なら互角に戦えるぐらいの手腕は自分にもあると自惚れてもよからう」

ナウシヒルはそう結論づけている。

一日、ナウシヒルは第二、第三、第四の三個制式艦隊を率いて出撃する。会敵が予想される各宙域には一〇〇〇隻単位の辺境警備艦隊を派遣、ル・ラント艦隊の予想外の動きに備えさせる。

「おそらく、リュピリア星系周辺での会敵となりましょう」

それがヴェイノールド参謀長の予測だった。

共和国暦七二〇年二月二五日、連邦暦五六九年一月一四日、恒星系リュピリア外縁部にワープ・アウト直後の『ラスト・ロイヤルス』のブリッジで、電子戦士官が蒼白となって情報表示スクリーンを凝視し、そして悲鳴にも似た叫び声を絞り出していた。

艦隊の前衛、大出力レーダー装備の索敵艦が「敵らしきもの多数、救援請う」との一報後、消息を絶つたのである。

「敵、ですな」

マーク少將の表情にも血の気が薄い。

「おそらく……連邦空軍艦隊主力の大半」

青い炬火のような目で、ローナクは情報表示スクリーンを凝視する。連邦空軍の作戦は戦いの初期のそれとは比較を絶するほど水際だった。ている。

「第一報です！」

電子戦オペレータが声量の豊かさを誇示するかのようについ叫んだが、その声量とはともかく、報告の内容はローナク艦隊の司令部をして顔色なからしめるに充分なもの。

「前方より二、ないし三個制式艦隊約二万、距離七〇〇光秒、接敵は八時間後と推定。後方より、一個艦隊約五〇〇〇。距離一七〇〇光秒の宙点にワープ・アウトしたもよう。接近は約六時間後……」

ローナク艦隊は旗艦『ラスト・ロイヤルス』に従う僚艦の数は、戦闘艦四八〇〇と補助艦艇九〇〇弱

しかし……

「約二万五〇〇〇……五倍……か」

戦場に五倍の兵力を集中し得た、というその事実が連邦空軍の作戦家の非凡さを証明して余りある。

「なるほど、敢えて急追してこなかったのはこのためだったわけですね」

「マーク……『シエルナウス』に移ってくれ」

『ラスト・ロイヤルス』級超大型巡航戦艦の二番艦。『ラスト・ロイヤルス』が破壊された場合にはローナクの将旗を掲げるべき戦艦である。

「は？」

「俺に万一のことがあれば、艦隊の指揮を執ってくれ。一艦でも一兵でも多く、本国に連れて帰らねばならん」

「……」

「エルウェまで五〇〇（光年）弱まで来た。元帥は既に動いてくれてると思うが、残念だが連邦空軍の方が少々ばかり上手だ。万一に備えての策は打っておかんと、ネイに笑われるんでな」

「降伏は？」

遮音シールドに囲まれていてさえ、マークは兵達に聞かれるのを恐れて声を低めた。

「戦えなくなれば……最後の一兵まで戦えなどと俺は言わん」

全滅だけはしたくない……五倍の敵に包囲されつつあるとは言え、マーク元帥がローナク艦隊の救出に動いてくれれば全滅することはないだろう。また、連邦空軍は無理押しは避けて来るだろうから、連邦圏を離脱できるチャンスは十分にある。

しかし……ローナクは言う。ここは戦場だ。何が起こるか分からぬ。ク？……ということだ。「母星宙域会戦」とどっちが際どいかな、マーク？

「比較にはなりませんな」

マークは微笑う。

これあるかな、我が司令官。「勇将」と呼ばれつつも、冷静さと勇猛さを併せ持つ名司令官。

「部下にとつて最もありがたいのは、司令官が優れた用兵者であり、しかも、自分たちがそれを知っているということでありましょう」

「世辞はいい。行ってくれ、マーク」

「了解であります、司令官閣下」

マークは敬礼し、『シエルナウス』号に移乗した。

“敵艦隊を捕捉……接敵は七七分後の見込み”

ローナク艦隊捕捉。ナウシユヒル艦隊は、ローナク艦隊の針路を遮断、天底方向へ変針させつつある。包囲完了まで、あと二時間は要さない。

『シグナ・フォース』の戦闘情報スクリーンは敵味方の艦隊配置を

三次元映像として映し出し、この巨艦の持つ優れた戦闘情報処理能力を実証して見せていた。

カーツは全員に軽い食事を摂るように命じ、戦闘艦橋でも各自に簡易兵食が配られる。

「食べておけ」

カーツがレーフラムに声をかける。

レーフラムは我に返り、そして目の前に置かれた食事を見下ろして眉をしかめる。食欲はまるでない。作戦者としての彼には、もうすることはさしてない。後はカーツの統帥者としての能力が勝利を確実にしていくのを、ただ眺めていればよい。

そんな時に彼の心を占めるのは、自分の作戦によって戦い、死んで行く人々のこと。偽善者と他人は彼を呼ぶかもしれない、が、作戦行動中の彼は、その余りに食事を摂れなくなる。

「接敵一〇分前」

「全機、発艦準備……主砲、斉射準備」

声が重なった。『シグナ・フォース』麾下の艦隊は斜線陣を展開

ローナク艦隊の側背に指向する。

「射程に突入」

「全機発進 主砲斉射開始」

命令一下、連邦空軍艦隊の戦艦の主砲斉射が凄まじいエネルギーの波濤となってローナク艦隊を直撃した。直撃された艦艇が超小型の恒星と化して爆散する。

予想に反してローナク艦隊は猛然と反撃に出てきた。完全と言えないまでも、紡垂形の陣形をとり、連邦空軍の包囲網の隙を衝いて、持てる火力の総てを叩きつけてきたのだ。

それと悟ったカーツは、艦隊を単縦陣に戻し、ローナクが彼の艦列

に撃ち込んだ楔に第二撃を加えて亀裂を穿つのに先んじた。

ローナク艦隊も熟練した艦隊運動でこれを迎え、逆に包囲して集中砲火の餌食にせんものと図ったが、連邦空軍は今やローナク艦隊と互角の兵力を擁し、しかも『シグナ・フォース』級戦艦の火力と防禦力は彼らの想像を絶していたのである。

瞬時にして、超融合核爆発による純白の火球が彼我双方の艦隊前衛を撃ち碎き、脈動しながら拡散して不幸な犠牲者を貪欲にその炎の饗宴の只中へ衝き落としていく。その閃光は、ローナク艦隊においてより大きく、そして激烈であるようにローナクにもマークにも思われたのである。

「艦載機と格闘戦艦艇に突撃を命じよ。ローナク艦隊は浮き足だっている。格闘戦にもちこみ、止めを刺せ」

待機していた艦載機の群が一斉にローナク艦隊に躍りかかった。戦艦は主砲に加えて中距離用の陽子砲、更には近接射撃用のパルス・レーザー機銃までも動員しての全力射撃を続け、それを縫うように艦載機が対艦ミサイルを放ち、中性子砲を掃射して翼を翻す。

ラント支隊の航宙母艦も次々に艦載機を放つての迎撃する。

ラントにとって不利だったのは、支隊の艦載機が有人惑星攻撃用の大気圏突入型だったことである。大気圏突入型艦載機は運動性、戦闘力で、宇宙空間戦闘用の艦載機に太刀打ちできない。連邦空軍が五〇〇機を投入したのに対して、ラント支隊が出撃させたのは二八〇機、ほぼ二対一の戦力差は決定的だった。

会敵数時間にしてラント支隊は本隊と分断され、支隊自身も連邦空軍の苛烈な攻撃の前に統一指揮が困難になり始めていた。

「敵の支隊旗艦がああたりにいるはずだ。右へ五度、変針しつつ主砲斉射一〇連！」

戦艦『アルンハイム』艦長のハイドリヒ・ネーベルシュタット中佐は、クルーカットの金髪と堂々たる体躯の所有者で、“ゴールド・ファルン金色の隼”とあだ名される。

『アルンハイム』の砲撃は巧妙さと果敢さを極め、ラントの旗艦『エレセヴェトウリ』は護衛艦の爆発する火球に包囲された。

「包囲されつつあります」

ラントの副官の報告を戦闘情報スクリーンが裏付けた。ラント支隊の戦線は急速に崩壊しつつある。ラント支隊が一步、後退するたびに連邦空軍艦隊は二歩を踏み込んでくる。一撃を受けることにラント支隊の戦線は崩れ、爆発する艦艇と艦載機の火球が、白光のネックレスとなつて支隊を締め上げた。

「脱出か、全滅か……あと何隻残っているか？」

「二〇〇隻余りであります……」

「まだ、壊滅と言つわけではないな。通信は？」

「辛うじて……しかし、加速度的に状態が悪化しており、いつまで維持できるか」

「なに……長いことではない」

ラントは最後の一兵まで戦え……と下令したのである。

「……ここで私が降伏してしまえば、敵の半数は本隊の攻撃に向かうだろう。それに、マールク元帥も我々を救援に向かわれているはず。時を稼ぐのだ。一分ごとに、我々の戦勝が近くなる。持久せよ！」

非常識な命令に驚く副官にそう説明したラントは、指揮シートを立つた。

「全艦、球形陣をとれ。急げ！」

マールク艦隊の侵攻を最初に捕捉したのは軽巡洋艦『ロシユラフ』

を旗艦とする第四駆逐戦隊である。第四艦隊に属するこの部隊は、ローナク艦隊との戦場の側面を哨戒中だった。

戦隊の先頭を進む駆逐艦『アルフガム・サニア』の艦長ペイゲ少佐も緊張の極にあつた。司令部は敵に出会ったら戦わずに逃げる、といつてきている。軽巡洋艦一隻、駆逐艦一〇隻の貧弱な部隊では、数千隻からなる制式艦隊に遭遇すれば逃げるしかない。が、はたして敵が逃がしてくれるか？

「重力波に擾乱が生じています」

前置きなしに電子戦主任士官のヴェイト二大尉の声が耳を打った。

「敵か？」

上擦りそつになる声を、ペイゲ少佐は辛うじて抑える。

「ワーブアウト……です。間違いありません。質量は……」

「どうした、大尉、続けて報告しろ」

「質量は二〇〇〇トンクラスから……最大一五〇〇万トンクラスまで……総数は約二万五〇〇〇。距離一〇〇〇光秒、五分後に実体化します」

ペイゲは息を呑む。彼とて連邦空軍に入つて一〇年を越えるベテラン士官であるが、その彼にしても総数二万五〇〇〇隻の大艦隊を目にしたことはなかった。

『アルフガム・サニア』からの通報でツェルス准将は全艦に後退を命じる。

「直ちに司令部に報告、我、敵艦隊と二〇三・一〇二・三三宙域で接触せり」

後退しつつも、彼らは監視衛星を放ち、レーダーその他の電子戦装置を全開にして敵情の観察を続ける。

“……！”

『アルフガム・サニア』では、ヴィトニー大尉が息を呑む気配がペイゲ少佐のヘッドセットに伝わって来た。ミュツケル麾下の共和国艦隊主力二万三〇〇〇隻がワープアウト、見る間に第四四戦隊の各艦のレーダー・スクリーンが光点に満ち溢れ、そして次の瞬間、凄まじいECMが一切を白色雑音の中に掻き消した。ツェルスは連れて来ていたレーダー艦のレーダーの出力を全開にさせたが、圧倒的な出力差に手も足も出なくなつた。

「全艦反転、最大戦速にて急速離脱」

第四四駆逐戦隊は、その宙域から急速に撤退した。

「敵艦隊との相対距離一〇〇〇光秒。敵艦隊が現状のコースを維持するものとして接触は二時間後と推定されます。敵兵力の詳細は不明なるも、約二万二〇〇〇から二万六〇〇〇隻と推計されます」

「二万五〇〇〇だと？」

『ロシュラフ』からの至急報は、連邦空軍艦隊に電撃のようなショックを与えた。

「敵の主力は一万五〇〇〇程度ではなかったのか……」

「閣下、敵艦隊からと思われる信号を傍受しました。どうやら我々に向けての通信のようです」

エルヴェニツク中佐からの新しい報告が一同の注意を呼んだ。

「映像を伴っているのか？」

「スクリーンに転映可能です」

カーツは一瞬ためらつてのち、スクリーンに出すよう命じた。

『シゲナ・フォース』号作戦会議室の大スクリーンが明るくなり、ひとりの青年の姿を映し出す。

「共和国宇宙軍を代表し、連邦空軍艦隊の諸提督方に挨拶を送りま

す」

青年は折り目正しい口調で語り始めた。淡い金髪と、端正な眉目。穏やかな光を湛えたエネラルド・グリーンズの瞳に、連邦空軍の驍將たちの間から虚を衝かれたようなざわめきが立ち昇る。

「本職は、共和国宇宙軍艦隊最高司令長官クローネス・マールク元帥です。連邦空軍と干戈を交えるのは我々の本意では有りませんが、我が政府からの命により、今日、止むを得ず連邦に対して戦いの火蓋を切ることとなりました」

無論、マールクではなくミュツケルであるが、真相を知る連邦空軍軍人はいない。こと軍事情報に関するかぎり、共和国側の情報管制は完璧に近かつた。

「我が共に武運に恵まれることを祈ります」

ヒースクリフ・ローナクの華麗な容姿は、連邦空軍の將兵に苛烈なほど強烈な印象を与え、それが故にかえつて士気を駆り立てられた面が確かにあつた。しかし、繊細な長身、穏やかな物腰のミュツケルの姿には、奇妙に彼らの戦意を削ぐものがあつた。

束の間、呆気にとられた沈黙が、作戦会議室のフロアを駆け回つていた。

「ふざけやがって……」

ナカースル中佐が反感を駆り立てるように低く呟く。連邦空軍に属する彼らには、戦争に古代の騎士道を持ち込む趣味はない。彼らの祈るの自らの武運であり、敵の不運である。敵の武運を祈つたり、勇戦ぶりを湛えたりするくらいなら最初から戦争などするな……多くは連邦空軍提督が所謂「流血のロマンティズム」と無縁なのは、連邦空軍の基本性格……市民を弾圧するための連邦政府の暴力装置……から来るものだろう。連邦空軍の歴史は、ともすれば中央政府

から離反しようとする辺境の植民惑星住民への情け容赦のない弾圧の歴史であったから。

連邦空軍の高級軍人たちの手は数億とも言われる連邦市民の流血に塗れている。

「しかし、ル・ヤント宇宙軍とはえらくまた美男子の多い所らしいですね。ローナクといいマルクといい……勝利の女神とやらが面食いだつたら我々に勝ち目なし、というところでしょうか……」

エルヴェニック中佐が半ば本気ともつかぬ軽口を叩く。一同は、肩を竦めてレーフラムを見遣った……我々も捨てたものではなさそうだよ、と。

「返信を致しますか」

エルヴェニックの質問に、カーツの返答はそっけない。

「無用だ」

連邦空軍艦隊は、カーツの本隊とナウシユヒル艦隊を集めても二万隻にやや欠ける。

裏をかかれた……レーフラムは思う。時間的余裕は二時間。ナウシユヒル艦隊にル・ヤント艦隊主力を牽制させ、カーツ艦隊だけでローナク艦隊を処理するつもりだったところへ、二万五〇〇〇（実数は二万三〇〇〇）もの大部隊を投入されてしまったのだ。

「これはしてやられたな……」

カーツも意見を異にはしなかった。

「ナウシユヒル艦隊と戦場で合流しましょう」

レーフラムは結論を出した。

「しかし、がっぷり組んでしまってるぞ。無理矢理引き離したら、かえって大混乱する」

ナカースルが指摘する。

「ローナク艦隊との戦闘から撤収して合流を図るのではなく、ナウシユヒル中将の艦隊をそのまま新手として戦場に投入し、ローナク艦隊を撃破して本宙域を離脱します」

「際どいな」

ナウシユヒル艦隊の戦場到着と、新手のル・ヤント艦隊との接触到時間差はほとんどないと言っている。一つ間違えば、いやおそらく確実に、現在の戦場は二万の連邦空軍艦隊と、三万のル・ヤント艦隊が正面衝突する激戦場となる。連邦空軍史上にも、万余の艦隊が激突した例はない。

数千の艦艇が失われ、戦場に斃れるのは数百万の犠牲者……その想像はレーフラムの背を凍らせる。意識が地を離れて漂い出すような、胸の悪くなるような頼りなげな気分が彼の意識を覆つた。

「おい、レフィ、レーフラム・ネレイド、どうした。何を考えてる」

不意に、太い声が地上を半ば離れかけていたレーフラムの意識を『シグナ・フォース』号艦内に引き戻したようだった。

焦点を取り戻したレーフラムの視界に、ナカースルの男性的な容貌が浮かび上がる。健常者が病人を気遣う視線を認めて、レーフラムは努力して意識を戦場に連れ戻す。

「何でもない」

「身体のことば聞いている。無理はするなよ」

「無理……か？」

微笑つ。既に戦場に出ていること自体が無理なのだ。今更、「無理をするな」はあるまい。

「上手く戦場を離脱できたとして、次の戦場はどこだ？」

「……アルヴェスタです」

「アルヴェスタ？」

恒星アルヴェスタはO型主系列に属する白色の巨星で惑星は六個。

その内の二つは所謂内惑星型だったが、無人の重金属鉱山がおかれて
いるだけで植民計画はない。光球半径が連邦母星系の主星トゥーラス
の数十倍、光度は数百倍に達する巨大な太陽アルヴェスタは、その巨
大さ故に不安定であり、しばしば激しいフレアが惑星表面を灼くため
に植民には不適當だった。かわりに多数の航路標識が設置され、連邦
圏辺境の宇宙の灯台として親しまれている。

連邦空軍はこの恒星系にも要塞宙域を設置し、対ル・ラント戦の第
一防禦線としていたのである。

「上手く行くかな？」

「行かせなければ、我が艦隊は全滅です」

危愆するカーツに、レーフラムは奇妙なほどに冷徹な口調で言い切
った。

「返信、ありません」

通信士官からそう報告されても、ミュッケルは特に失望もしなかった。もともと返信を期待しての通信ではないし、それどころかナカールなどが吐き捨てたような騎士道趣味ですらなかった。

「子供だましなやり方ですが、これで我が艦隊を指揮しているのがマルク閣下ご自身であると、彼らも少しは思ってくれたでしょう。軟弱なやり方をする、と馬鹿にしてくればなおいいのですが」

「それは少々、虫がよすぎる期待だと思います」

副司令官のリューフレット・パイク准将はにこりとませず、生真面目な表情で応える。二〇歳の若い准将で、共和国宇宙軍最年少の提督である。戦闘時には戦艦『クレストルランス』で艦隊の半ばの指揮をとり、ミュッケルに万一のことがあった場合にはかわって第一艦隊全体の指揮を揮う立場にある。ドレド戦役当時には当然、軍籍にないが生真面目でよく整理された頭脳と優れた戦術眼を持ち、ミュッケルを戦術上の師と目している。

ミュッケルは部下の生真面目な返答に柔らかく微笑する。

「そつ、そこまでは私も期待していません」

では行きましようか……戦場を前にしたときにいつもそつであるように、ミュッケルの口調は柔らかい。

「連邦空軍艦隊は戦場を撤収し、脱出するではありませんか？」

「それはヒースの実力に対する侮蔑です、准将」

「は、しかし、連邦空軍艦隊の総兵力は二万近く。ローナク閣下の艦隊は五〇〇〇に欠けます」

「まだ、連邦空軍も我々も兵力を合流させたわけではなく、ヒースはローナク中将の艦隊は連邦空軍艦隊と互角の戦いのさなかにある、ということ。互角の戦いである以上、ローナク中将ほどの名将が、

むぎと連邦空軍に戦場での主導権を譲り渡すはずはないし、連邦空軍にも水準以上の指揮官がいるのですから、ローナク中将の実力を必要以上に低く見る愚は犯さないでしょうね」

おとなしやかな微笑は、共和国宇宙軍に並ぶ者なき武勲に経歴を埋め尽くされた共和国宇宙軍最高の智将のものとは思えないほど優しかった。史上最高の名将与謳われるマルク元帥ですら、純粹な戦術指揮能力ではこのミュッケル中将に一步を譲るだろうとさえ言われているのだ。

「しかし、正攻法で正面衝突すれば、我が方の被害も無視できなくなります」

パイクの反論は、ミュッケルへの反感を意味しない。この年若い智将との戦術論を、パイクは明らかに楽しんでた。

「それだから、閣下が自ら出戦されるんです、准将」

いつに変わらぬ丁寧な口調で軽く頷いて後、ミュッケルは最終的な命令を下した。

“全艦隊、最大戦速。現コースを維持せよ。目的は敵艦隊の本宙域からの撃退である”

ローナク艦隊とカーツ艦隊の激戦は続いていた。艦載機戦闘で劣勢に追い込まれたラント支隊は急速に戦線を縮小させ、防禦球陣に艦隊を再編して抵抗を続けている。一方、ミュアン支隊と、ローナクの本隊は、吼え狂う三隻の『シグナ・フォース』級戦艦の砲撃を受けとめかね、じりじりと後退を続けていた。

“もつ、余り長くは無理ですぞ、閣下”

マーク少々の意見具申が、暗に“脱出を考えよ”との意を込めたものであることをローナクは正確に理解した。

「厚意は受けるが、まず無理だ。逃げたところで、敵の第二陣にくわえ込まれる」

「このままではじり貧です」

「戦線を守り抜け、マーク。崩されたら、終わりだ。チャンスは二度ない。焦っては、何もかもぶち壊した」

「了解であります、ご自愛を、閣下」

「死に急ぐなよ。男の六〇は働き盛りだぞうだからな」

「無理を申されませぬ」

敬礼。

「ラント准将から緊急連絡、損害甚大、救援を請う」

歯がみを、ローナクは抑える。ラント支隊の損害は大きく、損傷率は三割を超えようとしている。連邦空軍艦隊も、ラント支隊を弱点と見て、攻勢の重点を移し始めているようだった。

が、ローナクも直率集団の中から超大型戦艦を繰り出してラント支隊を支えしめる。かさにかかって攻め込もうとした連邦空軍の突撃艦集団は、巨大戦艦の主砲斉射を至近距離から叩き込まれて瞬時に潰乱した。ローナクは更に高速巡洋艦を追撃に向け、潰走する敵艦隊に後背から追い打ちをかけようとしたが、これは高速で突出してきた連邦空軍の巡洋艦集団から苛烈な応射を浴びせられ、断念せざるを得なかった。

連邦暦一月一四日遅く、遂にナウシユヒル艦隊が戦場に到着する。

「が、遅い……」

呟いたのはネイス・ミュッケルである。ナウシユヒル艦隊に遅れること、約半時間

「敵艦隊、至近。砲撃距離まで、後一〇分！」

「ラング、マックス、シャブリの各提督に命令、後方の保全と警戒に

努めよ、と」

「閣下？」

「第一艦隊はこのまま戦場に入。敵艦隊中央を穿貫突破し、ローナク艦隊との連携を確保します」

思い切った苛烈な命令。

連邦空軍艦隊から見れば冗談ではなかった。

ナウシユヒル艦隊は、航行序列から戦闘序列に艦列を組み直している。航行序列から、いきなり戦闘へ突入してくるなど、カーツですら思いもよらないやり方だった。

斉射された数千門の熱線砲、数万発の超融合核宙雷がナウシユヒル艦隊の中央を集中して灼き、過負荷になった防禦シールドを噛み破る。エネルギーの防壁を突破した超高熱の旋風は、瞬時に金属の装甲の抵抗を撃破して艦内になだれこみ、燦然たる超融合爆発の中に全てを還元する。先制の一撃は数十隻の艦艇を蒸発させ、それに数倍する艦艇に損傷を与えて駆け抜けた。

連邦空軍も反撃する。

『シグナ・フォース』、『リヴァイア』、『トゥルダ』の三艦が主砲を斉射し、凄まじい破壊力をはらんだ光の剣がミュッケル艦隊の中央を突き抜けた。

ミュッケルの旗艦『ドレスト』も、この一撃で損傷を被った。『トゥルダ』の主砲斉射の直撃を左舷側に受けたのだ。熱線砲の光の矢は、防禦シールドに幾らか偏向されたものの、舷側装甲を削り取り、金属の蒸気を巻き上げながら百数十メートルもの傷跡を『ドレスト』の脇腹に穿った。全長一四〇〇メートル、共和国最大級の戦艦でなければ致命傷だったに違いない。

直撃の凄まじい衝撃の中でもミュッケルは自若としていた。もとも

と戦場で逆上することの極端に少ない青年である。

「第一艦隊は敵の火力に対する防壁を形成。ラング、マックス、シャブリの各提督に連絡。命令と同時に近接格闘戦に移行できるように準備。これ以上、敵に先手を許せば、損害は耐え得る限度を越えます。注意するように、付け加えて下さい」

巨艦群を中心とするミューケル艦隊が強力な防禦シールドと巨砲の壁を作り、連邦空軍艦隊に猛烈な報復の斉射を浴びせかける。共和国宇宙軍の誇る一六隻の『ドレスト』級巨大戦艦は、『シグナ・フォース』の主砲射撃をすら拒止し、その巨砲は連邦空軍の巡航戦艦の防禦シールドを紙でも破るかのよう易々と貫通し、艦体を串刺しにする。

レーフラムは、顔色を蒼白に変えていた。

ナウシュヒル艦隊との連携でローナク艦隊に決定的な一撃を加え、そのまま最大戦速で離脱するつもりが、ミューケルは彼の勝ち逃げをゆるさなかった。強大な共和国第一艦隊が連邦空軍艦隊の行き足を止め、彼我の戦闘距離は次第に接近して来る。兵力差にものを言わせ、兵力を惜しみなく戦場に投入するミューケルの前に、連邦空軍はじりじりと圧倒され始めていたのである。

「これは……」

呟く声は、多分メイリア一人にしか届かなかっただろう。

血の気の薄い唇をかみしめるレーフラムに、メイリアは思わず息を詰める。会戦直前、メイリアはレーフラム付けの従卒扱いとなっていた。

「提督……?」

「コーヒーを一杯頼む。ブラックで、熱いのがいい」

落ち着いたレーフラムの口調に、メイリアは少しほっとする。この

人が落ち着いている限りは大丈夫……レーフラムに向ける信頼は、

『シグナ・フォース』がひっきりなしに被弾し、直撃の振動に揺れ動く艦橋にあっても小揺るぎもなかった。

メイリアの華奢すぎるほどにほっそりした背を見送り、レーフラムはあわたたしくコンソールを操作し始めた。

「距離、詰まります。陽子砲射程に突入」

メイリアが紙コップにコーヒーを満たして戻った時、戦場の様相は一変した。

「艦載機、及び小型艦艇多数、急速接近！」

「格闘戦だ、艦載機発進、突撃艇隊は突撃に移れ」

ル・ラント航宙母艦を飛び立った艦載機とシャブリ麾下の高速巡洋艦集団、さらにはマックスの率いる超大型巡洋艦集団を合わせた大集団。

カーツの命令すら時を失っていた。レーフラムは思わず呻く。陽子砲射程は格闘戦距離への突入を意味するが、敵は自然な呼吸でその間合いを知っている。連邦空軍きつての実戦指揮官カーツですら、彼らには一瞬の遅れをとるのだ。

連邦空軍艦隊は出遅れた。航宙母艦からは艦載機が発進を開始し、高速の格闘戦艦艇が迎撃態勢に移るが、既に至近距離に迫っていた共和国宇宙軍の艦載機と巡洋艦、駆逐艦の群は態勢を整え切れない連邦空軍の艦艇に肉薄し、正確極まる狙撃を叩き込んで次々に爆発の閃光を閃かせる。

ル・ラントの艦載機は、連邦空軍の艦載機にはやや武装で劣ったが、兵力と搭乗員の技量・経験では圧倒していた。

小型で軽捷な艦載機群に懐に飛び込まれ、対応に追い回される連邦空軍艦隊に、今度は外側から激烈な砲火が襲いかかって来た。ミュー

ケルが第一艦隊の艦列を解き、格闘戦列をとって突入してきたのだ。

中央突破。かつてローナクが好んで用い、マールクもドレド戦役ではしばしば用いて大勝を博したことがある戦法である。『ドレスト』を先頭にしたマールク艦隊は近接格闘戦部隊と踵を接して連邦空軍の艦列のただ中に巨大な楔を撃ち込んだ。

「やはり、その手できたか……」

カーツが微笑むのを、メイリアは不思議なものを見る思いで見違る。彼女の目にも戦局が一方的に不利であることは一目瞭然だったのだから。

「有難う、旨かった」

コーヒートの紙コップを握り潰しながら、レーフラムもメイリアに声をかける。その頬も血の気を取り戻して来ていた。

中央突破をかけられた連邦空軍艦隊は急速に後退を始め、それに乗じるようにミュッケル艦隊が鋭い楔となって艦列を左右に分断しようとする。分断に成功すれば、そのまま左右いずれかに旋回し、一方を包囲して各個撃破にかかる。分断されれば、連邦空軍に勝ち目はない。

しかし、『ドレスト』艦上のミュッケルは綺麗な眉の間に皺を寄せ、戦闘情報表示スクリーンの表示する彼我両艦隊の動きを見つめている。彼は樂觀できなかった。そんな簡単にセオリーにはまる連中ではない。理屈ではない。厳密な理論による証明など何の意味も持たないことを彼は知っている。戦場で彼が信じるのは唯一、彼自身の直感のみ。そして、彼は戦場で正確な直感を持ち得る天才だった。

そのミュッケルの天才が彼自身に不安を囁きかける。彼は意識して微笑みを浮かべ、従兵に飲み物を持ってこさせた。首将として、部下

には険しい表情を見せられない。特に、兵たちが彼を信頼する所以のものは、戦場に臨んでの彼の極端なまでの冷静さだったのだから。

『ドレスト』艦橋に小さな歓声が上がった。

「突破しました。艦隊前衛はローナク艦隊と合流、敵艦隊後背に回り込みつつあります」

突破成功。半包囲状態で喘いでいたローナク艦隊の各艦からも歓声が呼応する。ドレド戦役ではこの態勢になれば百パーセント勝つてきた。

が、ミュッケルははっとなった。飲み物を一口含んだ途端、彼は敵の意図に思い当たったのだ。そう、彼が敵の首将ならそうするであろう奇策に……

「包囲運動中止、このまま全速前進」

「閣下？」

ミュッケルの命令は艦橋内に不審の声を呼んだ。必勝の態勢を自ら捨てるにも等しいこの命令は、ミュッケルのような天才を持たぬ者には理解不可能だった。が、一瞬後、命令は遅滞なく伝達される。艦隊将兵はミュッケルの天才を知っており、その彼の命に服することが、戦場での生存の可能性を高める所以であることを知っている。

命令は遅滞なく伝達され、実行されたがそれですら遅かった。

ミュッケルの命令に被さるように、『ドレスト』の電子戦士官が驚愕の声を上げたのだ。

「敵艦隊が、二方向に分離……反転して我が艦隊を挟撃に移りました。逆に中央突破をかけられてしまいます！」

「それは違います、オペレータ、事実だけ報告して下さい。推測は必要ありません」

さしものミュッケルにして、声を平静に保つのに多少の努力が必要

だった。うろたえるな、と怒鳴りつけたいところである。

連邦空軍艦隊は突破されたポイントから二集団に分離し、前方集団が旋回してミュッケル艦隊の後背に回り込み、後方集団はそのまま突進して逆に中央突破を図ってくる。ミュッケル艦隊は、その後方集団を半包围される態勢になった。ミュッケルからの命令がなければ完全に包围されたことだろう。

「このまま全速前進、左後方へ展開して更に外側から包围します。一瞬遅れば、損害は一方的に増大します」

あくまでミュッケルは丁寧な物言いを崩さない。内心、連邦空軍の戦術の巧妙さに舌を巻く思いであり、かつてない焦燥を味わってはいたが、司令官自らが狼狽をさらけ出す愚かしさをよく弁えているミュッケルだった。

「敵艦隊前方集団は直進」

『シグナ・フォース』艦上ではレーフラムが僅かに唇を噛む。読まれたか……と思ふ。中央突破は予想していた。がからこそ、いったんは突破を許しておき、前後から挟撃することを前提とした作戦をたてたのだが、寸前でミュッケルに見切られてしまった。

「敵前方集団、回り込んできます」

エルヴェニツクの声が彼を我に返らせる。まだこの宙域の戦闘は終わっていない。

「包围網を解け、本宙域を撤収する」

防御力の弱い艦艇を前方に回しながら、大型戦艦と巡洋艦の集団が後衛に回って包围網を開いて撤収を援護する。二万に近い艦隊が曲芸のように運動し、撤収して行くさまはみごとなものだった。

「アルヴェスタへ撤収する。ルウ宙域の守備隊に連絡、迎撃準備を整

えさせよ」

『シグナ・フォース』が命令が全艦隊に飛び、連邦空軍艦隊は直ちにヴィルワ恒星系からの離脱コースに入った。五〇光年先のアルヴェスタ恒星系で再集結、惑星ルウの要塞宙域で再度共和国艦隊を迎撃する。

「敵艦隊、離脱」

戦艦『ドレスト』艦上で、ミュッケルは整然と退却する敵艦隊の動きを、半ば感嘆の面持ちで見凝めていた。

与えた損害は少なくないはず。少なくとも敵艦隊の総兵力の一割以上を破壊、ないしは大破させ、味方の損害は絶対数で半数だろう。

が、数字の上だけの勝利ではないことをミュッケルは知っている。ドレド戦役の時には敵艦隊をこの宙域で壊滅できたはずなのだ。五割増しの兵力を用意し、中央突破にさえ成功した。連邦空軍艦隊は全滅してしかるべきだった。にもかかわらず、敵艦隊は美事な戦術運動を見せ、ミュッケルと互角に渡り合った上、いまあおして整然と撤収しつつある。あれは、敗北した敵の姿ではない。戦略上の目的を達したと見たならば、さっさと引いていくあたりは感嘆に値した。

「閣下、ローナク提督です」

通話スクリーンにローナクの端麗な姿が浮かび上がった。ただ、濃い疲労の影がその美貌を幾分、くすませてはいたけれども。

「ネイ、感謝する」

「遅れて申し訳ない。やられましたか？」

「三割近くやられた」

端麗な表情を、ローナクはちよつと歪める。特にラント支隊は事実上壊滅状態で、今後の戦闘には参加できそうにない。

“追撃は？”

「追撃にかかります。すぐに全艦に指令して下さい。補給は、追撃を行いなから済ませて下さい」

ミュッケルの命令は、ブリッジに微かな動揺を生んだ。

ローナクでさえ、ちよつと意外そつに目を瞠つてみせる。慎重なミュッケルが、兵站を無視しての追撃命令を下したことに對する驚きと危懼だつただろう。

「勝ち足りないのですよ」

“なるほど、な”

「この程度勝つただけでは、連邦は小揺るぎもしません。あの艦隊の九割を沈め、艦隊司令部を根こそぎにして初めて我々はこの会戦に勝つたことになるでしょう。今のままで彼らを逃がせば、戦略的には我々の負けです。シュネーゼルを占領しても何の意味もありません」

“見込みはあるのか？”

補給力の弱さという共和国宇宙軍の弱点についてはローナクもいやになるほどよく知っている。追撃をかけるにしても、敵を短時間で撃破し、兵を返す見込みがなければ、結局は伸び切つた補給線路を易々と断たれて敗滅するしかない

「見込みはあります。たとえ彼らが一撃撤退の戦略をとり、我々を連邦圏深くに誘い込もうとしてとしていたとして、その前に彼らを捕捉し撃破できるでしょう。条件さえ揃えば、ですが」

“揃わねば……？”

「撤退します」

あつさり言つてのけるミュッケルに、ローナクはちよつと毒気を抜かれた表情になつたが、ミュッケルの実績が彼を納得させた。ミュッケルは勝てるようにして戦つ。無謀の要素が入り込む余地は少ない。

ミュッケルができる、と言つからにはできるようには考えてある筈なのだ。

実際には、それほど呑気な話ではない。

確かに勝つようには考えてある。指揮官としては至極当然なこと。戦いに臨んで勝つように考えていない指揮官など、指揮官の名には値しない。ただ、人間の想像力にも限界があるのは事実で、連邦の指揮官の能力がミュッケルのそれを上回れば、勝つことは不可能になる。

かなわじとみれば逃げるつもりにせよ、その場合とて、果たして相手が逃がしてくれるかどうか。今度の会戦で連邦空軍の見せた作戦能力と実戦指揮能力は、彼の予想をすらすらや上回つたのは事実なのだ。

ミュッケル艦隊は連邦空軍艦隊を追つてリュピリア星域を離脱する。

「敵艦隊はアルウェスタ恒星系へ撤退するものと見られます」

偵察部隊からの報告に、ミュッケルは軽く頷いた。

“アルウェスタでもう一撃を加えるつもりであります”

戦艦『クレストルランス』で艦隊の半ばの指揮をとつているパイク准将が『ドレスト』に連絡をとつてきていた。

「そのようですね……」

優しいほどの微笑を首将の表情に見出して、パイクは怪訝な表情になる。

「『クレストルランス』は無事でしたか？」

“いえ、少々やられました”

歴戦の名戦艦『クレストルランス』も、連邦空軍の重巡洋艦『ヴァルトデリューティア』、『ヴェアフォル』につきまとわれ、主砲塔三基を破壊され、六〇名以上の死傷者を出したといふ。ミュッケルは

形のいい眉をひそめた。

「戦闘の継続は可能ですね」

「可能であります、閣下」

「第八戦闘集団に支援させましょう。兵に休息を取らせ、修復可能な部分は至急に修理して置いて下さい。次の会戦で連邦空軍の息の根を止めます」

パイクは息を呑む。ミュッケルの口から「息の根を止める」などという、やや大言壮語に類するとさえ言える言葉を聞くのは初めてだった。マールク艦隊では、「大言壮語は無能の証明」とされ、厳に戒められているのだ。

「現実から遊離して大きなことを言い、自分を偉く見せようとするような奴にろくなのはいないよ」

それがマールクの口癖だった。

「息の根を止める」といったからには、ミュッケルにはそれを裏付ける……連邦艦隊を壊滅させ得る……確信が無ければならない。

「連邦空軍艦隊を全滅させること、可能でありましょうや？」

「全滅させるのは困難です。しかし、長期にわたって回復を困難にし、戦争の継続を諦めねばならぬ程度の打撃を与えるのは可能でしょう」

「了解であります、閣下」

さて……ミュッケルは、ワープに入るまでの時間を利用して、兵達に食事と仮眠を取るように命じてから、指揮シートに深く身を沈めた。

連邦空軍は戦術能力で、共和国宇宙軍に匹敵することを証明した。

では、戦略レベルはどうか……

ミュッケルは艦隊を先駆する第六艦隊のシャブリ少将を呼び出した。

「尾撃戦でありますか？」

シャブリはミュッケルが口を開く前に問うた。ミュッケルはにこりとして頷く。

「簡単にアルヴェスタまで退かせては逆に意図を見抜かれかねません。任せます」

「了解」

「閣下、お食事をお持ちしました」

兵食を載せたトレイを持った従兵が、ミュッケルに声をかける。

「ああ、どうもありがとつ」

微笑んで、トレイを受け取る。連邦空軍であれば、殆どが酵母からの合成食品であるのが、共和国は依然として食糧生産を従来の農業技術に頼るしかないのだ。

食事を口にし、ふと軽い疲労を覚えてミュッケルは意外な気分になった。ドレド戦役時には会戦の最中に疲れを感じたことは少なかった。

「疲れる相手だからな、連邦は……」

連邦空軍艦隊でも、将兵達が食事の配給を受けていた。

「提督、お食事を……」

ミュッケルとは対照的に食事に一切手をつけようとしていないレーフラムに、メイリアが気遣わしげな声をかける。その声に、レーフラムは物憂げに兵食のトレイに目を遣った。酵母パンのトーストサンドウイッチ、蜂蜜入りの合成ミルク、ミックスサラダ、スープなどが並び、『シグナ・フォース』級戦艦ならではの、水耕農園製のフルーツが添えられている。

「後でいい、今は食欲がないんだ」

「でも、この前、食事をなさったのは会戦の始まる前。昨日の昼のは

「です。もう一六時間になります。お食べにならないと……」

「うん……」

案外素直にトレイに手をやるが、ミルクを一口飲んだだけ。

「提督！」

もどかしくなって声をかけるとまた一口。

結局、他の艦橋要員が食事を済ませた時にも、レーフラムはミルクの容器を半分空けただけだった。

「提督はあれで、おからだがもつのでしょうか？」

メイリアは軍医長のエミル・ノーラ中尉のもとを訪れてこぼした。

レーフラムは会戦が始まってからはミルクを半分口にしただけ。長期にわたる宇宙生活で体調に危険な衰弱を来している彼にとつて、食事を摂らないのはなにより危険だというのに。

「もたないわね、とても……」

エミルは苦しい表情になる。彼女は、士官学校ではレーフル・フアウルス……レーフラムの弟……と同期生だった。レーフラムは、その弟とは何もかもが違っていた。レーフルが事務的に殺人作業を遂行できる生粋の軍人なのに、レーフラムの繊細さは人類最大の蛮行である戦争に耐えられない。

「あなたが勧めても？」

「ええ」

レーフラムはメイリアを信頼しているように見える。見えるだけでなく、実際に彼女を信頼し得る従卒として遇してはいる。ただ私的な面について彼女を受容しているかという点、必ずしもそうではなさそうである。他人から私的な面に掣肘を受けるのを嫌がるのはレーフル・フアウルスもそうだから、あるいは兄弟に共通した性格なのかも

しれない。

メイリアはしばらく考え込み、そして顔を上げた。

「勧め方を変えて見ます。ワーブ明けに」

「いい考えがあるの？」

「余り自信はありませんけれど」

やらぬよりはましだろう、とエミルは賛成する。その表情に、ちょっと掴み所のないものが一瞬浮かぶのを、メイリアは見逃していた。寂し気な、そして一抹の嫌悪を込めた表情……

“ワーブ五分前、カウントダウン開始”

ナカースル中佐の声が艦内に響いた。

ミユッケルは、しかし、容易には連邦空軍艦隊をアルヴェスタまで退かせなかつた。パルス・ワーブからワーブアウトすると、必ず艦隊後方にシャブリの指揮する格闘戦部隊が食らいつく。大きな兵力でこそないが、巡洋艦を主力とした十数個の部隊が高速で連邦空軍の艦列に躍り込み、熱線砲と宙雷、中性子砲を乱射しては、固執することなく離脱する。そのたびごとに何隻かの連邦空軍艦艇が致命傷を受けて爆散し、将兵に歯噛みさせた。シャブリのヒット・アンド・アウェイの余りの迅速さに、敵味方を識別する暇もなく発射された熱線砲が味方の戦艦の艦腹を射抜き、護衛艦がよけ切れずに航宙母艦に激突、炎上させるといふ信じ難い事態まで発生してレーフラムらを苛立たせた。

それでも一五日の昼過ぎ、連邦空軍艦隊は予定通り、恒星系アルヴェスタの外縁宙域、第六惑星ミエレヤから一〇〇〇光秒のポイントにワーブアウトした。要塞宙域は第五惑星ルウの衛星軌道上。距離にして約二〇〇〇光秒。

「ルウ宙域まで現速度で約七時間。敵艦隊のワープアウト推定時間は一五分後。ポイントは現在推定中」

カーツはミューケル艦隊のワープアウト推定ポイントに六〇〇万個の超融合核機雷を敷設させた。明敏なミューケル……カーツらはマールクだと思っていたが……が、見え透いたトラップにひっかかるとは思われなかったにせよ、時間稼ぎにはなるだろう。

「提督……」

声をかけられ、レーフラムは描いたように形のいい眉を微妙な角度に歪めた。

「食事はいいよ、あとで食べる」

「いいえ、今、食べて下さい」

「メイ……」

「お食事をなさらないのは、提督のご自由です。でも、提督には先任参謀としての責任があたりはずです。もし、戦闘の途中でお倒れになつたりしたら、もし、それがもとで戦いが不利になるようなことがあつたら、どうなさるおつもりなのですが。それでは、余りに無責任というものです」

レーフラムは反論しなかつた。艦隊将兵に対する責任を説かれれば、彼とて反論のしようがなかつたのだ。

が、彼が食事のトレイに手を伸ばした時、エルヴェニツクの声がまたしてもシャブリが艦隊の中央付近に強襲してきたことを警告する。

「少数……約五〇乃至六〇。速い……重巡洋艦だ。注意！」

「ルウまでは？」

またレーフラムの目は戦闘を向いてしまつた。メイリアは言葉を挟むきつかけを失い、立ちつくすしかない。

「あと五・五時間」

「艦列を崩すな、艦砲で応戦し、艦載機は出すな。ルウへ着くのが先決だ」

ル・ヨント巡洋艦は傍若無人に暴れ回つて連邦艦隊の艦列を掻き乱す。数隻が戦艦の巨砲に捕捉されて爆発四散するが、それでも彼らは恐れを知らぬかのように波状攻撃を繰り返して、遂にその一艦は『シグナ・フォース』号の至近にまで肉薄して来た。

「右舷陽子砲列斉射、目標至近！」

砲術長が叫び、『シグナ・フォース』の陽子砲が斉射を浴びせかけるのと、ル・ヨント巡洋艦の主砲が白熱の光の束を吐き出すのが同時だった。瞬間、巡洋艦は数十本もの射線に縫い貫かれて蒸散したが、『シグナ・フォース』もまた、強烈なエネルギー・ビームにしたたか脇腹を蹴り飛ばされて激しく動揺した。

「きゃあっ！」

馴れていなかったメイリアはもの見事に足元をすくわれてバランスを失った。持っていた兵食のトレイが手を離れて吹き飛び、壁にぶちあたつて容器を四散させる。メイリア自身も、素早く立ち上がったレーフラムが抱き止めてくれていなかったら、トレイの後を追つていたに違いない。訓練を受けていない彼女では、数Gもの加速度で壁に叩きつけられれば一箇所や二箇所の骨折では済まなかつただろう。

「磁力靴を作動させていなかったのか？」

「す、済みません」

レーフラムの腕に抱えられて、メイリアは耳まで真っ赤になる。鍛えられたレーフラムの腕は、羽毛を扱う軽やかさでメイリアをフロアに立たせる。

「謝ることはないよ、メイ。悪いけれど、もう一度食事を持って来てくれないか……さっきのは食べ損なつてしまつた」

少し驚いたように睜つた碧い眸が、しかし、一瞬のちには嬉しそうに輝いた。

「了解です、提督」

リュピアリアでの会戦が始まったころ、シャゴール・グリューガー連邦空軍少将指揮下の第一辺境艦隊は、アルウェスタの隣接恒星系ネフェルトの哨戒任務中だった。辺境艦隊は文字通り辺境警備艦隊であり、重巡洋艦『オリシウス・シオン』号以下、約七〇〇隻、約一〇万人がグリューガーの指揮に服している。

グリューガー少将は、連邦の中央に位置を占める植民恒星区コーラルの出身である。コーラルは、恒星区として比較的長い歴史を有するにもかかわらず、依然、連邦の直轄支配下にあつた。

カルシユ自体の持つ穢かさが、その原因だった。

豊かな気候に恵まれた有人惑星……カルシユ、バストラール、グラフィノシードルなど……が多いコーラルは、連邦全体の天然食品の五割以上を一手に生産していた。更に、連邦圏の中央を占めるという絶好の地理的条件から、連邦圏の商業航路の殆ど全てがコーラル、特にカルシユを寄港地に選んでいるほどだった。首都レアナは中継貿易の中核として、連邦首都コーネットとならぶ富の集散地として知られていた。

この豊かな恒星区と恒星系を、連邦の大資本は放置しては置かなかつた。開拓以来、連邦の大資本は競ってカルシユに莫大な投資を行い、その一方でカルシユの経済的支配権を争って来ていたのである。カルシユの歴史は、そのまま連邦の巨大資本の興亡の歴史であり、そして、その最終的な勝者となつたのが、連邦最大の巨大コングロマリット・シユレフだった。

グリューガーは、軍人としての経歴をカルシユ駐留艦隊付き士官に始め、艦隊参謀、戦艦『カルトウォール』艦長などを経て、第一辺境艦隊司令官となつたのは昨年。歳は三三歳、勇猛な軍人であり、同時に謀将としても才能にも恵まれ、本来ならば、ジェレスタやシユタルクラと肩を並べて制式艦隊司令官の椅子を用意されるべき人材だった。その彼が、閑職とも言つべき辺境艦隊司令官・少将の地位に甘んじなければならぬのは、一にかかつて、彼が植民惑星カルシユの出身である、ただそれだけの事実だった。

全土を巨大資本に支配され、自らの政府を持つことも、連邦憲法典の保護を受けることもできないカルシユ市民の不満は、しばしば暴動という形を取って噴出した。連邦政府は、連邦空軍の強大な武力にものを言わせて、情け容赦なくこれを鎮圧した。それがゆえに、連邦政府はカルシユの出身者が連邦空軍の中核的地位に就くことを極端に恐れ、カルシユ出身者というだけで昇進の機会を与えなかつた。

「重力波に擾乱が生じています……何者かがワイプアウトしてくる模様です」

『オリシウス・シオン』の艦橋は、『シグナ・フォース』級戦艦ほど広くない。戦闘、航行、電子戦の各部門が個々に艦橋を占有する大戦艦の贅沢さは重巡洋艦には望むべくもなかつた。

「規模は？」

艦隊参謀長ジュンガ・オリア准将の問いに、電子戦士官は、約一万六〇〇〇から七〇〇〇隻の大艦隊、或いは大船団、と答える。

「敵ですね……」

オリアは、電子戦士官の樂觀、或いは希望的観測を一言で却下した。商業船団の航行は禁止されているし、また一万隻以上の大船団が、辺境のネフェルトに現れるべき理由もない。

「撤退準備、艦隊指令部に通報。我、ネフェルト宙域において、敵艦隊と遭遇せり」

一〇〇隻に遥かに満たない小艦隊で一〇倍以上の敵を相手にする無謀さとは、グリューガーは無縁だった。艦隊の先頭を切っていた哨戒艇、宙雷艇隊を反転させて恒星系外縁部へ向かわせ、直率する巡洋艦集団で後方を護衛する。

「敵艦隊、ワープアウト！」
「何い？」

共和国艦隊の動きは、しかし、グリューガーの予想を遥かに超えて迅速の一語に尽きた。重力波の異常をキャッチしてからワープアウトするまでの時間が、連邦空軍における常識的数値の半分以下、しかも予め辺境艦隊の存在を知っていたかのように高速艦艇を放つて後方からの包囲運動を開始する。

「艦隊司令部への報告は？」

オーリア参謀長の問いに、電子戦士官は絶望の面持ちで首を振る。凄まじい出力を持つECMが辺境艦隊を包囲し、それを突破することは不可能だった。

「逃げ切れると思うが、参謀長？」

オーリアの返答には樂觀の甘さはかけらほどもなかった。

「無理です。向こうの方がいい船を持っています。足が速い、多分腕力も遥かに上でしょう」

「戦つ、しかないか……」

「ありません……我々が、連邦空軍将兵としての義務を果たすとすれば、です」

オーリアの言葉は、皮肉と呼ばれる範囲を超えて、連邦への危険なまでの反感を露出していた。辺境艦隊の将兵の殆どがコーラル恒星区

の出身である。彼らの故郷を圧迫して止まぬ連邦の為に、勝つ見込みもない戦いを敢えてするのか……がグリューガーは、敢えて参謀長の言葉を無視する判断を下したらしかった。

「全艦、合戦準備。分断されるな。敵の包囲を突破してユアロフレスタへ向かうぞ。皆、死ぬな。こんなところで死んだって、何にもいいことなどありません！」

辺境艦隊は包囲を振り切るうとして、球形陣をとって速度を上げるが、共和国艦隊の対応も迅速だった。案々と辺境艦隊の動きに対応すると、後方を弓形に半包囲して、射程突入と同時に大型艦の一点集中射撃が辺境艦隊の後方集団を叩きのめした。

最初の一撃で数十隻が爆発の白光にとりこまれた。グリューガーの旗艦『オリシウス・シオン』ですら煽りを受けて、激震に見舞われた中古のビルよろしく激しく揺動する。

「艦載機、急速接近、約一〇〇〇！」

オペレータの声は絶叫に近い。辺境艦隊は航宙母艦を持たない。

ル・ラントの単座艦載機は、辺境艦隊の撃ち上げる対空砲火の火線を身軽な動きでかくくぐって肉薄し、超融合核ミサイル、あるいは粒子ビームを至近距離から放ってくる。たちまち、直撃を浴びた艦艇が超融合爆発の純白の閃光に取り込まれて四散していく。辺境艦隊の必死の反撃も、兵力と火力、そして個々の艦艇の性能の圧倒的な差の前に殆ど効果を示すことなく、急激に衰えていきつつある。

開戦一時間にして、辺境艦隊は組織的な反撃能力の半ば以上を失っていた。旗艦『オリシウス・シオン』は健在だったが、艦隊は少数のグループに分断され、相互の連絡も途切れ始めていた。

「司令官閣下、敵からの通信です」

オペレータの声が『オリシウス・シオン』ブリッジに響く。

「映像か？」

グリューガーは血に汚れた顔を振り向ける。直撃弾の衝撃で吹き飛んで来たパネルの破片を額で受け止めるのだ。手当てをした軍医は破片が頭蓋骨を半ば穿っていた、と告げ、あとほんの少し破片の飛来速度が速ければ、頭の上半分を削ぎ落とされていたらどうと、肩を諷める。『運が良かったのですね』というのはいさかいな感想かもしれないが、このときグリューガーが戦死していれば、歴史は変わっていただろう、と歴史上のifの誘惑に抵抗し難い魅力を感じる歴史家も多いのだ。

「いえ、電文です」

「読め」

「は、降伏せよ、寛大なる処遇を確約す。ル・ラント共和国宇宙軍第一艦隊副司令官ヤン・トゥール少将……です」

降伏……か。グリューガーは苦笑う。最後の一兵まで戦つたのは勇壮だが、彼の好みではない。彼の艦隊はよく戦った。絶望的に不利な状況下であらんな限りの戦力を振り絞って戦い、兵力の半ばを失った。

「参謀長……」

「は……」

「貴官はどう思ひつ？」

「司令官閣下の判断にお任せします」

表情が降伏に賛意を示していた。グリューガーは頷いた。

「オペレータ、降伏を受諾する。発信せよ……我、降伏す。願わくば、麾下將兵への処遇の寛大なることを……」

辺境艦隊が約五〇〇隻を失ったのに対し、共和国艦隊は数隻の駆逐艦と三〇機余りの艦載機を破壊されたに止まる。まさに一方的な戦い

である。

「思ったより速く片がつきましたね」

戦艦『ドルスファイ』では、第二艦隊副司令官のヤン・トゥール少将がマールクに話しかけていた。

「いや、予定通りさ、ヤン」

マールクは疲れたような表情でこともなげに答えていた。戦勝とは言え、まだ序戦に過ぎない。浮かれるには程遠い気分だった。

「あれはシエルメスの辺境艦隊だ。生粋の連邦空軍艦隊じゃない。植民惑星の出身者を中心に行っている筈だからね。植民惑星が、母星に反感を持つことが多い。これは我々も苦い教訓として学んだ筈だよ」

「ドレド戦役ですね」

「そういうとき、最初は軍人の義務として戦うだろうがね、負けがはつきりしてくれば、自分たちの故郷を支配している他人の為に、全滅するまで戦う馬鹿はいない。人間の愛国心なんてものは、国家なんて言う組織に対して働くようにはできていないものなんだ、本来はね……国家への忠誠なんて、国家が自分と自分の家族を守ってくれるだけのものではないさ」

言ってから、マールクは言い過ぎたかな、という表情になった。本国の愚劣極まる政治家達と高級官僚のことを思うと、さしものマールクも冷静さを保てない。

「捕虜はドライバオム要塞に送る。捕獲した敵艦も可能な限りは要塞へ送ることにする。連邦の建艦技術を研究させて貰ういい機会だ。捕虜を『リヴェンジ』号へ移し、第二〇三哨戒集団に護衛させてドライバオムへ向かわせる。ワープ可能な捕獲艦は、通信装置、火炮を取り外した上で連邦の要員に操艦させる。航行不能な艦は、利用可能な登

載物を収容して後、現宙点で爆破させよ」

「命令受領、そして了解。以上、発令致します」

司令長官副官のローク少佐が言葉少なにこたえ、命令を発令するのを、マールクはちよつと奇妙な目で見ていた。実に有能な副官であり、ミュッケルの推薦の言葉通り、マールクとしては少なからず助かっているのだが、彼女は極端なほど口数が少ない。復唱しなくても命令を誤ったりしない、抜群の記憶力に恵まれているのだが、無口の原因がそれだけとはマールクには思われぬ。彼女は自らの身の上を語らぬことは勿論、任務以外の話題を口にするこすら殆どないのではないかと、と思われるくらい徹底した無口さを守り続けているのだ。

「士官学校以来、ずっとそつだということですよ」

ミュッケルもそれ以上のことは知らないようだった。

「『レフィール』と『ヴィッツシュベツト』に連絡をとってくれないか、最終的な打ち合せがしたい」

ドレスンとヤンデキフィティの旗艦である。

短い協議の結果、二〇〇隻ほどの哨戒艦艇をその宙域に残したマールク艦隊は動き出した。予定通りアルヴェスタへ進出、ミュッケル艦隊と呼応してシエルメス艦隊を一挙に包囲覆滅する。ミュッケルはリユピリアア恒星系で敵艦隊との遭遇戦を演じ、駆逐された連邦の艦隊はアルヴェスタへ退く筈である。

マールクは、ある意味では彼以上の用兵の才能を持つミュッケルを信頼し切っていた。五割増しの兵力を投入し、しかもミュッケル自身が采配を揮う戦場で共和国艦隊が敗れることは考えられなかった……連邦空軍に悪魔的な用兵の天才でもない限りは。

ネフェルトからアルヴェスタへのワープに入ったのは、連邦空軍艦隊のワープアウトに先んずること約一時間余り。ワープアウトと同時に

にレーダー艦と通信艦を恒星系内にばら蒔き、敵艦隊の動きを探らせる。待つほどもなくその中の一艦が、ワープアウトを捕捉して、報告してきた。

“距離約二〇〇光秒、艦隊総数約二万八〇〇〇。第五惑星ルウの衛星軌道に向かい、最大戦速で航行中”

「思ったほど減っていないな……」

損害は連邦空軍艦隊総兵力の約一割。少ない損害ではないが、ミュッケル艦隊と正面衝突して、その程度の被害で済んだというのは奇跡に近い。もっとも、マールクは戦術上の奇跡を余り信じてはいなかったから、連邦空軍によい指揮官がいるらしい、と正確に事実を推定する。

「ミエレヤを盾にとり、不意を襲ってはどうです？」

「予想してるよ、彼らもね」

マールクは微笑ってトゥールの気負いを制する。

「強襲する。全艦隊に命令。最大戦速で敵艦隊の側面を強襲する。」

第三艦隊は艦隊の先鋒となり、敵艦隊右後背より突撃を敢行、第二艦隊はこれに直協する。第七艦隊は艦隊後衛として、命令と同時に近接攻撃に移行すべく準備すること。以上伝えてくれ、ローク少佐……先鋒を命じられた“猛将”ドレスン中将は、我が意を得たりと大きく領き、戦艦『レフィール』の指揮シートから立ち上がった。どちらかといえば、小柄なドレスンだが、戦場を前にすると、凄まじいまでの気迫が兵達を圧倒する。

「全艦、突撃！」

『レフィール』を先頭に、マールク艦隊は一斉に突撃を開始、ルウ宙域へ急ぐ連邦空軍艦隊の右側背を横撃する態勢となった。

「敵艦隊、射程内」

「撃て……」

マールクの命令はいっそ静か過ぎるほど。命令一下、数万本の超高熱の光の矢が吹き伸びた。

「敵艦隊、側面より……」

しかし、『シグナ・フォース』の巨大なレーダーはマールク艦隊の出現を的確に捉えている。カーツが回避運動を下令し、熟練した腕に操られた連邦空軍艦隊は鮮やかな艦隊運動を示して、必殺を意気込んだマールク艦隊の先制の一撃の大半に虚しく空を切らせる。

「新手か、数は？」

カーツの無表情な問いに、エルヴェニツクの統括する電子戦艦橋からは「一万六〇〇〇、ないし六五〇〇」という回答を弾き返してくる。微妙に眉を歪めたカーツは、レーフラムに視線を転じた。動揺を抱いていたとしても、それを顔に出すほど未熟な指揮官ではない。

「どつ読む？」

「我々の前面を扼し、あとから来る本体と呼応して挟撃するつもりでしょっ……」

最悪のパターン……レーフラムは後悔のほそを噛む。一撃撤退戦術に固執すべきではなく、一気に連邦圏の中枢部まで退くべきだった。

「顔が蒼いで、策は？」

「二案。前面の敵と交戦し、撃破してルウに入り持久する策。今一つはルウを放棄し、このまま連邦圏内部へ撤退する案です」

「いずれを探るか？」

「後者です。アルヴェスタを離脱すべきです。ルウへ入れたとしてもこの状況では完全に包囲され、戦略的撤収など不可能です」

敵の目的が挟撃にある以上、ルウ要塞宙域への撤退は全力を挙げてでも妨害して来るだろう。追尾する敵の主力に対してさして距離を開

けているわけではないから、これの到着以前に前面の敵を撃破してルウへ入るのは絶望的である。とすれば、恒星系離脱コースに入り、敵艦隊に直線的な追撃戦の態勢を強ければ連邦圏内部への撤退が可能だろう。

カーツは無条件にレーフラムの策を採用する。マールクとミュッケルに合流されれば、敵の総兵力は倍を超える。それに挟撃されては勝ち目はなかった。

艦列を急速に収斂させ、つっこんでくるマールク艦隊目掛けて猛烈な砲火の洗礼を浴びせかける。最初は戦艦同士の遠距離砲撃戦から、距離が詰まると巡洋艦、更に駆逐艦の主砲、宙雷を交えての砲雷撃戦、そして艦載機、宙雷艇、砲艦、突撃艇を加えての総力戦になだれこむ。マールク艦隊は数で優り、兵の練度で勝る一方、連邦空軍は個々の艦艇、艦載機の性能に優越し、火器の破壊力においてもやや上回っていたが、それだけで決定的な優勢には繋がらない。

戦いは互角で推移していった。ルウ宙域を目指す、と見せかけてその実、共和国艦隊の側面を突破してアルヴェスタを離脱しようとするカーツの意図を、マールクは素早く見抜いて連邦空軍艦隊の前面を抑圧する隊形をとる。連邦空軍艦隊の先頭を切る『シグナ・フォース』の巨砲は凄まじい威力を發揮し、ル・ラント戦艦を次々に射抜いて血祭りに上げたが、マールク、トゥール、ドレスン、ヤンデキフィティらの熟練した指揮官のもとに戦い馴れた共和国艦隊は連邦空軍艦艇を巧妙に包囲し、『シグナ・フォース』の巨砲が彼らに与えた損害に数倍する打撃を連邦空軍に加え続けていたのである。殊に、新編成であり、熟練兵の少ない連邦第四艦隊の弱点を見抜いたマールクは、控置しておいたヤンデキフィティの第七艦隊の手綱を連邦第四艦隊めがけて解き放った。

「突撃、突撃、突撃！」

鉄色の髪と瞳、マールク艦隊最年少の剽悍な提督は抑えに抑えられていた部下の戦意を鮮やかなまでに敵に向かって奔騰させた。加えてマールクが第二艦隊の二個巡航戦艦集団をヤン・デキフィティに与えて戦線に投入させた為、連邦第四艦隊の戦闘は凄惨なものとなった。

熱線砲のエネルギー・ビームが装甲を吹き飛ばし、宙雷が、中性子砲弾が、束になって襲いかかり、灼熱の閃光とともに炸裂する。搭乗員は爆風に薙ぎ倒され、中性子の見えざる旋風が血液を沸騰させ、内臓を焼け爛らせる。装甲の破片が傍若無人に飛び回り、不幸な犠牲者の首を宙に舞わせる。噴水のようにほとばしる鮮血は、既に灼熱している装甲に飛び散って白煙となって舞い踊るのだ。

カーツもレーフラムも第四艦隊の苦境を知りつつ、何の手も打てなかった。連邦空軍艦隊の全兵力は既に戦線一杯に展開し、司令部の手元には数個の駆逐戦隊しか残されていないのだ。

「第四艦隊の抵抗は限界です。あと幾らも持ち堪えられないでしょう……」

「戦線縮小……か」

第四艦隊が崩壊すれば、マールク艦隊はいわゆる旋回包囲に移り、連邦空軍艦隊を敗北の淵に突き落とすだろう……が、戦線を縮小し、持久隊形をとったとしてもミュッケル艦隊が到着すれば完全な包囲と壊滅への道しか残されていない。

「止むを得まい。少しでも可能性のある方を選択するのが我々の義務だ」

「負けた」とは決して言葉に表現しない。カーツが「負けた」と言えば、兵達の敗北感が増幅され、あつという間もなく連邦艦隊は崩壊する。『シグナ・フォース』号から通信とシャトルが飛び、連邦空軍艦

隊は戦いつつも後退に移り、戦線を縮小させ始めた。

マールク艦隊旗艦『ドルスファイ』号もこの動きは的確に捉えていた。

「後退し、球形陣に再編して持久戦に持ち込むつもりか……ネイにしばを噛まれるのを恐れてるんだな……」

「全包囲に移りましょう。勝機です！」

「そうしようか……」

ふっと、マールクの表情が迷った。包囲は容易だが、艦隊の散開を意味する。

「いや、ちょっと待ってくれ、ヤン」

「閣下？」

ヤン・トゥールの不審そうな声を聞き流し、マールクは戦闘情報表示スクリーンに見入る。

連邦空軍がただ単に後退しているのなら問題はない。艦隊兵力の全てを挙げてこれを包囲し、やがて到着するであろうミュッケル艦隊と協力して、八方向から砲火を浴びせて戦力を削ぎ落としていけばよい。連邦空軍には増援とすべき艦隊兵力は最早、存在しない筈だった。しかし、もしこの後退が戦術的後退だったら？ 戦線を縮小し、持久戦に持ち込むと見せかけて、その実、包囲運動で薄くなったマールク艦隊の艦列を穿貫突破するための陽動だったら……

無論、凡庸の将には不可能。が、彼らはミュッケルにはしたたかに叩きのめされてきている筈である。にもかかわらず、マールク直率下の新手の共和国艦隊と互角に戦っているではないか……連邦空軍艦隊司令部の戦術能力は自分達と互角だ……その認識が、マールクをして決断にためらわせた。

「敵艦隊の戦線崩壊まで、現状隊形にて攻撃を継続せよ」

レーフラムの頬が僅かに紅潮した。共和国艦隊は包囲してこない、という報告が彼の勦を刺激したのだ。彼らは包囲網を突破される事を恐れている。常識的にいえば、ここで全包囲に出てもおかしくはない戦況なのだ。いや、彼がマールクであれば、必ず包囲に移る……がこの敵はそれをしない、何故……？

「成程……そつか」

低い呟きは、傍らを離れないメイリアの聴覚を辛うじて刺激した。

「え……どうなさつたんです……提督？」

「どつやら逃げ切れそつだ、全滅せずに済むかも知れない」

「……？」

訝しげなメイリアをそのままに、レーフラムはエルウェニツクを呼ぶ。

「後方の敵艦隊の動きは？」

「機雷原を突破された。二〇分で追い付かれる」

「分かった、彼らの動きを逐一伝えてくれ」

ほんの僅かだが脱出のチャンスがある。マールク艦隊とミュッケル艦隊の合流する瞬間を狙つのだ。両艦隊は合流し、今度こそ包囲して来る。が、直線的な追撃戦から曲線的な包囲運動へ、その瞬間に共和国艦隊將兵の注意は戦闘から艦隊運動にずれる。通常の戦闘に於いては殆ど、問題にもならない僅かなものだが、それでも予めそれを予測し、準備している敵にその乱れを衝かれたら……

連邦空軍艦隊は急速に戦線を収束させ、しかし制御の行き届いた反撃を示してマールク艦隊の猛攻を持ち堪え続けた。あと数時間を経ずして全軍崩壊に陥るのは目に見えていたが、一見、マールク艦隊に押しまくられ、ずるずると後退を重ねている連邦空軍の兵力がしだいに

『シグナ・フォース』号を中心として集中され始めていることにまでは、さしものマールクの戦術眼も届かない。彼の麾下、トゥール、ドレスン、ヤンデキフィティの各提督の視野とてもマールクよりも遙かに狭く、到達距離は短い。もし、マールクが千里眼であれば、ミュッケルを別動隊指揮官にしたことを心底悔いねばならなかつただろう。

「際どい作戦だな」

カーツは苦笑する。正統な戦術ではない。奇術、奇計に属するものだ。老練な用兵家であるカーツとしては、余り気乗りのない作戦には違いない。

「しかし、その通りだ。際どいが、成功の蓋然性は高い」

「ええ、勝つための戦術ではありません」

「負けないため、か……分かった、その手があるまい。ここで全滅してしまえば、この戦争、これで終わりだからな」

それでもいい……ふとそつ思っている自分に気づいてレーフラムは愕然とする。ここで連邦艦隊が全滅してしまえば、この大戦もここで終わる。そして、彼は戦争という大量殺人作業から永久に解放されるのだ。永久に……それもいい。すでに数十万を殺して来ている。手は既に汚れているのだ。今更、自分一人生き残ることは、いささか虫がよ過ぎるではないか。

が、ふと心配気な視線に気づく。

メイリアの瞳を視野に入れて、彼は我に返つた。

……何を、馬鹿な……

二万隻余の大艦隊を率いて連邦空軍艦隊を追っていたミュッケル艦隊は、ワープ明け早々にぶつかった数百万個にも及ぶ機雷原を排除してのけ、連邦空軍艦隊の後背に迫りつつあった。

「マールク閣下の艦隊が、シエルメス艦隊と交戦状態にはいった模様です」

「さすがに……」

みことだ、とミュッケルは思つ。ここ、アルヴェスタを最終的な予定戦場と見定め、敢えて艦隊を二分しての合撃戦術をとつたのはマールクの卓見だった。連邦空軍が採用するであろう一撃撤退戦術を逆手にとつて、アルヴェスタを主戦場とする。

要塞の援護を受けられず、しかも地理的にも何の要害でもないアルヴェスタで倍の共和国艦隊に襲いかかられては、連邦空軍には壊滅以外の道は残されていない。

「少し手間取りましたね、艦長」

「機雷原は予想しておつたのですが、些か多過ぎました」

ヴェルエリユーネ大佐は少々面目なげに応える。連邦空軍の豊富過ぎる物量は、共和国宇宙軍の予想を超えるものがある。とんでもない相手と戦争を始めてしまったものだ、とミュッケルは小さく溜息をついた。勿論、ヴェルエリユーネ大佐以下の部下達には聞かせてはならない溜息であるが……

「……まったく、こちらの予想を超えるのが物量だけならいいんだが……」

できるなら連邦空軍と戦つのも、これ一回切りにしてほしい。何年も戦い続けるには手強過ぎて疲れてしまつ。

「閣下の方の戦況は分かりますか？」

「は、閣下のコンソールの方へ回してあります」

ミュッケルのコンソールに戦闘情報が表示される。マールク艦隊が連邦空軍艦隊を横撃し、巧妙に前方へ回り込んで退路を断ち、その戦線を圧迫していくのを、ミュッケルは安心し切つた表情で眺めていた

が、不意にその端正な眉の辺りに奇妙な困惑が漂い出した。コンソールを操作して、艦隊の動きをブレイ・バックする。一度だけではなく二度、三度と……繰り返す内に眉を覆い始めていた影は消えるどころか、見る見る広がり始めた。

「まさか……まさか、そんな……」

「どうなさいましたか、閣下？」

「速度を上げられますか、艦長？」

切迫したミュッケルの口調に、ヴェルエリユーネは感電したように緊張する。ミュッケルが口調を切迫させることは滅多にない。あれば、掛け値なしに非常事態である。

「一五パーセントいけます」

「可能な限り増速。連邦空軍の背を叩きます。気のせいならいいのですが……」

ミュッケルの命令一下に、共和国艦隊は速度を上げる。上げながら艦隊を展開し、包囲運動に入る準備に移る。高速航進中の展開は極めて危険だったが、歴戦のミュッケル艦隊は鮮やかに司令官の命令に応えた。

“ 後背の敵艦隊、増速。間もなく射程に突入 ”

「^{アニヒレータ}超熱線砲発射準備」

三隻の『シグナ・フォース』級戦艦の登載する超熱線砲と、戦艦集団の主砲斉射を一点に集中して包囲網の一面を破り、脱出する。チャンスは一回。艦隊合流に伴う、艦隊運動の乱れは一瞬であるうし、超熱線砲発射のチャンスももう二、三回が限度。比類ない破壊力を誇る超熱線砲も、発射速度では通常の艦砲に遥かに及ばない。外せば、二度目のチャンスはない。

「発射準備、よし」

「待機せよ」

機を見失えば全滅必至。用兵者としてのカーツの勘に全てを委ねるしかない。

戦闘情報表示スクリーンに映し出される共和国艦隊の動きが微妙に変わった。直線的な追尾運動が一時的に停止し、ついで艦隊の艦列が変動して外側に膨れ、曲線的な包囲運動へ……

「今だ、撃て！」

連邦空軍の通信回路をカーツの命令が駆け巡り、『シグナ・フォー』の超熱線砲が途方もないエネルギーの奔流を吐き出した。一瞬の何分の一か遅れて、他の連邦艦隊が共和国艦隊の艦列のただ一点目掛けて、狂暴な破壊力の抑制を解き放ち、包囲すべく側面に回り込んできたマックスの第五艦隊の中央を貫通した。

「なにー！」

マックスは愕然として指揮シート上に棒立ちになった。艦隊の先駆重巡洋艦の数個集団が一瞬に純白の爆発光に巻き込まれ、閃光が消えた後には巨大な間隙が穿ち抜かれていたのだ。しかも、連邦艦隊の第一撃、第二撃が連続して彼の艦隊を叩き続け、マックス艦隊の損害は爆発的に増大していく。

顔色を変えたのはマックスだけではない。『ドルスファイ』上のマールク、『ドレスト』のミュッケルとも等しく愕然として指揮シートを蹴っていた。

ミュッケルは『間に合わなかったか？』と叫び、マールクは『セルティを援護しろ』とトゥールに向かって怒鳴る。共和国宇宙軍の誇る二人の名将が、これほど狼狽を露わにしたのは、これがはじめてだった。

共和国第二艦隊が急速に進出し、マックス艦隊の後方に回り込もうとするが、苛烈なほどの集中射撃に曝され、艦列をずたに切り破られたマックス艦隊は戦線に踏み止まることができずに、雪崩を打って潰乱状態に陥った。

「退くな、一〇分だ、一〇分我慢しろ、敵の反撃は一時でしかないぞ。戦線を守れ、敵を離脱させるな！」

マックスの必至の督戦も奏効しない。潰乱したマックス艦隊の一部は、援護に回ったトゥール艦隊の前衛集団までを混乱の渦に巻き込んでしまい、マールクとトゥールは目の前を整然と離脱して行く連邦艦隊を唾然として見送る羽目になった。

「やられた……やつぱり……」

ミュッケルは指揮シートに長身を沈める。包囲殲滅の最大のチャンスが、今、目の前を擦り抜けて行く。

「追撃命令を！」

「アルヴェスタを出る所まで許可します。ワープして追うことは禁止します」

「しかし……」

「補給が続きません」

損傷した敵艦艇の大半はこれで討ち取れるだろうが、包囲殲滅が完全に成功した場合に得られるはずだった巨大な戦果……連邦空軍の戦意破壊という戦略的勝利は完全に逸してしまった。

……予想を超えていたのは物量だけではなかったな……

無然たる思いが彼を捉えて放さない。国力において決定的に不利を加えて戦術、戦略能力に於いて互角……その相手と、これからなお数年にわたって戦い続けねばならなくなったのだ。

……この戦争は上手くいかない……

少なくともドレド戦役のようにはいかない。今度の戦勝は単に戦術的勝利にすぎず、共和国の究極的敗北をほんの少し、先へ延ばしたにすぎないのではないか……

整然と艦隊を組んで離脱して行く連邦艦隊の映像を前に、『ドルスファイ』のマルルクは更に慄然たる思いだった。彼とて神ではない。敵が無能であるか、少なくとも凡庸であれば彼のミスは問題にならなかった筈なのだ。ほんの僅かな判断の誤りを見抜き、付け込んだ連邦空軍の首脳に、彼は軽い恐怖を覚えていた。

マルルクもまた、トゥールとドレスンにアルヴェスタ恒星系内までの追撃を許可しただけで、深追いは避けさせた。ナキャソ、ドライバオム両要塞の補給能力の全てを挙げて、ここまでの進襲が、共和国艦隊の限界だった。兵站の余力はこれで使い果した。再度の遠征が可能になるまで半年かかるか、それとも一年……？

「閣下、ミュツケル中將から通信です」

「うん……」

「コンソールに回してあります」

「有難う、少佐。遮音しといてくれないか？」

「了解です、閣下」

遮音フィールドが指揮シートを包み、マルルクは柔かな空気の壁に包まれた感触を味わった。

「わたしだ……」

「敵の三分の一以上を取り逃がしました。会戦そのものは勝ち、ですが」

「私のミス、だな、ネイ」

「おそらくそつでしよう」

「ミュツケルは容赦なく評した。」

「大した連中です。閣下にミスをさせました。ますますこの戦い、難しくなつたと思いますが……」

「ああ、困つたねえ……これであつさり負けてくれないかな」

「甘過ぎる判断であることは御存じでしょう。それより閣下、今後の方針ですが……占領地を確保しろ、とかなんとか仰有る方々もおられるでしょうが」

「ほつとくさ。口で主戦論を唱えて、人に戦争させるくらい楽なことはないからね。戦果と損害の集計を急がせるとしよう。それと連邦空軍の遺棄資材、捕獲艦艇、ついでにあの野戦要塞もばらせるものはばらして頂いて帰ろう」

「またオペレーション・コクローチですね」

抑えた微笑が、ミュツケルの端正な表情を彩つた。敬礼し、通信を切ろうとして、ふと思ひ止まる。

「閣下……」

「うん……？」

「死にたくはないものです」

「お互いにね……死ぬには馬鹿馬鹿し過ぎる戦争だ。生き延びたいものだな」

後、最終戦場となつた恒星系の名前から「アルヴェスタの会戦」と呼ばれることになるこの戦いは、数量的にはル・ヤント共和国の圧勝に終わった。

シュネーゼル、ネフェルト、アルヴェスタの三恒星系で会戦が行われ、連邦空軍は参加兵力の六割に当たる一万二七〇〇隻近くの艦艇を喪失、または捕獲され、未帰還兵と負傷兵は一七二万六五〇〇名余に

達した。開戦直後の第一艦隊の全滅と合わせ、わずか二月月の間に、連邦空軍は一万七〇〇隻以上の戦闘艦艇と、二〇〇万をはるかに超える戦死傷者を出し、ヴィルワ、ネフェルト、アルヴェスタなど辺境恒星系の維持を放棄、連邦艦隊主力はアルヴェスタから更に二〇〇光年後退したユアロフレスタ泊地に退避せざるを得なくなつた。

対するにマイルク艦隊の損害は喪失、ないし大破艦艇一七〇〇隻弱死傷者一―万九〇〇名余りだったが、ユアロフレスタに退避した連邦艦隊を追撃することなく、艦隊を纏めて連邦圏を離脱した。

第六節 緋の黎明

無意味な戦いをしてしまったのではないか。

レーフラム・ネレイドは何度も自問し、苦い思いを噛み締めていた。戦わねばならなかったのは事実だ。しかし、結果としてマールクらしいように手玉に取られたのは彼、彼自身なのだ。

……戦略的には勝ったのかもしれない……

戦術的にはどう弁明もしようのない大敗北である。六割の兵力を失い、敵に与えた損害は絶対数で一〇分の一以下。

しかし、連邦は会戦には敗れたが全滅を免れ、しかも共和国宇宙軍にこれ以上の連邦圏侵攻を断念させている。連邦艦隊の殲滅を狙ってきていた共和国宇宙軍にとり、“アルヴェスタの会戦”は明らかな失敗なのだ。劣勢な連邦空軍はよく戦い、会戦の戦略的勝利を手にしたとも言えなくはない。

しかし、レーフラムはその考えを肯定する気にはとっていない。

会戦での二〇〇万人近い死傷者のことを考えると、“戦略的勝利”などという言葉の何と空疎なことか。

「メイ……」

カーツがメイリアを呼ぶ声を、レーフラムは遠くで聞いていた。

「参謀長を医務室へ。会戦は終わった。休むように」

頷き、メイリアはレーフラムに声をかける。レーフラムは首を振った。

「命令だ」

事務的なカーツの声が彼の耳を打つ。

「反問は許さん。今次会戦は決して全敗ではない。そのことを知らぬお前でもあるまい。今は休め。休んで次に備えるのが、艦隊参謀長たるお前の義務だ。以上――」

「死んだ者には次回はありません」

「聞こえなかったのか、以上だ」

「そつだ、今は休めよ、レフィ」

ナカースルが口を添える。

レーフラムは視線を巡らし、言い放った。

「きみにまで心配して貰う必要はないよ、レイ。自分のことは自分が一番よく分かっているつもりだ」

メイリアも驚いたほどのそっけない口調。ナカースルの頬にさっと血が上った。

「何だと！」

ナカースルの激昂は、しかし、それを上回る叫びにかき消された。

「卑怯です、提督！」

「卑怯だって？」

レーフラムは言さめた。まさかメイリアの口からその言葉を聞こうとは思わなかったのだ。

「死んだ人たちは甦りません。あなたが、どんなに自分を責めてみても、死んでしまった人たちは。この上、ご自身も死んだ人たちの中に入ろうとなさるのですか。それでは死んでしまった人たちは納得しません。参謀長は、御自分を責めることで、死者に対する責任を放棄しておられます」

「厳しいね」

「そんな姿は見たくありません！」

メイリアの碧い眸の縁がほのかに紅くなっていた。カーツとナカールが、ほつ、という表情になって二人を見比べる。

「メイの言う通りだ、それ以上、自分を責めるな、レフイ」

一時の激昂を納め、ナカールもメイリアの肩を持った。

「大人しく医療室へ行けよ。メイを泣かせたりしたら、明日からお前の命令をきくやつあ、本艦の中にはいなくなるぞ……なにしろ、メイは本艦のアイドルだからな」

ナカールらしい言い回し。『シグナ・フォース』号の搭乗員は、メイリアと会話を交わすことを好み、彼女が搭乗員の一員であることを歓迎していた。レフラムは漸く白暫に微笑を浮かべる。

「わがまま、だつたかな……」

「ひでえわがままだ。エイミィにどやしつけられてこい」

「そうしよう……」

シートを立ち、メイリアに伴われて医療室へ向かう。向かいながら、彼は会戦に勝ち、おそらくは勝ち誇っているだろう。ユント軍のことを思っている。

緒戦には敗れた。しかし、戦争は未だ終わっていないのだ。おそらく数年後、連邦とル・ユントはその立場を逆にしていくだろう。前途は未だ遠いのだ……思ってから、彼は自分の心の動きに軽いショックを受ける。自分のどこに、これほどの好戦性が潜んでいたのだろうか……

ふと、傍らによりそうように歩むメイリアの存在を、彼は急に意識した。

彼女の存在がなかったとして、自分はこれほどまでに好戦的ではいられたらどうか？

「難しい戦いになったな……」

『ドルスファイ』から『ドレスト』へ移ったマールクは、戦勝祝いのパーティからミュッケルとともに抜け出していた。ミュッケルの私室で戦利品の白ワインを挟んで差し向かう。

会戦の勝利を報告し、講和のチャンスである、と指摘した報告書に対する、共和国政府主席ヒューレット・ザークからの訓令は、マールクを徹底的に失望させた。

“この戦いは、ル・ユント共和国市民八〇億の生命と宇宙の大義を賭した正義の聖なる戦いである。市民は、その総意を挙げてこの聖戦に自らの生命を捧げる覚悟であり、共和国政府は拳国一致、国民精神の発揚と結集を図り、聖戦完遂のためあらゆる努力を惜しまないであろう……云々”

戦争は政治の手段でしかない。政治は利害でのみ動く。戦争の正義はあり得ないし、聖戦などがあるう筈もない。一国の元首ともあろうものが、正義の戦いだと言い、聖戦だと唱える。本気だしたらザーク首相は狂人が馬鹿だろうし、市民の好戦的気分迎合しているのだとしたら三流以下の煽動政治家に違いない。

「どつちかな？」

「姉は、馬鹿だ、と言っていました」

「やれやれ、君の姉上の辛辣さには負けるよ」

過去、多くのクーデター首謀者が抱いたであろう思いと同質の衝動が、マールクの胸の内にたゆたっていた。クーデターを起こした多くの軍人の中には、政府の余りの腐敗ぶりにたまりかね、我こそ、と思つた者が少なくないのではないか……マールクはそう思つた。

しかし、病気が治らんからって、劇薬を服用しようもんだ。

視野の狭い、唯我独尊的な軍人のクーデターは、事態を悪化させこ

「それ、何ら根本的な解決をもたらさない。病める民主主義を救えるのは、主権者たる市民一人一人ではないのだ。」

「疲れることだがね、止むを得ないか……」

「閣下……」

「ミュッケルが長い沈黙を破った。」

「うん……?」

「“アルヴェスタ会戦”で、閣下は共和国に一年か二年の猶予を与えられました」

「ああ……」

「それで、終わりなのですか、閣下」

「連邦空軍に対して戦術的勝利を上げ続けられれば、今や衆愚政に陥っている共和国の市民は制限講和では納得しなくなる。ドレスンが言ったように、もっと勝て、もっと勝て……なのである。正直いって、マールクは馬鹿馬鹿しかった。」

「それでもこの戦争をお続けになりますか?」

「勝って喜ぶのは誰か。参謀本部と政府の一部の政治家者だけではないか。ミュッケルは憤りを込めたエメラルド・グリーンの中で上官の目を突き刺すように凝視する。」

「閣下の策を用いれば、たしかに連邦は動揺します。しかし、それによってまた数百万の犠牲者が出ます。御承知の上で、その策を用いるとおっしゃるのですか?」

「独裁国家に住んでいるのなら、市民には責任はない。ところが、ル・ラントはそうじゃない。戦争をしているのは市民の選んだ政府なんだ。今の政府を支持する以上、市民は自分の選択に対する責任上、戦場に出なくちゃならないんだ」

「詭弁です、閣下。閣下ほど戦争を嫌悪されておられる方は宇宙軍に

はほかにない筈です。その閣下が、何故 こんな馬鹿げた戦争に勝とうとなさるのです?」

「負ければいい、そういうのかい、ネイ」

「反問され、ミュッケルは絶句した。」

「そうは、申しません、ただ……」

「ミュッケルは言葉に窮したように、視線を泳がせた。彼にしたところで、わざと負けよ、などとマールクに言うつもりはなかったのだから。」

「ただ、納得できなかった。何故に戦わねばならないのか、そして誰の為に……?」

「ネイ……」

「……?」

「連邦の司令官達も、同じことを考えてるのかな」

「多分……考えてはいないでしょう。どうしたら、ル・ラントを、いえ、クローネス・マールクの息の根を止められるか、今、彼らはそれしか考えてはいないでしょうね」

「マールクは溜息をつき、軍帽をとって髪を掻き回した。」

「やれやれ……疲れることだな、ネイ」

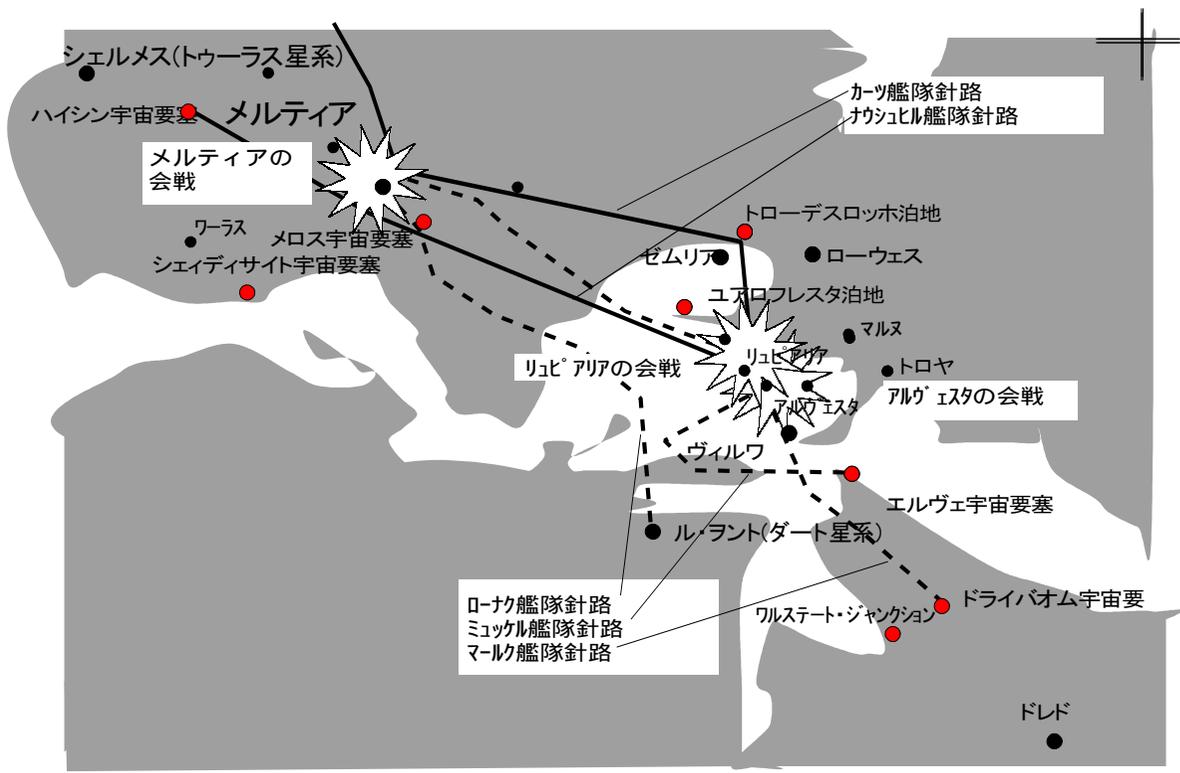
「ため息を付き、白ワインをのどの奥へ流し込む。いくらも飲まない内にグラスを持つマールクの手が緩み、〇・ニGの人工重力がマールクの手からグラスをもち離した。」

「グラスが落ちて転がる音は、厚い緩衝材に吸い込まれた。」

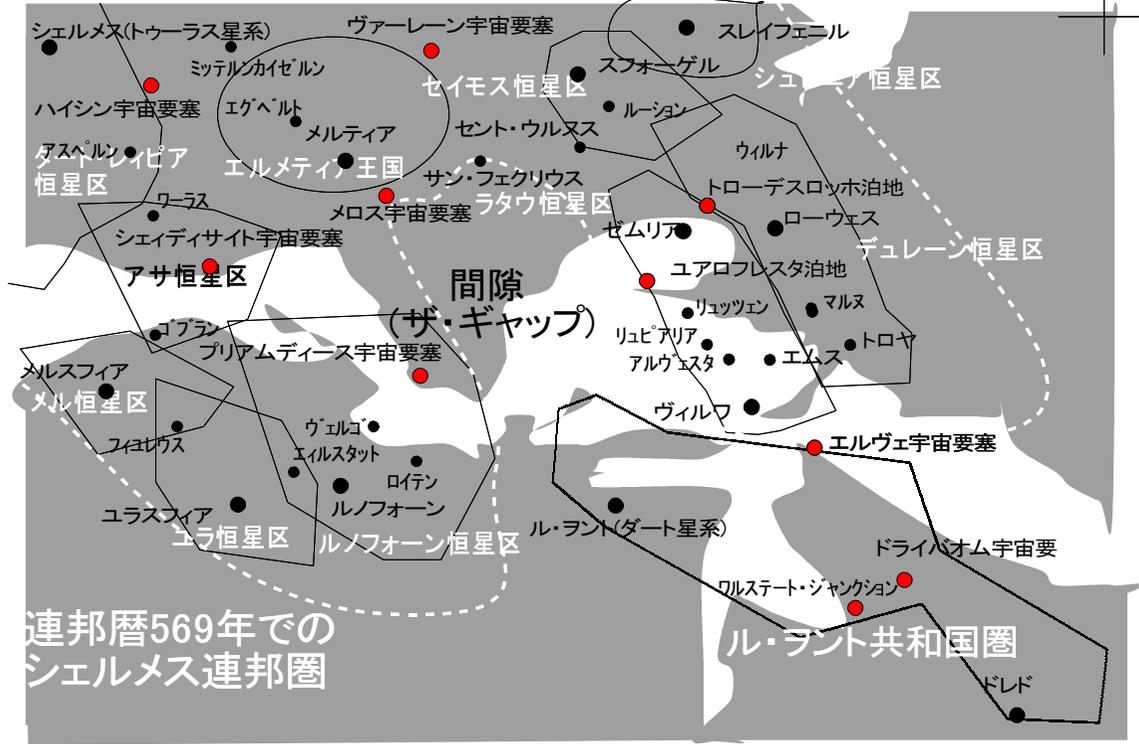
「閣下?」

「怪訝そうなミュッケルの声に寝息が応じる。苦笑したミュッケルは従兵を呼び、ワイン・グラスを干して席を立った。」

ときに連邦暦五六九年一月、共和国暦七二〇年二月。余りの流血に恐怖した歴史家によって“緋の黎明”と呼ばれる、“銀河系大戦”の第一回戦が漸く終わりを告げた。



『緋の黎明』での艦隊戦闘要図



銀河系大戦史/シェルメス連邦辺境宙域とル・ヤント共和国圏要図